秋田県文化財調査報告書第374集

大　見　内　遺　跡

―― 県営ほ場整備事業（館合地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 ――

２００４・３

秋田県教育委員会

秋田県文化財調査報告書第374集

大　見　内　遺　跡

２００４・３　秋田県教育委員会

シンボルマークは、北秋田郡森吉町白坂（しろざか）遺跡出土の「岩偶」です。縄文時代晩期初頭、1982年８月発見、高さ７cm、凝灰岩。

大見内遺跡

―県営ほ場整備事業（館合地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書―

２００４・３

秋田県教育委員会

墨書土器

文久二年薄井村絵図（雄物川町郷土資料館蔵）

序

本県には、これまでに発見された約4,600箇所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、農業地域においては、用排水路網の整備と水田の大区画化により、農業の大規模化と担い手の育成を目的とするほ場整備事業が行われております。本教育委員会では、これら地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、県営ほ場整備事業に先立って、平成14年度に雄物川町館合地区において実施した大見内遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。調査の結果、縄文時代の土器や石器が出土し、平安時代前期の河川跡からは祭祀に使われた多量の土器や木製品が出土しました。また、奈良時代後半から平安時代中頃までの間、この地に竪穴住居跡と掘立柱建物跡を中心とする集落が営まれていたことが明らかになりました。

本書が、ふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、御協力いただきました秋田県平鹿総合農林事務所、雄物川町教育委員会、雄物川町文化財保護協会など関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成16年３月

秋田県教育委員会

教育長　小　野　寺　清

例　言

1．本書は、県営ほ場整備事業（館合地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2．本書は、平成14年度（2002年度）に発掘調査した秋田県平鹿郡雄物川町薄井字大見内に所在する、大見内遺跡の調査成果を収めたものである。
3．発掘調査の成果については、既にその一部が『秋田県埋蔵文化財センター年報21（平成14年度）』や『平成14年度秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会資料』および新聞報道等で公表されているが、本報告書の記載内容がすべてに優先する。
4．本書に使用した地形図は、秋田県平鹿総合農林事務所提供の1,000分の１「館合地区ほ場整備計画図」と国土地理院発行の50,000分の１地形図「浅舞」および25,000分の１地形図「浅舞」である。
5．本書の挿図中に使用した土色表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版土色帖2000年版』を使用した。
6．本書の航空写真は、昭和51年11月６日に建設省国土地理院が撮影したものを、財団法人日本地図センターより提供を受けて掲載した。
7．本書の第５章自然科学的分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した分析報告を収載した。
8．本遺跡の発掘調査ならびに報告書刊行にあたり、次の方々より御指導、御教示を賜った。記して謝意を表します（敬称略。所属は平成14～15年度現在）。
熊田亮介（秋田大学）、三上喜孝（山形大学）、吉田歓（山形県立米沢女子短期大学）、村木志伸（東北芸術工科大学）、八木光則（盛岡市中央公民館）、伊藤博幸（水沢市埋蔵文化財調査センター）、阿部明彦・伊藤邦弘（山形県埋蔵文化財センター）、冨樫泰時（横手市史編纂・文化振興室）、小野猛・皆川順子・眞田渉・島田祐悦（雄物川町教育委員会）、佐々木順之助・佐々木ハナ子
9．本書の執筆は次のように分担した。
第１章……高橋直樹
第２章第１節……麻生彩子
第２章第２節……西村裕人
第３・４・６章……石澤宏基
10．本書の編集は石澤宏基が行った。

凡　例

1．本報告書に収載した遺構実測図に付した方位は、国家座標第Ⅹ系による座標北を示す。グリッド杭は、座標原点ＭＡ50（Ｘ＝－76919.991、Ｙ＝－33608.564、標高＝43.923m）とした位置における座標北と磁北との偏角は西偏７°30′である。

2．遺構の種類に用いた略記号は下記の通りである。

ＳＩ……竪穴住居跡　　ＳＢ……掘立柱建物跡　　ＳＫ……土　　坑
ＳＲ……土器埋設遺構　　ＳＥ……井　戸　跡　　ＳＤ……溝　　跡
ＳＬ……河　川　跡　　ＳＫＰ……柱穴様ピット　　ＳＸ……性格不明遺構

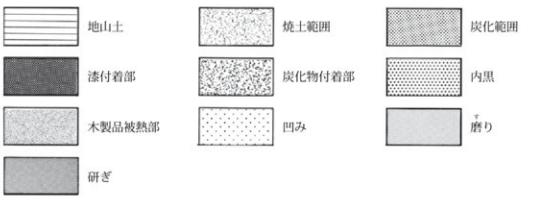
3．基本的に遺構実測図は１／20と１／10の縮尺、遺物実測図は１／２及び１／３の縮尺で掲載した。しかし、挿図割付の関係上、さらに若干の縮小を施した挿図（河川跡など）もある。各頁に付したスケールを参照されたい。

4．発掘調査の結果、検出した遺構のうち、規模の小さな柱穴様ピットについては、平面配置のみを掲載した。

5．土層の層序に用いた番号は、基本層位にローマ数字を、遺構内層位に算用数字を用いた。

6．挿図中の遺物番号は、各頁ごとに付した。

7．挿図中に使用したスクリーントーンは以下の通りである。これ以外については個々の頁に明示した。



目　次

巻頭図版
序
例　言
凡　例
目　次
挿図・表・図版目次
第１章　はじめに……1
　第１節　調査に至る経過……1
　第２節　調査要項……2
第２章　遺跡の環境……3
　第１節　遺跡の位置と立地……3
　第２節　歴史的環境……3
第３章　発掘調査の概要……11
　第１節　遺跡の概観……11
　第２節　調査の方法……11
　第３節　調査の経過……12
　第４節　整理作業の方法と経過……17
第４章　調査の記録……19
　第１節　基本層位……19
　第２節　検出遺構と遺物……19
　　１　A区の検出遺構と遺物……22
　　(1)　縄文時代……22
　　土器埋設遺構……22
　　(2)　奈良・平安時代……22
　　①　竪穴住居跡……22
　　②　掘立柱建物跡……29
　　③　土　　坑……32
　　④　井　戸　跡……43
　　⑤　性格不明遺構……44
　　⑥　柱穴様ピット……48
　　２　D区の検出遺構と遺物……60
　　(1)　奈良・平安時代……60
　　①　竪穴住居跡……60
　　②　土　　坑……62
　　③　河　川　跡……68
　　④　溝　　跡……74
　　⑤　性格不明遺構……75
　　⑥　柱穴様ピット……75
　　３　B・C区について……76
　第３節　遺構外出土遺物……76
第５章　自然科学的分析……79
　第１節　放射性炭素年代測定……79
　第２節　花粉分析……80
　第３節　種実遺体同定……81
　第４節　木製品の樹種同定……83
第６章　まとめ……85
図　　版
報告書抄録

挿図目次

第１図　遺跡の位置……１
第２図　地形区分図……４
第３図　周辺遺跡位置図……６
第４図　調査範囲図……13
第５図　グリッド配置図……13
第６図　Ｄ区遺構配置図……14
第７図　Ａ区遺構配置図……15・16
第８図　基本土層図……20
第９図　ＳＲ282土器埋設遺構・出土遺物…21
第10図　ＳＩ80竪穴住居跡
　ＳＫ75・274・275土坑（１）……23
第11図　ＳＩ80出土遺物（２）……25
第12図　ＳＩ80出土遺物（３）……26
第13図　ＳＩ80出土遺物（４）……27
第14図　ＳＩ80・ＳＫ79出土遺物（５）……28
第15図　ＳＫ79・274・275出土遺物（６）…29
第16図　ＳＢ91掘立柱建物跡……30
第17図　ＳＢ219掘立柱建物跡……31
第18図　ＳＫ59土坑・出土遺物……33
第19図　ＳＫ60土坑・出土遺物（１）……34
第20図　ＳＫ60出土遺物（２）
　ＳＫ72・88土坑……35
第21図　ＳＫ92土坑・出土遺物（１）……36
第22図　ＳＫ92出土遺物（２）
　ＳＫ99・116・117・136土坑……37
第23図　ＳＫ317土坑
　ＳＥ131井戸跡（１）……39
第24図　ＳＥ131出土遺物（２）……40
第25図　ＳＥ131出土遺物（３）……41
第26図　ＳＸ118・206・326性格不明遺構
　出土遺物……42
第27図　ＳＸ326出土遺物……43
第28図　ＳＩ02竪穴住居跡（１）
　ＳＫ01・08・11・12土坑……45
第29図　ＳＩ02・ＳＫ01出土遺物（２）……46
第30図　ＳＩ02・ＳＫ01・08・11・12
　出土遺物（３）……47
第31図　ＳＩ10竪穴住居跡・出土遺物（１）…49
第32図　ＳＩ10出土遺物（２）……50
第33図　ＳＫ05土坑・出土遺物……51
第34図　ＳＫ06・07・58土坑……53
第35図　ＳＬ04河川跡（１）……55
第36図　ＳＬ04出土遺物（２）……56
第37図　ＳＬ04出土遺物（３）……57
第38図　ＳＬ04出土遺物（４）……59
第39図　ＳＬ09河川跡・出土遺物（１）……61
第40図　ＳＬ09出土遺物（２）……63
第41図　ＳＤ45溝跡
　ＳＸ46性格不明遺構……65
第42図　ＳＤ45・ＳＸ46出土遺物……66
第43図　遺構外出土遺物（１）……67
第44図　遺構外出土遺物（２）……68
第45図　遺構外出土遺物（３）……69
第46図　遺構外出土遺物（４）……70
第47図　遺構外出土遺物（５）……71
第48図　遺構外出土遺物（６）……72
第49図　遺構外出土遺物（７）……73
第50図　遺構外出土遺物（８）……75
第51図　遺構外出土遺物（９）……76
第52図　遺構外出土遺物（10）……78

表目次

第１表　周辺遺跡一覧……７
第２表　検出遺構一覧（遺構種別）……20
第３表　検出遺構一覧（時代・調査区別）…21
第４表　柱穴様ピット計測一覧（Ａ区その１）…48
第５表　柱穴様ピット計測一覧（Ａ区その２）…52
第６表　柱穴様ピット計測一覧（Ａ区その３）…52
第７表　柱穴様ピット計測一覧（Ａ区その４）…54
第８表　柱穴様ピット計測一覧（Ａ区その５）…54
第９表　柱穴様ピット計測一覧（Ａ区その６）…58
第10表　柱穴様ピット計測一覧（Ａ区その７）…58
第11表　柱穴様ピット計測一覧（Ｄ区）……76
第12表　放射性炭素年代測定結果……80
第13表　花粉分析結果……80
第14表　種実遺体同定結果……82
第15表　樹種同定結果……83

図 版 目 次

図版１　空から見た大見内遺跡（南→）
図版２　遺跡近景
　１．調査区Ａ区近景（北→）
　２．調査区Ｄ区近景（北→）
図版３　検出遺構（１）
　１．ＳＩ80およびＳＫ79・274・275完掘
　　（北西→）
　２．ＳＩ80竪穴住居跡断面（南西→）
　３．ＳＩ80竪穴住居跡焼土（北東→）
　４．ＳＩ80竪穴住居跡カマド（北→）
　５．ＳＩ80竪穴住居跡カマド断面（北東→）
図版４　検出遺構（２）
　１．ＳＫ79土坑完掘（北→）
　２．ＳＫ79土坑断面（南東→）
　３．ＳＫ275土坑完掘（北→）
　４．ＳＫ275土坑断面（南西→）
　５．ＳＫ274土坑断面（北東→）
　６．ＳＫ79土坑遺物出土状況（南東→）
　７．ＳＩ80竪穴住居跡遺物出土状況（西→）
　８．ＳＩ80竪穴住居跡遺物出土状況(南西→)
図版５　検出遺構（３）
　１．ＳＫ59土坑完掘（南西→）
　２．ＳＫ59土坑断面（南東→）
　３．ＳＫ59土坑断面（北東→）
図版６　検出遺構（４）
　１．ＳＫ60土坑完掘（南東→）
　２．ＳＫ60土坑断面（南東→）
　３．ＳＫ60土坑断面（南西→）
　４．ＳＫ60遺物出土状況（南東→）
図版７　検出遺構（５）
　１．ＳＫ72土坑完掘（南→）
　２．ＳＫ72土坑断面（南→）
　３．ＳＫ88土坑完掘（南東→）
　４．ＳＫ88土坑断面（南→）
　５．ＳＫ92土坑完掘（南→）
　６．ＳＫ92土坑断面（北東→）
　７．ＳＫ116土坑完掘（北東→）
　８．ＳＫ116土坑断面（北西→）
図版８　検出遺構（６）
　１．ＳＫ117土坑完掘（南東→）
　２．ＳＫ117土坑断面（南東→）
　３．ＳＫ136土坑完掘（北→）
　４．ＳＫ136土坑断面（北→）
　５．ＳＫ317土坑完掘（西→）
　６．ＳＫ317土坑断面（東→）
　７．ＳＫ99土坑完掘（南東→）
　８．ＳＲ282土器埋設遺構断面（南→）
図版９　検出遺構（７）
　１．ＳＥ131井戸跡完掘（東→）
　２．ＳＥ131井戸跡確認（西→）
　３．ＳＥ131井戸跡断面（東→）
　４．ＳＥ131井戸跡断面（西→）
　５．ＳＥ131井戸跡遺物出土状況（南→）
図版10　検出遺構（８）
　１．ＳＸ118性格不明遺構完掘（南→）
　２．ＳＸ118性格不明遺構断面（南→）
　３．ＳＸ206性格不明遺構完掘（東→）
　４．ＳＸ206性格不明遺構断面（東→）
　５．ＳＸ326性格不明遺構完掘（東→）
　６．ＳＸ336性格不明遺構断面（北西→）
　７．ＳＫ60土坑遺物出土状況（東→）
　８．ＳＸ336性格不明遺構遺物出土状況
　　（東→）
図版11　検出遺構（９）
　１．ＳＩ02竪穴住居跡・ＳＫ01土坑完掘
　　（南西→）
　２．ＳＩ02竪穴住居跡断面（南西→）
　３．ＳＫ01土坑断面（南西→）
　４．ＳＩ02竪穴住居跡西壁断面（北東→）
　５．ＳＩ02竪穴住居跡カマド断面（西→）
図版12　検出遺構（10）
　１．ＳＩ10竪穴住居跡完掘（南西→）
　２．ＳＩ10竪穴住居跡断面（北東→）
　３．ＳＩ10竪穴住居跡断面（南東→）
　４．ＳＩ10竪穴住居跡確認（南東→）
　５．ＳＩ10竪穴住居跡遺物出土状況(北西→)
図版13　検出遺構（11）
　１．ＳＫ05土坑完掘（北西→）
　２．ＳＫ05土坑断面（北西→）
　３．ＳＫ06土坑完掘（南西→）
　４．ＳＫ06土坑断面（南西→）
　５．ＳＫ07土坑完掘（西→）
　６．ＳＫ07土坑断面（南西→）
　７．ＳＫ58土坑完掘（南西→）
　８．ＳＫ58土坑断面（南西→）
図版14　検出遺構（12）
　１．ＳＫ08土坑完掘（東→）
　２．ＳＫ08土坑断面（北東→）
　３．ＳＫ11土坑断面（南東→）
　４．ＳＫ11土坑遺物出土状況（南東→）
　５．ＳＤ45溝跡確認（北東→）
　６．ＳＤ45溝跡断面（東→）
　７．ＳＸ46性格不明遺構確認（南東→）
　８．ＳＸ46性格不明遺構遺物出土状況(東→)
図版15　検出遺構（13）
　１．ＳＬ04河川跡完掘（南西→）
　２．ＳＬ04河川跡完掘（南西→）
　３．ＳＬ04河川跡確認（北西→）
図版16　検出遺構（14）
　１．ＳＬ04河川跡遺物出土状況（西→）
　２．ＳＬ04河川跡遺物出土状況（南東→）
　３．ＳＬ04河川跡遺物出土状況（南東→）
　４．ＳＬ04河川跡遺物出土状況（南東→）
　５．ＳＬ04河川跡遺物出土状況（北→）
図版17　検出遺構（15）
　１．ＳＬ09河川跡南側（南西→）
　２．ＳＬ09河川跡北側（南西→）
　３．ＳＬ09河川跡遺物出土状況（北東→）
　４．ＳＬ09河川跡遺物出土状況（東→）
　５．ＳＬ09河川跡遺物出土状況（南→）
図版18　遺構内出土遺物（１）
図版19　遺構内出土遺物（２）
図版20　遺構内出土遺物（３）
図版21　遺構内出土遺物（４）
図版22　遺構内出土遺物（５）・遺構外出土遺物（１）
図版23　遺構外出土遺物（２）
図版24　花粉分析
図版25　種実遺体同定・樹種同定

第１章　はじめに

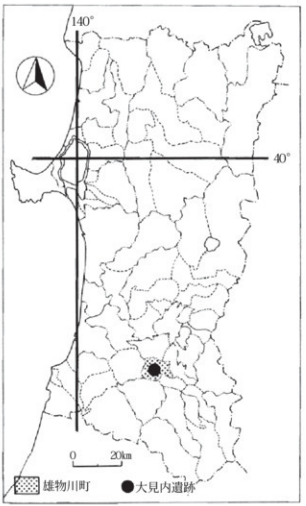
第１節　調査に至る経過

秋田県農政部（現：農林水産部）は、農業の近代化と大規模経営をいっそう推進するため、県営ほ場整備事業を実施している。本事業は農地の大区画化および農道・用排水路網の整備を行い、農業経営環境の改善と安定を図ることによって、新たな農業の担い手を育成することを目的としている。

雄物川町館合地区のほ場整備工事区域は『秋田県遺跡地図（県南版）』（1987年、秋田県教育委員会刊）や雄物川町教育委員会作成『遺跡地図カード』（1950年～継続登録中）の記載にあるように、埋蔵文化財が包蔵されていることが事前に判明していた。このため、本事業を計画・実施する秋田県平鹿総合農林事務所は、文化財保護法に基づき、事実確認と今後の対応について秋田県教育委員会に調査と指導を依頼した。これを受けて秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室は、工事区域内に係る埋蔵文化財包蔵地（周知の遺跡）および包蔵地と推測される土地については今後分布調査および確認調査が必要であることと、確認調査の結果、記録保存の必要な遺跡がある場合は発掘調査を実施すべきことを回答した。

平成13年10月11日、文化財保護室の埋蔵文化財班が館合地区の踏査・試掘を行った結果、新発見の遺跡であることが判明し、その所在地の小字名から「大見内遺跡」と命名された。同年11月21日から12月13日までの間、秋田県埋蔵文化財センターと雄物川町教育委員会が、同地区の89,700㎡を対象に確認調査を行った結果、その全域が遺跡であることが明らかになった。12月20日、確認調査の結果報告と今後の対応について、雄物川町郷土資料館で県・町・地権者代表等の打ち合わせが行われ、ほ場整備工事の切土施工となる部分（4,250㎡）は、どうしても遺跡の破壊が免れないため、次年度の発掘調査対象範囲とし、記録保存することが決定された。

上記の経緯に基づき、秋田県埋蔵文化財センターは、平成14年５月14日から８月23日の間、大見内遺跡の発掘調査を実施するに至った。



第１図　遺跡の位置

第２節　調査要項

遺　跡　名　大見内遺跡（おおみないいせき）：遺跡略号８ＯＭＮ
遺跡所在地　秋田県平鹿郡雄物川町薄井字大見内226－１外
調査期間　平成14年５月14日～８月23日
調査目的　県営ほ場整備事業（館合地区）に係る埋蔵文化財事前発掘調査
調査対象面積　4,250㎡
調査面積　4,250㎡
調査主体者　秋田県教育委員会
調査担当者　秋田県埋蔵文化財センター
　平成14年度　発掘担当者
　石澤　宏基　秋田県埋蔵文化財センター南調査課調査班　学芸主事
　高橋　直樹　秋田県埋蔵文化財センター南調査課調査班　学芸主事
　西村　裕人　秋田県埋蔵文化財センター南調査課調査班　非常勤職員
　麻生　彩子　秋田県埋蔵文化財センター南調査課調査班　非常勤職員
　平成15年度　整理担当者
　石澤　宏基　秋田県埋蔵文化財センター南調査課調査班　学芸主事
総務担当者　平成14年度　総務担当者
　佐藤　悟　秋田県埋蔵文化財センター総務課　総務課長
　（現：秋田県立湯沢商工高等学校　事務長）
　高橋　修　秋田県埋蔵文化財センター総務課総務班　主　任
　成田　誠　秋田県埋蔵文化財センター総務課総務班　主　事
　（現：秋田県立増田高等学校　主事）
　平成15年度　総務担当者
　金　義晃　秋田県埋蔵文化財センター総務課　総務課長
　高橋　修　秋田県埋蔵文化財センター総務課総務班　主　任
　田口　旭　秋田県埋蔵文化財センター総務課総務班　主　事
調査協力機関　秋田県平鹿総合農林事務所　雄物川町教育委員会　雄物川町文化財保護協会

≪参考文献≫

秋　田　県『秋田県史考古編』1960（昭和35）年
秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図（県南版）』1987（昭和62）年
秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第342集　2002（平成14）年
雄物川町郷土史編纂会『雄物川町郷土史』雄物川町　1980（昭和55）年
雄物川町教育委員会『埋蔵文化財詳細分布調査報告書』雄物川町文化財調査報告書第２集　2002（平成14）年

第２章　遺跡の環境

第１節　遺跡の位置と立地

大見内遺跡の立地する平鹿郡雄物川町は秋田県の南東部、奥羽山脈と出羽丘陵の間に広がる横手盆地の西側にある町である。北は平鹿郡大森町・大雄村、南は雄勝郡羽後町、東は平鹿郡平鹿町・十文字町、西は由利郡東由利町と境を接する。町の規模は面積73.39㎢、人口1,1364人、3,015世帯（平成15年10月末現在）である。町域のほぼ中央を雄物川が北流しており、町の東部は平坦肥沃な水田地帯、西部は出羽丘陵の一角を占める山麓地帯となっている。また、雄物川の右岸沿いに主要地方道（県道13号）湯沢雄物川大曲線が走り、町の南部には国道107号が東西に通じている。

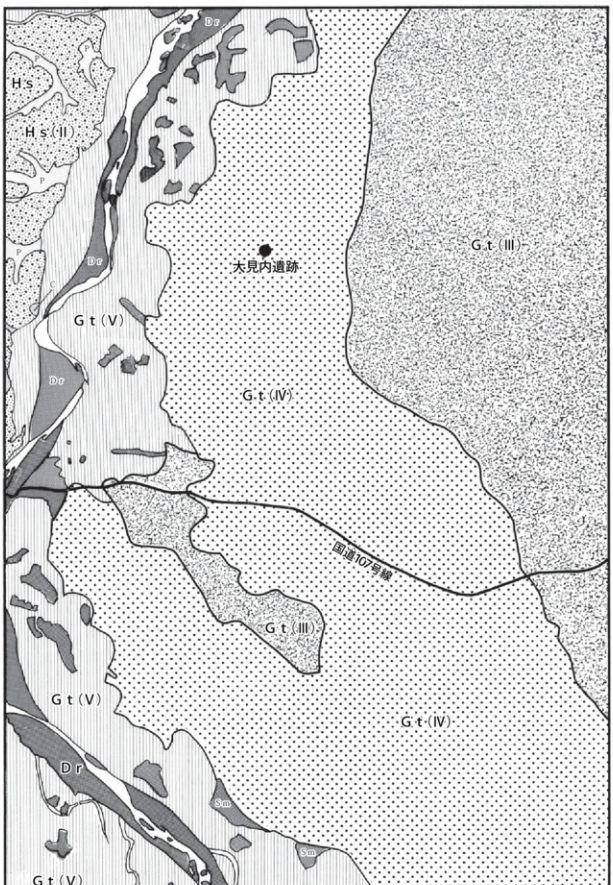
本遺跡は地形区分上、横手低地（主部）に位置する[註1]。横手低地は雄物川・皆瀬川・西馬音内川およびその支流によって形成された谷底平野である。この沖積層からなる低地はほとんど勾配がないため、雄物川とその支流が相当乱流しており、各所に旧河道がみられる。雄物川の右岸から大宮川までの間に数段の砂礫段丘が形成されているが、本遺跡は砂礫段丘Ⅳ（Higher Lowest ）に属する（第２図）。この標高40～50mの段丘堆積物は、過去に雄物川・皆瀬川・成瀬川等の諸河川が、その流路を変遷させつつ形成したものと考えられる[註2]。遺跡の表層地質は、第四紀洪積世の未固結堆積物（段丘堆積物）である。この付近の第四紀の堆積物は、泥・砂・礫の他に植物破片・炭質物・泥炭を含んでいる。このような構成内容からも河成堆積物であると言える。土壌区分上は細粒質のグライ土壌である浅津統（遺跡中心部）と、微粒質のグライ土壌である幡野統（遺跡外周部）に属する[註3]。

第２節　歴史的環境

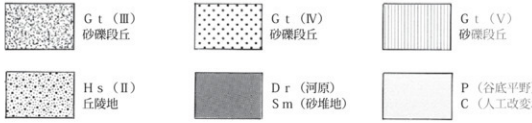
大見内遺跡の周辺には多数の遺跡が存在する。昭和62年12月刊行の『秋田県遺跡地図（県南版）[註4]』によると、雄物川町内に96箇所の埋蔵文化財包蔵地が周知の遺跡として記載されている。さらに平成13年度以降、県営ほ場整備事業を推進するため、秋田県教育委員会と雄物川町教育委員会が町内の遺跡分布調査（踏査・試掘）を行った結果、新発見の遺跡が多数確認され、周知の遺跡についても既存の範囲を見直さねばならない事実が判明している。以後は発掘調査も本格化し、平成14年に大見内遺跡と蝦夷塚古墳群が、平成15年には大見内遺跡・館野遺跡、八卦遺跡・耳取遺跡・釘貫遺跡の計６遺跡が発掘調査されている。これらのうち、大見内遺跡の周辺遺跡として、第３図上の44遺跡を掲載した。以下、時代および時期ごとに当該地域の主要な遺跡について述べる。

旧石器時代の遺跡には、雄物川町大沢の新道Ⅰ遺跡がある。佐藤鎗松氏によって石刃２点と尖頭器１点の計３点が発見され、東北大学芹沢長介氏の鑑定で後期旧石器時代時代第二段階後半（17,000～15,000年前）に比定されている[註5]。このほか県南では、羽後町新成遺跡や横手市大乗院塚遺跡、山内村小田Ⅴ遺跡、南外村小出Ⅰ・Ⅳ遺跡などがある。

縄文時代草創期の遺跡は町内で確認されておらず、県南全体でも横手川上流の山内村岩瀬遺跡があるのみである。縄文時代早期の遺跡は、平成13年に工事立ち会い調査が行われた雄物川町柏木の常野


Df
Hs
Hs（II）
Df
大見内遺跡
Gt（III）
Gt（V）
Df
Gt（IV）
国道107号線
Gt（III）
Gt（V）
Gt（IV）
Df
Sm
Sm
Gt（V）

第２図　地形区分図



地形区分図凡例

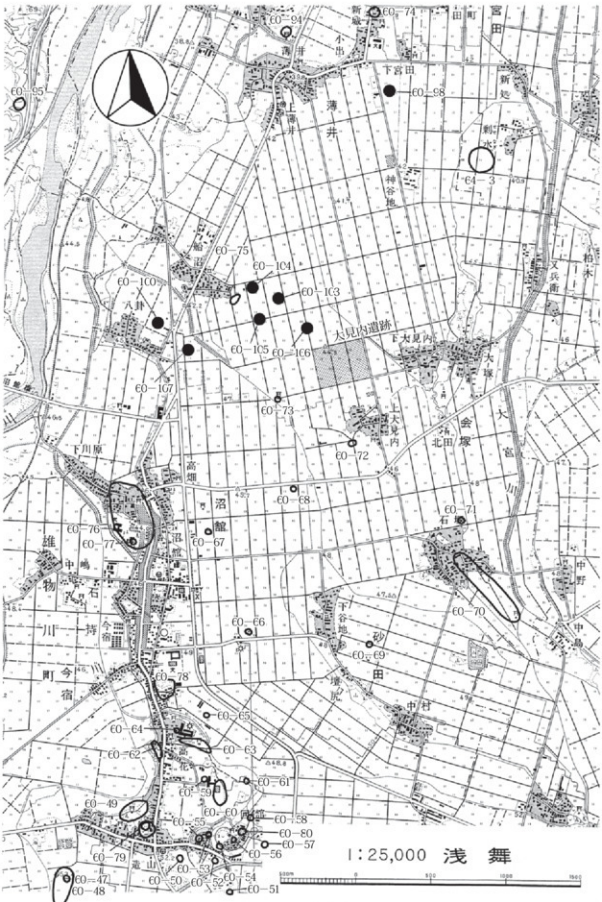
遺跡があり、貝殻腹縁圧痕文を縦位に施した土器が出土している。[注6] これ以外には、雄物川最上流部の雄勝町岩井堂岩陰遺跡と早期末の竪穴住居跡が検出された山内村虫内Ⅰ遺跡がある。

縄文時代前期の遺跡は、竹の子沢遺跡・根羽子沢遺跡や、隣接する平鹿町中藤根遺跡・下藤根遺跡がある。特に雄物川町大沢の根羽子沢遺跡は、昭和30年に雄物川町教育委員会と秋田県立沼館高等学校（現：雄物川高等学校）社会科クラブが、奈良修介・豊島昂両氏の指導を得て発掘調査を行い、配石遺構を伴う土坑墓２基を検出し、大木４・５式土器や玦状耳飾が出土した。[注7] その後、昭和61年に雄物川町教育委員会が、昭和62年には秋田県教育委員会が国道107号線の改良工事に伴い緊急発掘調査を行っており、大型住居跡（長さ15.7ｍ×幅5.2ｍ）や土坑が検出され、大木６式土器と円筒下層ｄ式土器が出土している。[注8]

縄文時代中期の遺跡は、鍛冶台遺跡、黒沢Ⅰ・Ⅱ遺跡、坂ノ下Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ遺跡、新道Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ遺跡、内童ヶ沢遺跡、水上沢遺跡、大沢Ⅰ（赤井）遺跡、盲沢遺跡、竹の子沢Ⅱ遺跡、内山Ⅰ（長谷堂）・Ⅱ・Ⅲ遺跡、根羽子沢遺跡、金峰Ⅰ遺跡、郷遺跡、二井山Ⅰ遺跡、笊の沢Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡、常野遺跡、蝦夷塚古墳群、雄物川高校Ⅰ遺跡の計31遺跡が町内にある。これらのうち、発掘調査されているのは根羽子沢遺跡と蝦夷塚古墳群のみである。早～前期と比べて、遺跡数が急増し、雄物川左岸の山間部から右岸の平野部に遺跡が形成されるようになる。遺物は内山Ⅲ遺跡の大木８ａ式土器、蝦夷塚古墳群の大木８ｂ・10式土器、常野遺跡の大木９式土器、内山Ⅰ（長谷堂）遺跡の大木９・10式土器、郷遺跡の円筒上層式土器などに代表される。[注9]

縄文時代後期の遺跡は、竹の子沢Ⅱ遺跡、上前遺跡、郷Ⅱ遺跡、二井山Ⅱ・Ⅲ遺跡、新道Ⅶ遺跡、兵部ヶ沢遺跡の町内７遺跡と大森町矢神遺跡が確認されていたが、近年の試掘や発掘調査で、大見内遺跡とその西に隣接する館野遺跡、同じく北に隣接する明神Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ遺跡、造山Ⅱ遺跡、蝦夷塚古墳群からも中期末～後期初頭に比定される土器が出土した。なかでも、明神遺跡群では宮戸Ⅰｂ式土器と門前式土器が、[注10] 兵部ヶ沢遺跡では新地式土器が出土している。[注11] また、大見内遺跡から北東4.3㎞に位置する大雄村江原嶋１遺跡では、平成10年の発掘調査で、大木８ｂ式期の竪穴住居跡や大木９式期の土器埋設炉・土坑墓、大木10式期～宮戸Ⅰｂ式期の土坑墓が検出され、中期中葉から後期前葉の集落跡・墓域の様相を示している。[注12]

縄文時代晩期の遺跡は、黒沢Ⅲ遺跡、竹の子沢Ⅲ遺跡、郷Ⅱ遺跡、兵部ヶ沢遺跡、栗林遺跡、十三塚Ⅰ・Ⅲ遺跡、鏑袋Ⅰ遺跡、蝦夷塚古墳群の町内９遺跡や、大森町矢神遺跡、横手市手取清水遺跡などがある。特に雄物川町沼館の兵部ヶ沢遺跡は、昭和57年に雄物川町教育委員会が発掘調査を行い、大洞ＢＣ式期の竪穴住居跡２軒が検出され、注口土器など晩期中葉の大洞ＢＣ・C_1・C_2式土器が多数出土した。[注13] このほか、竹の子沢Ⅲ遺跡からは楕円形で四本の足が付く大型石皿（縦40㎝×横28㎝×


1:25,000 浅 舞
大見内遺跡
下宮田
新処
剰水
神谷地
八井
下川原
高畑
沼
館
雄
物
川
今
宿
中嶋
石
持
今宿
中野
中島
砂
田
中村
大塚
会塚
北田
大宮
川
石
下大見内
上大見内
下谷地
壊肥
新畝
小出
薄井
上薄井
宮田
田町
柏木
又兵衛
大見内
上大見内
沼館
中嶋
石
持
今宿
川
今宿
蓮山
蓮山
石
石

第３図　周辺遺跡位置図

遺跡番号	遺　跡　名	遺 跡 所 在 地	時 代 ・ 時 期	遺　構　・　遺　物	文 献
60−１	鍛治台遺跡	大沢字鍛治台	縄文時代中期、平安時代	縄文土器片、石斧、石鏃、直刀、須恵器	註4,5
60−２	黒沢Ⅰ遺跡	大沢字黒沢	縄文時代中期	組石遺構、縄文土器片	註4,5
60−３	黒沢Ⅱ遺跡	大沢字黒沢	縄文時代中期	縄文土器片	註4,5
60−４	黒沢Ⅲ遺跡	大沢字黒沢	縄文時代晩期	縄文土器片	註4,5
60−５	坂ノ下Ⅰ遺跡	大沢字坂ノ下(東海林松三郎氏宅地内)	縄文時代中期	石器、縄文土器片	註4,5
60−６	坂ノ下Ⅱ遺跡	大沢字坂ノ下１の１(共同墓地南面)	縄文時代前・中期	石器、縄文土器片	註4,5
60−７	坂ノ下Ⅲ遺跡	大沢字坂ノ下(北ノ沢橋手前の畑地)	縄文時代中期	縄文土器片	註4,5
60−８	坂ノ下Ⅳ遺跡	大沢字坂ノ下(坂ノ下集落南側旧畑中)	縄文時代中期	石器、縄文土器片	註4,5
60−９	新道Ⅰ遺跡	大沢字新道13ノ２	旧石器時代後期、縄文時代中期	石刃２点、尖頭器、石器、土器類（佐藤鶴松家蔵）	註4,5
60−10	新道Ⅱ遺跡	大沢字新道13ノ１	縄文時代中期	石器、縄文土器片	註4,5
60−11	新道Ⅲ遺跡	大沢字桐ノ木沢13、１	縄文時代中期	石器、縄文土器片	註4,5
60−12	新道Ⅳ遺跡	大沢字桐ノ木沢13、５	縄文時代中期	石器、縄文土器片	註4,5
60−13	新道Ⅴ遺跡	大沢字坂ノ下58、１	縄文時代中期	石器、縄文土器片	註4,5
60−14	新道Ⅵ遺跡	大沢字坂ノ下55	縄文時代中期	石器、縄文土器片	註4,5
60−15	新道Ⅶ遺跡	大沢字新道14−27	縄文時代、中世	土器片、陶器片	註4,5
60−16	内童子ヶ沢遺跡	大沢字内童子ヶ沢	縄文時代中期	石器片、縄文土器片	註4
60−17	水上沢遺跡	大沢字水上沢１の１の内	縄文時代中期	縄文土器片	註4
60−18	大沢Ⅰ（赤川）遺跡	大沢字赤川（大沢貯水池）	縄文時代中・晩期	縄文土器片、石器類	註4,5
60−19	宮沢遺跡	大沢字宮沢	縄文時代中期	縄文土器片	註4
60−20	上前遺跡	大沢字上前	縄文時代後期	縄文土器片、石器類	註4,5
60−21	長谷堂（内山Ⅰ）遺跡	大沢字内山	縄文時代中期	縄文土器、石器類	註4,5
60−22	内山Ⅱ遺跡	大沢字内山	縄文時代中期	縄文土器、石器類	註4,5
60−23	内山Ⅲ遺跡	大沢字内山	縄文時代中期	縄文土器、石器類、石造品	註4,5
60−24	飯岡遺跡	大沢字飯岡	縄文時代	縄文土器片	註4
60−25	根羽子沢遺跡	大沢字根羽子沢	縄文時代前・中期	組石遺構、土器片、石器類	註4,5,8
60−26	末館窯跡	今宿字末館および今宿字蔵沢口	奈良時代	昭和32年調査はA地点(奈良修介・豊島昂氏調査)、昭和34年調査はB地点(大和久震平氏調査)	註4,5,16,17
60−27	金峰Ⅰ遺跡	大沢字金峰	縄文時代中期	縄文土器片、石器類	註4,5
60−28	上法寺旧寺跡	大沢字上法寺	平安時代	藤原鏡	註4,5
60−29	北野経塚(大沢森経塚を含む)	大沢字北野および今宿字ハアカ坂の境界	鎌倉～室町時代(大森沢経塚は平安時代)	経甕、経筒片、経本、外経甕、岩偶類(大沢森経塚の出土品は横手市正平寺蔵)	註4,5
60−30	郷遺跡	今宿字ハアカ坂	縄文時代中期	土器類	註4,5
60−31	郷Ⅰ遺跡	今宿字郷	平安時代	礎標の塚跡か	註4,5
60−32	郷Ⅱ遺跡	今宿字郷	縄文時代後・晩期	縄文土器片、石器類	註4,5
60−33	兵部ヶ沢遺跡	沼館字兵部ヶ沢	縄文時代後・晩期	縄文土器類、石器類	註4,5,11
60−34	二井山Ⅰ遺跡	二井山字竹の子沢	縄文時代中期	縄文土器片、石器類	註4,5
60−35	二井山Ⅱ遺跡	二井山字和田	縄文時代後期	縄文土器片、石器類	註4,5
60−36	二井山Ⅲ遺跡	二井山字和田	縄文時代後期	縄文土器片	註4,5
60−37	笊の沢Ⅰ遺跡	二井山字笊の沢	縄文時代中期	縄文土器片、石器類	註4,5
60−38	笊の沢Ⅱ遺跡	二井山字笊の沢	縄文時代中期	縄文土器片、石器	註4,5
60−39	笊の沢Ⅲ遺跡	二井山字笊の沢	縄文時代中期	縄文土器片、石器	註4,5
60−40	竹の子沢遺跡	二井山字竹の子沢	縄文時代前・中期	石器類	註4,5
60−41	竹の子沢Ⅱ遺跡	二井山字竹の子沢	縄文時代中期	縄文土器片、石器類	註4,5
60−42	竹の子沢Ⅲ遺跡	二井山字竹の子沢	縄文時代中期	縄文土器片、大型石皿、磨石、石棒等	註4,5
60−43	二井山松子台遺跡	二井山字松子台	縄文時代	縄文土器片、石器類	註4
60−44	水沢遺跡	二井山字堤長根	縄文時代	縄文土器片	註4
60−45	上西野遺跡	西野字後田表	平安時代	土器類（須恵器）	註4,5,6
60−46	宮野遺跡	柏木字歌舞伎野	縄文時代早・前・中期	縄文土器片	註4,5,6
60−47	蝦夷塚古墳群	造山字蝦夷塚55、36−１	縄文時代後期、奈良～平安時代	古墳、土師器、須恵器、縄文土器片、石器類	註4,5,19,20
60−48	蝦夷塚出土勾玉	造山字蝦夷塚	奈良～平安時代	秋田県指定有形文化財（雄物川町教育委員会所蔵）	註4,5
60−49	造山遺跡(造山古墳群)	造山字造山（通称：七ツ森）	奈良～平安時代	土器片（須恵器）	註4,5
60−50	柴林遺跡	造山字柴林	縄文時代晩期、奈良～平安時代	縄文土器片、石器類	註4,5
60−51	柴林製鉄跡	造山字柴林	奈良～平安時代	土器片、鉄滓多量	註4
60−52	馳館十三塚	東里字十三塚	弥生時代、平安～鎌倉時代	塚跡	註4
60−53	十三塚Ⅰ遺跡	東里字十三塚340	縄文時代晩期、弥生時代	縄文土器片、弥生土器片	註4,5
60−54	十三塚Ⅱ遺跡	東里字十三塚337の１内	縄文時代晩期、弥生時代	縄文土器片、弥生土器片	註4,5
60−55	十三塚Ⅲ遺跡	東里字十三塚337の１内	縄文時代晩期、弥生時代	縄文土器片、弥生土器片	註4,5
60−56	馳館Ⅰ遺跡(十三塚遺跡)	東里字馳館および十三塚337の１	弥生時代後期、奈良～平安時代	弥生（念仏間式）壺・甕、土師器・須恵器、平瓦片、丸瓦片	註4,5,10,14
60−57	馳館Ⅱ遺跡	東里字馳館	平安時代	須恵器片、鞍踏石	註4
60−58	雄物川高校裏遺跡	今宿字藤袋	平安時代	土師器片、須恵器片	註4
60−59	雄物川高校Ⅰ遺跡	今宿字藤袋	平安時代	縄文石棒	註4
60−60	雄物川高校Ⅱ遺跡	今宿字藤袋	平安時代	縄文土器片	註4
60−61	藤袋遺跡	今宿字藤袋（雄物川高校敷地内）	縄文時代、平安時代	石棒、完形大型須恵甕	註4,5
60−62	くずれ遺跡	造山字高花	平安時代	土器片（須恵器）	註4
60−63	十足馬場遺跡	造山字十足馬場	平安時代	沼の柵当時の馬場跡か	註4
60−64	首塚	今宿字首塚	奈良～平安時代	土師器、須恵器片	註4,5
60−65	南田遺跡	今宿字南田	奈良～平安時代	須恵器	註4,5
60−66	下作の瀬遺跡	今宿字下作の瀬28	平安時代	土師器壺、井戸跡	註4,5
60−67	千刈田遺跡	沼館字扇蔵塚	平安時代	瑞花双鳳鏡、須恵器壺	註4,5
60−68	正厳谷地遺跡	沼館字正厳谷地	平安時代	須恵器、石器類	註4,5
60−69	旧明神遺跡	砂子田字旧明神	縄文時代	縄文土器片、石器（石皿）	註4
60−70	石塚上台遺跡	会塚字上台	平安時代	土師器（墨書土器）	註4,5,16,23
60−71	上大塚遺跡	会塚字上大塚	平安時代	井戸跡（割板）	註4
60−72	上大見内遺跡	薄井字大見内506	奈良～平安時代	土師器（墨書土器）、須恵器	註4,5,16,23
60−73	館野遺跡	薄井字館野	縄文時代後期、平安時代	縄文土器、土師器、須恵器	註4
60−74	新城館跡	薄井字新城	室町時代		註4,24
60−75	薄井館跡	薄井字館沼	室町時代		註4,24
60−76	沼の柵跡（沼館城跡）	沼館字沼館	平安時代、中世（室町時代）	沼の柵、中世城館（城主は小野寺泰道か稙道か）、井戸跡	註4,5,24
60−77	蔵光院板碑	沼館字沼館	室町時代	板碑	註4
60−78	今宿館跡	今宿字高花および今宿字西在家の一帯	室町時代		註4,24
60−79	造山館跡	造山字造山	室町時代	須恵器	註4
60−80	馳館跡	東里字馳館	室町時代	須恵器	註4,24
60−81	栗戸城跡	西野字栗戸	室町時代	堀切りあり、土器片、礎石、井戸跡	註4,24
60−82	兵部ヶ沢館跡	沼館字兵部ヶ沢	平安時代	旧式階段状、帯郭あり	註4
60−83	二井山館跡	二井山字野沢	室町時代	階段状郭、掘り切り	註4
60−84	赤館跡	二井山字館平	室町時代	階段状郭、掘り切り	註4,24
60−85	三吉山館跡	今宿字末館10	室町時代	（中世城館と重複）	註4
60−86	末館跡	今宿字末館	室町時代	階段状郭あり、小型鏡（江戸時代）	註4,24
60−87	館森館跡	大沢字根羽子沢	室町時代	縄文土器、石器	註4,24
60−88	上法寺館跡	大沢字上法寺	室町時代	堀切	註4
60−89	赤川館跡	大沢字赤川	室町時代		註4
60−90	大沢城跡	大沢字天下屋敷	室町時代		註4,24
60−91	黒沢館跡	大沢字黒沢	室町時代	階段状帯郭および堀切	註4
60−92	大沢口境目御番所跡	大沢字坂ノ下	江戸時代	道路敷地、表裏石外	註4
60−93	深井焼窯	南形字深井	江戸時代	窯跡	註4
60−94	天保飢饉塚	薄井字下間	江戸時代	地蔵尊、社屋あり	註4
60−95	矢神遺跡	平鹿郡大森町猿沢（矢神集落）	縄文時代後・晩期	壺形土器（大洞Ｃ２式土器）、縄文土器片	註4,5
60−96	大沢松雲寺遺跡	大沢字大沢	縄文時代	大型石刀	註4
60−97	釘貫遺跡	東里字釘貫	奈良～平安時代		註10,21
60−98	小出遺跡	薄井字小出303−１外	平安時代		註6
60−99	大見内遺跡	薄井字大見内226−１外	縄文時代、奈良～平安時代、中世		註6、本書
60−100	八卦遺跡	沼館字八卦	奈良～平安時代、中世		註6,10,21
60−101	十三塚遺跡	東里字十三塚	奈良～平安時代		註10
60−102	造山Ⅱ遺跡	造山字造山	縄文時代後期		註6
60−103	明神Ⅰ遺跡	薄井字明神	平安時代		註10
60−104	明神Ⅱ遺跡	薄井字明神	縄文時代後期		註10
60−105	明神Ⅲ遺跡	薄井字明神	縄文時代後期		註10
60−106	明神Ⅳ遺跡	薄井字明神	縄文時代後期		註10
60−107	桜木谷地遺跡	沼館字桜木谷地	平安時代		註10
60−108	水里遺跡	東里字水里	奈良～平安時代		註10
60−109	耳取遺跡	東里字耳取	平安時代		註10,21

第１表　周辺遺跡一覧

高さ７cm）が出土し、大森町矢神遺跡では大洞C$_2$式の壺形土器が出土している。

弥生時代の遺跡は、十三塚（廻館Ⅰ）遺跡、十三塚Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡、廻館十三塚、廻館Ⅱ遺跡の町内６遺跡や、平鹿町平林遺跡、横手市手取清水遺跡やオホン清水北遺跡などがある。特に雄物川町造山の十三塚遺跡出土の壺形土器は、胴部に平行沈線によって連続する弧線が描かれ、その間に刺突文が施された土器であり、弥生時代後期の念仏間式土器に比定された。(注14)

古墳時代の遺跡は、秋田県で確認されているものが非常に少ない。県南では横手市オホン清水遺跡と田久保下遺跡の２遺跡しか発掘調査されていない。田久保下遺跡では土坑墓８基が検出され、６世紀代の土師器・須恵器（坏・蓋・甕・壺など）が出土している。(注15)

奈良時代の遺跡は、末館窯跡、十三塚遺跡、蝦夷塚古墳群、造山遺跡、栗林製鉄跡、首塚遺跡、南田遺跡、大見内遺跡、上大見内遺跡、釘貫遺跡、八卦遺跡の町内11遺跡や、平鹿町中藤根遺跡、下藤根遺跡、年子狐遺跡、竹原窯跡、横手市郷土館窯跡などがある。特に雄物川左岸の末館窯跡は、小西定助氏が発見し、昭和32年に奈良修介・豊島昂両氏によって発掘調査され（末館Ａ地点または末館Ⅱ窯跡）、(注16)昭和34年には雄物川町教育委員会と秋田県立雄物川高等学校社会科クラブが、大和久震平氏の指導を得て発掘調査を行っている（末館Ｂ地点または末館Ⅰ窯跡）。(注17)その結果、半地下式窖窯が計２基検出され、８世紀中葉から末葉の須恵器が多数出土した。これらの遺物は県内窯跡出土須恵器の編年上、最も古い時期のものである。また、雄物川町造山の蝦夷塚古墳群は、菅江真澄の『雪の出羽路』平鹿郡二巻に「造山邑の蝦夷塚といふあたりより、長之亟といふ村民の掘り得しとて、勾玉あり」(注18)と記され、古くから遺物の出土する地として知られていた。昭和30年に藤田亀治・藤一・正一氏が、昭和33年には佐藤金一氏が勾玉など玉類を多数発見している。昭和60年に国道107号改良工事に伴って秋田県教育委員会が、(注19)平成14年には県営ほ場整備事業に伴って雄物川町教育委員会が発掘調査を行った結果、計17基の古墳が検出され、秋田県で最大規模の古墳群であることが判明した。(注20)このほか、平成15年に雄物川町教育委員会が発掘調査した八卦遺跡と釘貫遺跡でも、８世紀代の土師器が出土している。(注21)

平安時代になると遺跡が急増する。雄物川町内だけでも、上法寺旧寺跡、郷Ⅰ遺跡、上西野遺跡、蝦夷塚古墳群、造山遺跡、栗林遺跡、栗林製鉄跡、廻館十三塚、廻館Ⅱ遺跡、雄物川高校裏遺跡、雄物川高校Ⅰ・Ⅱ遺跡、猫袋遺跡、くずれ遺跡、十足馬場遺跡、首塚遺跡、南田遺跡、下作の瀬遺跡、千刈田遺跡、正願谷地遺跡、石塚上台遺跡、上大塚遺跡、上大見内遺跡、館野遺跡、沼の柵跡、兵部ヶ沢遺跡の26遺跡あり、加えて前述の大雄村江原嶋１遺跡、平鹿町上藤根遺跡、中藤根遺跡、下藤根遺跡、年子狐遺跡、竹原窯跡や、横手市手取清水遺跡、オホン清水遺跡、郷土館窯跡などがある。さらに平成13年以降、雄物川町教育委員会の遺跡分布調査によって、釘貫遺跡、小出遺跡、大見内遺跡、八卦遺跡、十三塚遺跡、造山Ⅱ遺跡、明神Ⅰ遺跡、桜木谷地遺跡の８遺跡が新たに加わっている。(注22)このうち大見内遺跡の１km南に位置する石塚上台遺跡では、内外面に計16～19文字の墨書が記された土師器皿が出土している。(注23)

鎌倉時代から室町時代の遺跡は、その多くが中世城館跡である。(注24)北野経塚、廻館十三塚、新城館跡、薄井館跡、沼の柵跡、沼館城跡、今宿館跡、造山館跡、廻館跡、悪戸城跡、兵部ヶ沢館跡、二井山館跡、赤館跡、三吉山館跡、末館跡、館森館跡、上法寺館跡、赤井館跡、大沢城跡、黒沢館跡の町内20遺跡がある。特に大見内遺跡の北西に近接する薄井館跡は、菅江真澄が『雪の出羽路』平鹿郡六巻に

「此邑名薄井とは近き世の事にて、古はもはら臼井とこそ書きつらめ。此枝村の舟沼といふ処に旧柵の蹟あり。いつの世に、いづれの城主の住りとはしらねと、たゞ其地を臼井殿の跡と云ひ伝へ、そのあたりの田地の字を館薄井と今も呼たり」と記しており、この地域で古くから館跡として認識されていた。現在は船沼集落一帯が遺跡範囲として括られている。

江戸時代になると「大見内村」が文献史料上に現れる。享保15年の岡見知愛『六郡郡邑記』、文化12年の淀川盛品『秋田風土記』、享和元年の菅江真澄『雪の出羽路』などには、薄井村（臼井村）の枝村として大見内村の名が登場し、加えて文久２年には「薄井村絵図」が作成される(註25)。この絵図は、当時の地形や集落状況（街道や河川、隣接９箇村との境界線など）が詳細に描かれており、近代以降の地形改変を受ける前の様相を伝える貴重な史料である。これ以外に大見内の地名が記された絵図は弘化２年の「沼館村絵図」がある。大見内村を含む薄井村は、明治17年に宮田村・阿気村と連合村となり、明治22年に薄井村と宮田村が合併して館合村が成立した。その後、明治40年から大正６年の間に、468町歩の大耕地整理が実施され、新耕地を得ると同時に上大見内遺跡などが発見されている。昭和30年10月、館合村は大字薄井を雄物川町に、大字宮田を大雄村に編入して76年間の村史を閉じた。現在の県営ほ場整備事業「館合地区」は、この旧館合村域を対象としている。

《引用・参考文献》

註１　秋田県農政部『出羽丘陵開発計画地域　土地分類基本調査　浅舞』秋田県農政部農地整備課　1979（昭和54）年

註２　小西泰次郎『秋田県横手盆地の水理地質学的研究』通商産業省工業技術院地質調査所地質調査報告第216集　1966（昭和41）年

註３　大沢穠・大口健志・高安泰助『地域地質研究報告　浅舞地域の地質』通商産業省工業技術院地質調査所　1979（昭和54）年

註４　秋田県教育委員会　1987（昭和62）年

註５　雄物川町郷土史編纂会『雄物川町郷土史』雄物川町役場　1980（昭和55）年

註６　雄物川町教育委員会『埋蔵文化財詳細分布調査報告書』雄物川町文化財調査報告書第２集　2002（平成14）年

註７　前掲、註５文献に同じ。

註８　雄物川町教育委員会『根羽子沢遺跡発掘調査報告書』1987（昭和62）年
秋田県教育委員会『根羽子沢遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第176集　1988（昭和63）年

註９　前掲、註５および註８文献と同じ。

註10　雄物川町教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』雄物川町文化財調査報告書第４集　2003（平成15）年

註11　山田貞吉「兵部ヶ沢遺跡発掘調査報告」『雄物川町郷土資料館報告』第１号　雄物川町教育委員会　1984（昭和59）年

註12　秋田県教育委員会『江原嶋１遺跡』秋田県文化財調査報告書第310集　2001（平成13）年

註13　前掲、註11文献に同じ。

註14　橘善光「弥生土器－東北・北東北３」『考古学ジャーナル』　1979（昭和54）年９月号

註15　秋田県教育委員会『秋田ふるさと村（仮称）建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
－富ヶ沢Ａ・Ｂ・Ｃ窯跡　田久保下遺跡　富ヶ沢１号～４号塚－』秋田県文化財調査報告書第220集　1992(平成４)年

註16　秋田県『秋田県史　考古編』1960（昭和35）年
奈良修介・豊島昂『秋田県の考古学』郷土考古学叢書３　吉川弘文館　1967（昭和42）年

註17　大和久震平「末館窯跡発掘調査報告」『雄物川町郷土史資料』第３集　雄物川町文化財委員会　1963（昭和38）年
なお、末館窯跡について、上記の註16文献で奈良修介氏が便宜上呼称した、昭和32年発掘調査の「末館Ａ地点窯跡」と昭和34年発掘調査の「末館Ｂ地点窯跡」は、後の発掘調査報告書に引用される際に、末館Ａ地点窯跡＝末館Ⅰ窯跡（および出土遺物）、末館Ｂ地点窯跡＝末館Ⅱ窯跡（および出土遺物）と認識されていることがあるが、島田祐悦氏と雄物川町郷土資料館収蔵の末館窯跡出土遺物を全て実見した結果、末館Ａ地点窯跡＝末館Ⅱ窯跡（および出土遺物）、末館Ｂ地点窯跡＝末館Ⅰ窯跡（および出土遺物）であることが判明した。一連の窯跡発見に伴う整理作業上の瑕疵によると思われる。

註18　以下、菅江真澄『雪の出羽路』の記述は、内田武志・宮本常一編『菅江真澄全集』第６巻　未来社　1976（昭和51）年より引用した。

註19　秋田県教育委員会『蝦夷塚古墳群発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第136集　1986（昭和61）年

註20　雄物川町教育委員会『蝦夷塚古墳群』雄物川町文化財調査報告書第３集　2003（平成15）年

註21　雄物川町教育委員会『八卦遺跡』雄物川町文化財調査報告書第５集および『耳取遺跡・釘貫遺跡』雄物川町文化財調査報告書第６集として2004（平成16）年に刊行予定。

註22　前掲、註６および註10文献に同じ。

註23　奈良修介「沼館出土の土師盤」『秋田考古学』第９号　1958（昭和33）年、前掲註５および註16文献。県内の墨書土器については、高橋学「秋田県内出土の墨書土器集成」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第１号　1986（昭和61）年に網羅されている。

註24　秋田県教育委員会『秋田県の中世城館』秋田県文化財調査報告書第86集　1981（昭和56）年

註25　「文久二年薄井村絵図」および「弘化二年沼館村絵図」は、雄物川町郷土資料館が所蔵。

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

大見内遺跡は、横手盆地の西部、出羽丘陵の麓を北流する雄物川右岸から約２㎞東にあり、その標高は42～43m前後である。遺跡の範囲は、平成13年11～12月の確認調査によって括られた89,700㎡全域であり、その範囲内にある切土施工部分（面積4,250㎡）が破壊を免れ得ないため、今回の発掘調査区が設定された。遺跡の現況は水田と畑地であり、第２章で述べたように、藩政期には水田開発が、明治22年から昭和30年までの館合村時代には耕地整理が実施された記録がある。水田は、雄物川町薄井の町道東部２号幹線と同軸方向（北北西）を向いて地割りされる。遺跡一帯は低く平坦な地形で、西側には周知の遺跡である館野遺跡や八卦遺跡、北には薄井館跡や明神遺跡群、南には上大見内遺跡が近接し、約50m南には上大見内集落が、約80m東には下大見内集落がある。

発掘調査区は、町道東部２号幹線の西側、上大見内集落の北にあり、南北250m×東西220mの休耕田56面のなかにある。調査にあたっては、全調査区を四つに区分し、Ａ区（2,000㎡）、Ｂ区（900㎡）、Ｃ区（600㎡）、Ｄ区（750㎡）と呼称した。これは調査工程の途中で、一部の調査区を引き渡すよう要請を受けていたためであり、本書中でもこの呼称を用いる。なお、今回の発掘調査後、平成14年11～12月に実施された大見内・館野遺跡確認調査では、対象面積300,000㎡の全域が埋蔵文化財包蔵地として括られ、平成15年度に発掘調査されることとなった。これによって、館野遺跡を含めた大見内遺跡の範囲は389,700㎡もの面積に達した（平成15年11月現在）。

第２節　調査の方法

調査の方法はグリッド方式によった。秋田県平鹿総合農林事務所が、県営ほ場整備事業用に打設した指標杭：秋田県③川崎（杭記号：ＫＢＭ３－８白、標高43.873m）を基準として、国家座標Ｘ・Ｙを導き出し、調査区Ａ区の中央に原点杭（杭記号：ＭＡ50、Ｘ座標－76919.991、Ｙ座標－33608.564、標高43.923m、北緯39度18分23秒、東経140度26分37秒）を打設した。これを通る座標北ラインを南北基線とし、同じく原点杭を通り南北基線と直交するラインを東西基線とした。この東西南北の基線に沿って４m×４mの方眼（以下、グリッドと略記する）を組み、その交点に杭を打設した。これはＡ区に隣接するＢ・Ｃ区や、東側に単独で位置するＤ区についても同様で、原点杭ＭＡ50の東西南北基線の延長線上にグリッドを組み、その交点に杭を打設した。各グリッドを呼称するために、基線の交点には、西に行くに従いＭＡ・ＭＢ・ＭＣ・ＭＤ……、東に行くに従いＬＴ・ＬＳ・ＬＲ・ＬＱ……、北に行くに従い50・51・52・53……、南に行くに従い49・48・47・46……と、アルファベットおよび算用数字を組み合わせた番号を４m置きの各杭に明記した。方眼に囲まれた区域を呼称する場合は、その区域の南東隅の杭番号を用いた。

各調査区を掘り進む方法は、機械力は用いず、すべて人力によって行った。これは、前年度の確認調査の結果から、Ⅰ層表土の下がすぐ遺物包含層・遺構確認面であることが判明していたことと、現

地形が水田・畑地・畦畔だったからである。ただし、確認調査後のトレンチ埋め戻し土がある場所は、前年度にバックフォーで試掘されたものである（主にD区）。なお、調査条件上の理由で排土搬出用ベルトコンベアーは用いなかった。遺構名は、全調査区を通じて検出した順に連番を付し、凡例にあげた遺構略号をつけた。遺構の記録については、実測図・写真・筆記によって行った。実測図は平面図・断面図とも基本的に20分の１縮尺で作成した（遺構規模の大小により適宜縮尺を変更）。地形実測や小柱穴の分布図は、８月７～９日の３日間だけトータルステーションを導入して作成した。写真は基本的に35㎜判のモノクロ・カラーリバーサル・ネガカラーの３種類のフィルムを用いて撮影したが、部分的に60×45㎜の中判カメラやデジタルカメラでも撮影した。航空写真は不要との決定が下され、撮影を断念した。その後、本遺跡をほぼ直上から撮影したフィルム（超高度撮影写真）が日本地図センターに存在するのを確認し、これを掲載した（撮影は昭和51年11月６日）。

第３節　調査の経過

発掘調査は、平成14年５月14日から８月23日までの延べ65日間実施した。以下、調査日誌を基に調査の経過を記述する。

４月17日：秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室および秋田県平鹿総合農林事務所、雄物川町教育委員会、秋田県埋蔵文化財センターの四者で発掘調査開始前の現地協議を行った。ここで調査区や調査条件・期間・相互協力事項などを確定した。

４月26日：雄物川町コミュニティセンターにて、作業員雇用説明会を開催した。

５月14日：発掘調査を開始した。同時に方眼杭の打設作業も開始した（～22日に完成）。

５月16日：前年度確認調査トレンチから遺物が出土し始める。D区の調査前近景写真撮影を行う。

５月20日：ＫＥ・ＫＦ53～57グリッドから遺物多数出土。Ａ・Ｂ・Ｃ区の調査前遠景写真撮影を行う。

５月21日：前日の地点からＳＩ02竪穴住居跡とＳＫ01土坑（当時はＳＩ01竪穴住居跡）を検出した。

５月24日：ＫＥ・ＫＦ49～52グリッドから流倒木と土師器・須恵器の坏が多数出土。この部分だけ、著しくぬかるみ、水が湧く。のちにＳＬ04河川跡とした。

５月28日：D区北端でＳＫ05・06・07土坑を検出し、ＳＩ02竪穴住居跡内からもＳＫ08土坑を検出。

５月30日：ＫＫ83グリッドで治平元寶（北宋、1064年初鋳）１点が出土した。

５月31日：ＳＩ02竪穴住居跡内から須恵器蓋が出土。栗澤光男文化財主査兼調査副班長現場指導。

６月３日：Ａ区の粗掘りに着手した。その際、発掘器材の運搬距離が長いため東屋を仮設した。

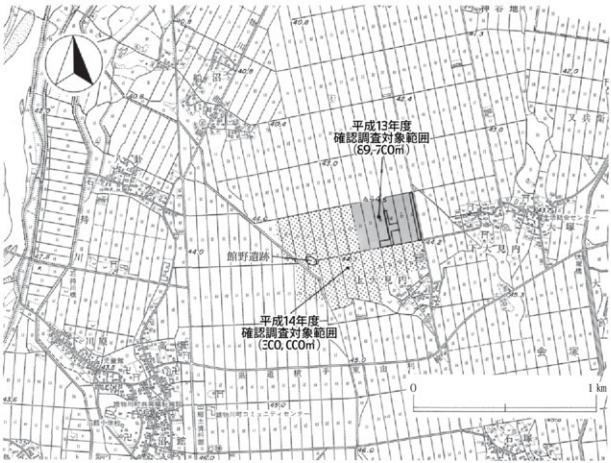
６月６日：D区南端側の精査を完了した。芳賀所長、櫻田南調査課長現場指導。

６月13日：ＫＪ73～75グリッドで流倒木と土師器、須恵器片が出土。ＳＬ09河川跡とした。

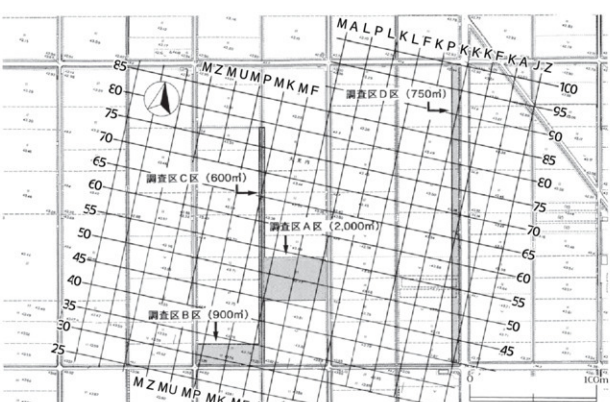
６月14日：ＳＩ02竪穴住居跡の北側で、部分的ながらＳＩ10竪穴住居跡を検出した。

６月18日：ＳＩ02竪穴住居跡と重複するＳＫ11、12土坑を検出した。Ｂ区の部分引き渡しを要請されたため、この週よりＡ区の粗掘りを一時停止し、Ｂ区の粗掘りに着手した。

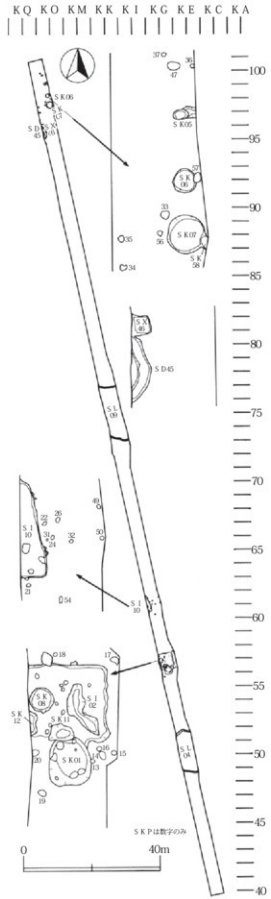
６月25日：ＳＬ04河川跡から「息」と墨書きされた完形の土師器坏が出土。同周辺箇所から土師器、須恵器片が多数出土した。また、Ｂ区と隣接するＣ区の一部（農道寄り部分）も粗掘りを着手した。



第４図　調査範囲図



第５図　グリッド配置図



第６図　Ｄ区遺構配置図

７月９日：Ｄ区北端の土坑群西側で、ＳＤ45溝跡、ＳＸ46性格不明遺構を検出した。

７月11日：台風６号が秋田県域を通過。豪雨のためＡ～Ｄ区の全調査区が冠水した。早朝の現場判断で掘り方作業は休止し、遺物の洗浄と実測図作成のみを行った。

７月16日：台風７号が秋田県域を通過。このため予定していた平鹿町立平鹿中学校３年生の発掘調査体験学習会は中止となった。現場の掘り方作業は休止し、遺物の洗浄と実測図作成のみを行った。

７月19日：大森町立川西小学校６年生30名および引率教諭２名と、大見内遺跡発掘調査体験学習会を調査区Ａ区で行った。午後、佐々木孝志雄物川町長も来跡し、調査区Ｄ区のＳＤ45溝跡やＳＸ46などの遺物取り上げ・実測を体験した。櫻田隆南調査課長、現場指導。

７月22日：Ａ区でＳＫ59・60土坑を検出。この日、Ｄ区を調査完了し、Ａ～Ｃ区の調査に移行する。

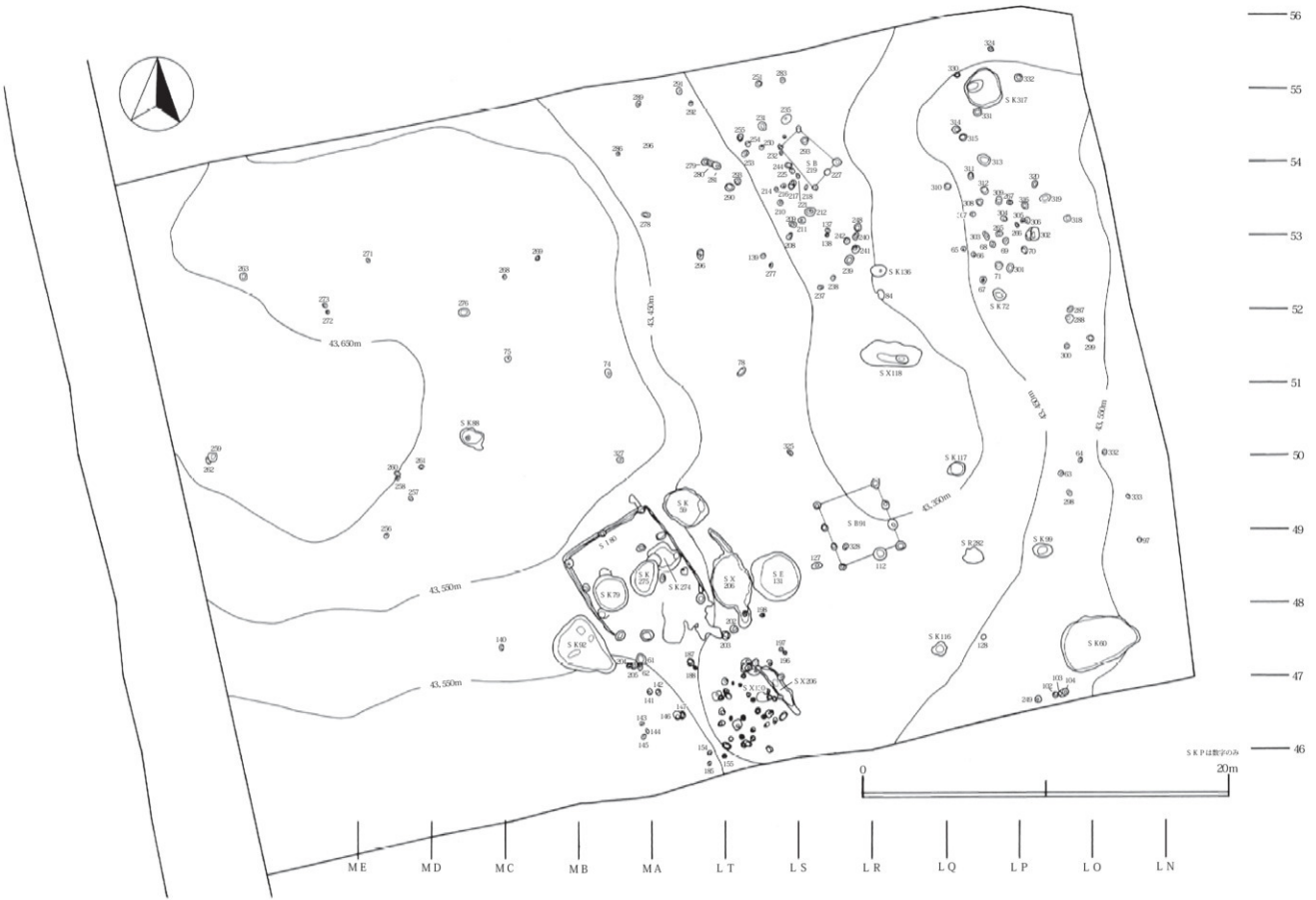
７月24日：Ａ区でＳＫ72・75土坑を検出。平鹿総合農林事務所、文化財保護室の立ち会いのもと、Ｄ区（750㎡）を引き渡した。

７月25日：Ａ区中央でＳＩ80竪穴住居跡、ＳＫ79土坑を検出した。

７月26日：雄物川町文化財保護協会（片岡丑之助会長以下45名）と地域住民対象の大見内遺跡見学会を開催した。

７月29日：Ｂ・Ｃ区の粗掘りが完了した。遺物は出土したものの遺構は検出されなかった。以後、Ａ区の調査に傾注した。雄物川町立雄物川中学校１年生（男子２名）と発掘調査体験学習会を行った。

８月１日：ＳＫ88・99・116・117・136土坑、ＳＥ131井戸跡などを検出した。午後、秋田魁新報社横手総局の田中敏雄記者が取材の


56
55
54
53
52
51
50
49
48
47
46
ME
MD
MC
MB
MA
LT
LS
LR
LQ
LP
LO
LN
43.650m
43.600m
43.550m
43.500m
43.450m
43.350m
S K317
S K136
S K72
S X118
S K88
S K117
S B91
S R282
S K99
S K116
S K60
S K59
S K275
S K274
S X206
S E131
S K79
S K92
S X206
S K PはS K 59のみ
0
20m

第７図　Ａ区遺構配置図

ため来跡した。

８月２日：Ｂ区の農道沿い100㎡を秋田県平鹿総合農林事務所に部分引き渡しする。大野憲司副所長、現場指導。この日より調査工程を変更し、文化財保護室および平鹿総合農林事務所と協議の上、現場稼働期間の５日間延長を決定した。

８月６日：ＳＫ274・275・317土坑を検出した。平鹿総合農林事務所、文化財保護室立ち会いの下、Ｂ区（残りの800㎡）とＣ区（600㎡）をすべて引き渡した。

８月９日：Ａ区の粗掘り作業を完了した。

８月22日：発掘調査終了前の遺跡遠景写真を撮影した。

８月23日：調査終了し、現場撤収。Ａ区（2,000㎡）を平鹿総合農林事務所にすべて引き渡した。

第４節　整理作業の方法と経過

整理作業は、平成14年８月26日から秋田県埋蔵文化財センター南調査課で行った。出土した遺物の洗浄・注記・分類・接合を開始し、この工程が終了した遺物から実測・採拓・トレースなどの作業を行った。遺構図面の浄書は、現場で記録した実測図（原図）をもとに第２原図を作成した。平成15年２月15日、大曲市中央公民館を会場に開催された「平成14年度秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会」にて、大見内遺跡の発掘調査成果を発表した。会場では大見内遺跡出土遺物の展示を行った。

平成15年４月、大見内遺跡の整理作業は学芸主事石澤宏基の担当となった。報告書の作成にあたって、遺跡の年代が縄文時代、奈良～平安時代、鎌倉～室町時代に渡るものの、主体となるのは奈良・平安時代であるため、編集の重点をそこに置いた。遺物については、全点を秋田県埋蔵文化財センター内で実測・拓本・トレースおよび写真撮影した。以上の経過を経て、例言に記した方々や多くの上司・同僚の指導と協力を受け、発掘調査の成果を本書にまとめることができた。

≪参考文献≫

秋田県埋蔵文化財センター『平成14年度　秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会資料』　2003（平成15）年

秋田県埋蔵文化財センター『秋田県埋蔵文化財センター年報』第21号　2003（平成15）年

第４章　調査の記録

第１節　基本層位

大見内遺跡の基本層位は、平成13年11～12月実施の確認調査トレンチ（埋め戻し済み）を再度掘り上げ、精査・観察した。その確認地点は、Ａ・Ｂ・Ｃ区がＭＨ46杭を起点に北西へ５ｍの地点と、Ｄ区がＫＥ48（＋1.4m）杭から北へ３ｍの地点、およびＫＯ95（＋1.7m）杭から北へ３ｍの地点である。この基本層位３地点を第７図に図示した。検出した遺構のほとんどがⅡ層上面で確認され、遺構外遺物もⅡ層以下で出土している。なお、発掘調査前の現況は水田および畑地であったため、土壌中には酸化・沈殿した赤褐色の鉄分層が斑に入り、地山粘土層には暗青緑色にグライ化した場所も認められた。耕作による攪乱や削平が著しい場所では、土器片などの遺物がⅠ層で多数表採された。また、第２章で詳述したように、本遺跡が立地する砂礫段丘Ⅳは、第四紀洪積世の河成堆積物が表層地質となっているため、雄物川や大宮川支流の小河川跡がＤ区で検出したＳＬ04・09のように確認された。各調査区基本層位の特徴は次の通りである。

〔調査区～Ａ・Ｂ・Ｃ区〕

Ⅰ層：黒褐色土（10ＹＲ３／２）締まり中・粘性中、表土、耕作土。層厚10～20㎝

Ⅱ層：黒褐色土（10ＹＲ３／１）締まり中・粘性中、遺物包含層、遺構確認面。層厚10～25㎝

Ⅲ層：暗褐色土（10ＹＲ３／３）締まり中・粘性強、遺物包含層、地山漸移層。層厚15～25㎝

Ⅳ層：灰黄褐色土（10ＹＲ５／２）締まり中・粘性弱、粘土層（部分的に砂礫層あり）、地山。

〔調査区～Ｄ区〕

Ⅰ層：暗褐色土（10ＹＲ３／３）締まり中・粘性中、表土、耕作土。層厚10～25㎝

Ⅱ層：黒褐色土（10ＹＲ３／２）締まり強・粘性中、遺物包含層、遺構確認面。層厚10～30㎝

Ⅲ層：黒褐色土（10ＹＲ２／２）締まり強・粘性中、遺物包含層、地山漸移層。層厚15～30㎝

Ⅳ層：灰黄褐色土（10ＹＲ５／２）締まり中・粘性弱、粘土層（部分的に砂礫層あり）、地山。

本遺跡の周辺は雄物川右岸まで一面に低く平坦な地形であるが、土層を観察した結果、表土から地山までの深さは、最も浅いところで35㎝、最も深いところでは85㎝とその差が大きい。これは遺跡全体の原地形に、ある程度の高低差があったことを示しており、特にＡ・Ｂ・Ｃ区よりもＤ区の方が深くなる傾向がある。現在では平坦で水田耕作向きな地形でも、過去には幾筋もの小河川が流れ、若干の起伏があり、沼や池などが存在したものと考えられる。

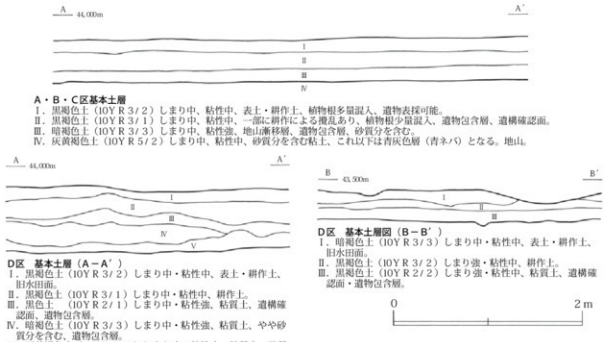
第２節　検出遺構と遺物

発掘調査の結果、大見内遺跡で検出した遺構は合計242遺構である。出土した遺物は、縄文時代の土器・石器、奈良～平安時代の土師器・須恵器や木製品、鎌倉～室町時代の中世陶器など整理用コンテナで60箱分（中コンテナ換算）である。また、発掘調査区（4,250㎡）内で検出した遺構数の内訳は、次の通りである。

第２表　検出遺構一覧（遺構種別）

遺構の種類	検出数	検出した調査区と遺構番号
竪穴住居跡	３軒	A区：ＳＩ80、D区：ＳＩ02・10
掘立柱建物跡	２棟	A区：ＳＢ91・219
土　　坑	21基	A区：ＳＫ59・60・72・75・88・92・99・116・117・136・274・275・317、D区：ＳＫ01・05・06・07・08・11・12・58
土器埋設遺構	１基	A区：ＳＲ282
井　戸　跡	１基	A区：ＳＥ131
溝　　跡	１条	D区：ＳＤ45
河　川　跡	２条	D区：ＳＬ04・09
柱穴様ピット	206基	A区：181基、D区：25基　※個々の番号は観察表に記載。
性格不明遺構	５基	A区：ＳＸ118・130・206・326、D区：ＳＸ46
合　計	242遺構	A区：203遺構、D区：39遺構

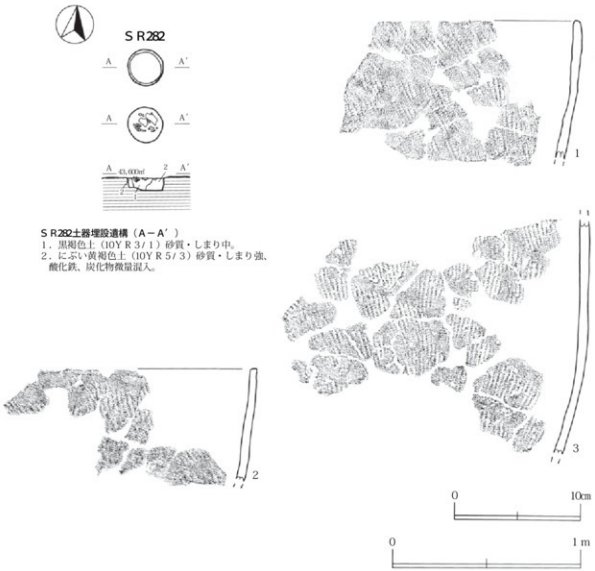
これら調査によって検出した遺構は、発見順に一連の番号を付したものであるが、精査の過程で欠番となったものもある。調査区のＢ区とＣ区については、調査前現況の状態がＢ区は畑地と水路、Ｃ区は全面が畑地と畦畔・水路であり、著しい撹乱を受けていた。発掘調査の結果、Ｂ・Ｃ区では遺物が出土したのみで遺構は検出されなかった。よって、遺構が検出された調査区はＡ区とＤ区だけである。また、縄文時代の遺構はＳＲ282土器埋設遺構があるのみで、それ以外の遺構は古代（奈良～平安時代）の遺構である。時代および調査区別の検出遺構数内訳は次の通りである。



第８図　基本土層図

第３表　検出遺構一覧（時代・調査区別）

	A区の検出遺構と数		D区の検出遺構と数		A区＋D区の総計
縄文時代	土器埋設遺構	１基	なし	０基	縄文時代　１遺構
奈良時代 ～ 平安時代	竪穴住居跡	１軒	竪穴住居跡	２軒	奈良～平安時代 241遺構
	掘立柱建物跡	２棟	土　　坑	８基	
	土　　坑	13基	溝　　跡	１条	
	井 戸 跡	１基	河 川 跡	２条	
	柱穴様ピット	181基	柱穴様ピット	25基	
	性格不明遺構	４基	性格不明遺構	１基	
	合　計	203遺構	合　計	39遺構	総計　242遺構



第９図　ＳＲ282土器埋設遺構・出土遺物

１　Ａ区の検出遺構と遺物

⑴　縄文時代

ＳＲ282土器埋設遺構

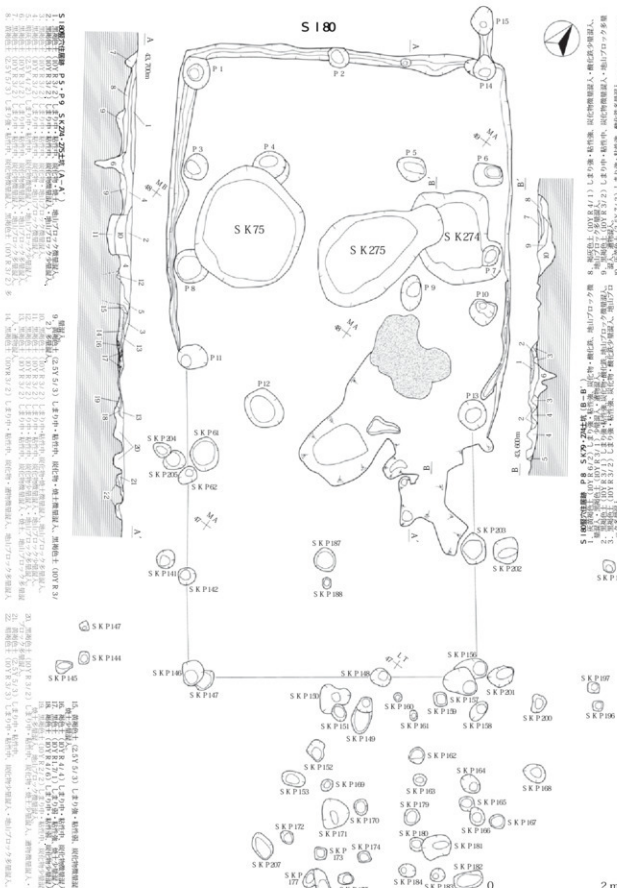
《位置と確認》Ａ区ＬＰ48グリッドのⅡ層で確認した。重複は見られなかった。
《規模と平面形》規模は長軸0.37ｍ×短軸0.37ｍ、深さは0.15ｍあり、平面形は円形を呈する。
《土　　層》２層に分層された。掘形はにぶい黄褐色土、土器内に炭化物が混入していた。
《出土遺物》３点を図示した（第９図１～３）。粗製の深鉢形土器である。
《時　　期》縄文時代中期以降と考えられる。

⑵　奈良・平安時代の遺構と遺物

①　竪穴住居跡（重複関係にあるＳＫ79・274・275土坑を含む）

ＳＩ80竪穴住居跡

《位置と確認》Ａ区ＭＡ47～49、ＭＢ48、ＬＴ47～49グリッドのⅡ層で確認した。当初、４ｍ前後の住居跡として精査したが、その結果、規模が拡大し、南側の柱穴群と関連することが判明した。Ａ区で唯一検出した住居跡である。
《規模と平面形》平面形は長方形の竪穴住居跡であるが、南東側に掘立柱建物跡が取り付く形態を呈する。竪穴部分の規模は長軸6.39ｍ×短軸5.80ｍ、深さ0.45ｍである。掘立柱建物部分の規模は桁行３間×梁行２間、桁行総長5.34ｍ、柱間距離は西側で北から1.90＋1.70＋1.74ｍ、梁行総長4.74ｍ、柱間距離は南側で西から3.27＋1.47ｍである。両者を合わせた遺構全体の規模は、長軸10.60ｍ×短軸5.80ｍで、その主軸方位は、Ｎ－35°－Ｗである。
《重　　複》ＳＫ79・274・275土坑に切られている。
《土　　層》22層に分層した。７層は北側壁溝、８・９層は貼床、13～17層はカマドの焼土である。２層はＳＫ275土坑、10・11層はＳＫ274土坑である。
《　壁　》壁は急な角度で立ち上がる。東・西・北側には壁溝がある。南側のみ壁がなく、掘立柱建物が取り付く。
《床　　面》竪穴部の北・東・西側は比較的平坦であるが、壁がない南側のみ掘立部に向かってスロープ状に高くなる。
《柱　　穴》竪穴側に15基、掘立側に10基（うち北端２基は竪穴側と兼用か）の計25基確認した。
《カ　マ　ド》第10図に掲載した焼土範囲がカマド燃焼部であると判断した。明瞭な焚口や袖部・煙道部は確認されなかったが、住居内で最も多くの遺物が出土した。
《出土遺物》36点を図示した（第11図１～19、第12図20～27、第13図28～33、第14図34～36）。いずれも破片だが、土師器坏４点、須恵器坏４点、土師器甕20点、須恵器甕３点、土師器長胴甕３点、紡錘車１点、砥石１点である。第11図１の須恵器坏は、外面に「祐」の墨書が施されている。
《時　　期》平安時代（９世紀前半）と考えられる。



第10図　ＳＩ80竪穴住居跡　ＳＫ75・274・275土坑（１）

ＳＫ79土坑

《位置と確認》Ａ区ＭＡ47・48グリッドのⅡ層で確認した。

《重　　複》ＳＩ80竪穴住居跡を切る。

《規模と平面形》規模は長軸2.06m×短軸1.79m、深さ0.23mで、平面形は円形を呈する。主軸方位はＮ－28°－Ｗを示す。

《土　　層》２層に分層した。

《壁・底面》壁はほぼ垂直に立ち上がる。

《出土遺物》10点を図示した（第14図37～44、第15図45・46）。いずれも破片だが、須恵器坏２点、土師器甕８点である。第14図37の須恵器坏は、底部外面に「春」の墨書が施されている。秋田県内の出土事例は、払田柵跡第107次調査（平成８年度）にて、ＳＸ1192から出土した第46号木簡（春米付札）に「白春米一斗六升」の記載がある。よって事例としては２例目で、墨書土器としては最初の例となる。また、第15図45の土師器甕はＳＩ80竪穴住居跡出土の破片と接合した。この土師器の内面には炭化物が付着しており、自然科学的分析を行った（第５章参照）。

《時　　期》平安時代（９世紀前半）と考えられる。

ＳＫ274土坑

《位置と確認》Ａ区ＬＴ・ＭＡ48グリッドのⅡ層で確認した。

《重　　複》ＳＩ80竪穴住居跡を切り、ＳＫ275土坑に切られている。

《規模と平面形》規模は長軸1.89m×短軸1.50m、深さ0.32mで、平面形は略円形を呈する。主軸方位はＮ－80°－Ｗを示す。

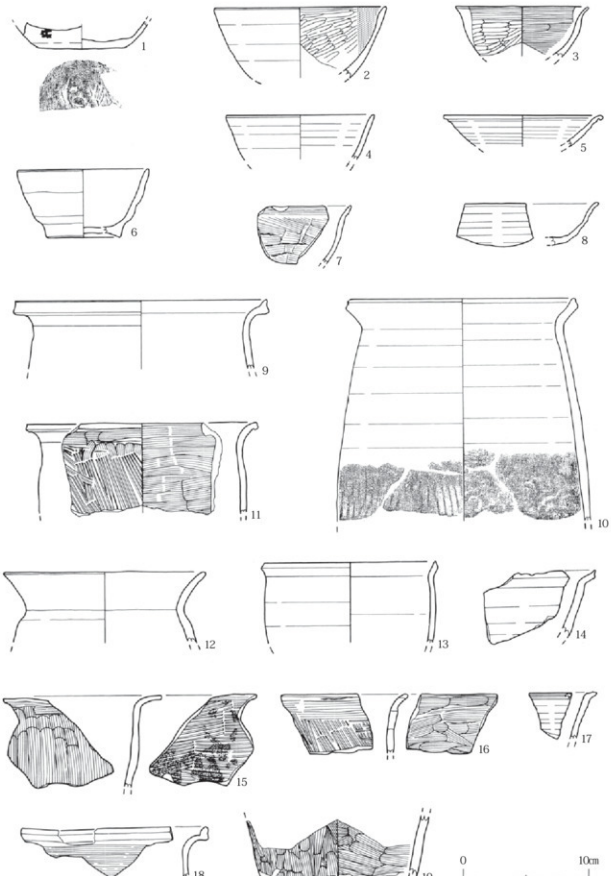
《土　　層》２層に分層した。ＳＩ80竪穴住居跡の断面（Ａ－Ａ′）の10～11層である。

《壁・底面》壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は中央部分が浅く凹む。

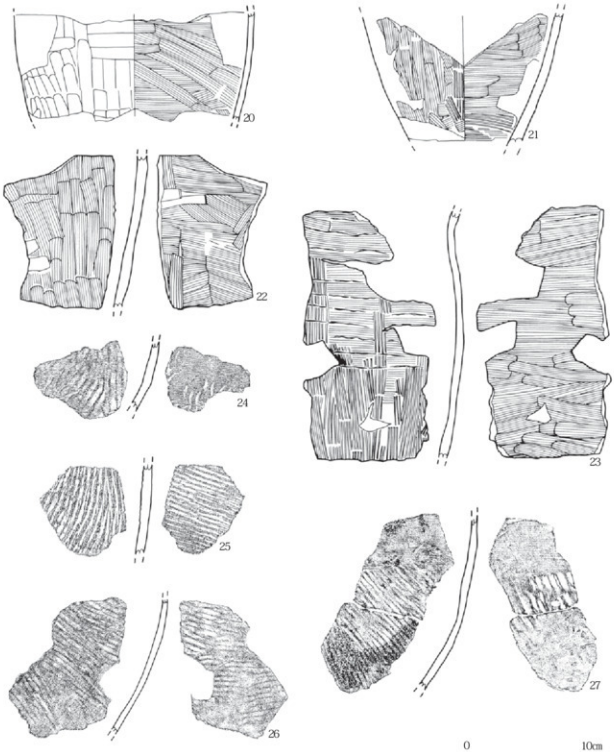
《出土遺物》４点を図示した（第15図47～50）。すべて土師器甕の破片である。第15図48は内面に炭化物が付着しており、自然科学的分析を行った（第５章参照）。

《時　　期》平安時代（９世紀前半）と考えられる。

番号	種別	器形	遺構・層位	計測値 口径(cm)	計測値 底径(cm)	計測値 器高(cm)	特徴
1	須恵器	坏	ＳＩ80Ｒ P31	－	(7.0)	(1.5)	墨書　ロクロ　ヘラ切り
2	土師器	坏	ＳＫ05	(13.4)	－	－	外：ロクロ　内：黒色処理→ミガキ
3	土師器	坏	ＳＩ80覆土中	(10.4)	－	－	外：ナデ→ミガキ　内：ナデ
4	土師器	坏	ＳＩ80焼土	(11.6)	－	－	ロクロ
5	須恵器	坏	ＳＩ80Ｒ P12	(10.2)	－	－	ロクロ
6	須恵器	坏	ＳＩ80Ｒ P07	(12.4)	(5.8)	－	ロクロ
7	土師器	坏	ＳＩ80Ｒ P30	(8.6)	－	－	外：ナデ　粘土紐痕有り　内：黒色処理
8	須恵器	坏	ＳＩ80Ｒ P17	－	－	－	ロクロ
9	土師器	甕	ＳＩ80Ｒ P67・68・ＬＴ47　２層	(19.7)	－	－	ロクロ
10	土師器	鉢(製塩)	ＳＩ80Ｒ P01・覆土東側	(18.0)	－	－	内外：ロクロ、タタキ目有り
11	土師器	甕	ＳＩ80Ｒ P81	(18.0)	－	－	外：ナデ・ハケ目　内：ナデ
12	土師器	甕	ＳＩ80Ｒ P08	(15.7)	－	－	ロクロ
13	土師器	甕	ＳＩ80Ｒ P09	(13.4)	－	－	ロクロ
14	土師器	甕	ＳＩ80カマド焼土	－	－	－	ロクロ
15	土師器	甕	ＳＩ80Ｒ P06	－	－	－	外：ナデ　内：ハケ目　炭化物付着
16	土師器	甕	ＳＩ80Ｒ P86	－	－	－	外：ナデ・ハケ目　粘土紐痕有り　内：ハケ目
17	須恵器	甕	ＳＩ80Ｒ P96	－	－	－	ロクロ
18	土師器	甕	ＳＩ80Ｒ P13	23.8	－	－	内外：ナデ
19	土師器	甕	ＳＩ80カマド・ＥＰ44 南東焼土	－	－	－	内外：ナデ

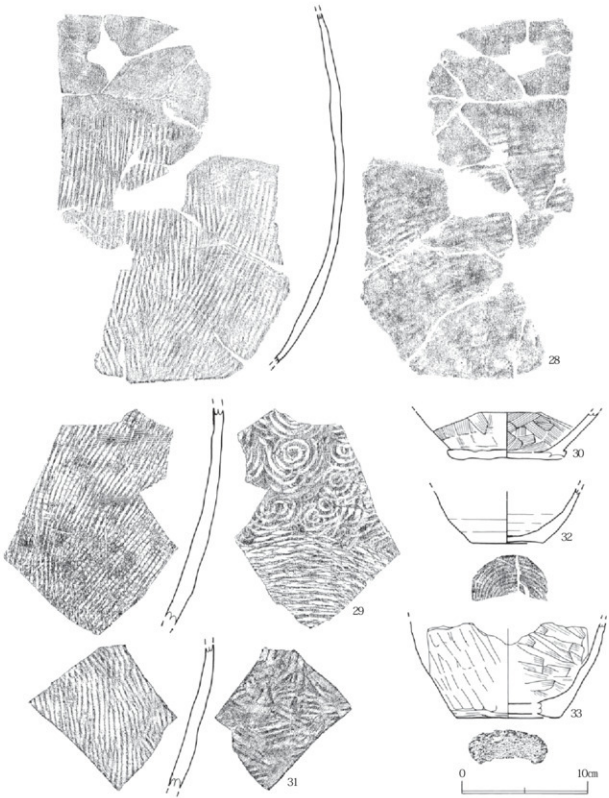


第11図　ＳＩ80出土遺物（２）



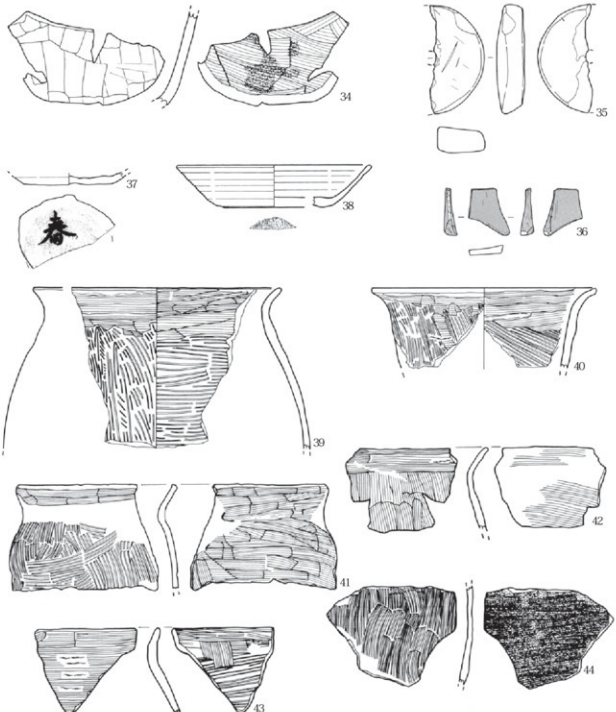
番　号	種　別	器　形	遺　構　・　層　位	計　測　値			特　　徴
				口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	
20	土師器	甕	ＳＩ80ＲＰ28・82・86・１層	－	－	－	外：ナデ　内：ハケ
21	土師器	甕	ＳＩ80ＲＰ21	－	－	－	
22	土師器	長胴甕	ＳＩ80	－	－	－	
23	土師器	甕	ＳＩ80焼土南東・ＲＰ44・67・07	－	－	－	輪積み痕
24	土師器	長胴甕	ＳＩ80焼土２・覆土中	－	－	－	外面タタキ目
25	土師器	甕	ＳＩ80焼土	－	－	－	付着物有り　外面タタキ目
26	土師器	甕	ＳＩ80ＲＰ09・ＳＥ131西	－	－	－	外面タタキ目
27	土師器	甕	ＳＩ80カマド・ＲＰ11	－	－	－	炭化物付着

第12図　ＳＩ80出土遺物（３）



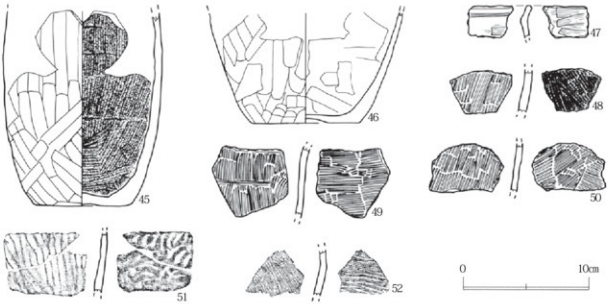
番　号	種　別	器　形	遺　構　・　層　位	計　測　値			特　　徴
				口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	
28	土師器	甕	ＳＩ80カマド・ＲＰ07・10・60	－	－	－	内外：タタキ目
29	須恵器	甕	ＳＩ80ＲＰ04・南東	－	－	－	内外：タタキ目
30	土師器	甕	ＳＩ80ＲＰ64・南西	－	(8.8)	－	底面剥離
31	須恵器	甕	ＳＩ80ＲＰ02・08・22・79	－	－	－	内外：タタキ目
32	土師器	甕	ＳＩ80南東焼土・ＳＫ79 ＲＰ03	－	5.8	－	底部回転糸切り痕（前ひき）
33	土師器	甕	ＳＩ80南東焼土	－	(8.4)	－	砂底

第13図　ＳＩ80出土遺物（４）



番号	種別	器形	遺構・層位	計測値 口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴
34	土師器	甕	ＳＩ80Ｒ Ｐ58	最大長 8.7	最大幅 —	最大厚 2.1	外：ケズリ　内：ナデ　炭化物付着（斜術－５）
35	土製品	紡錘車	ＳＩ80Ｒ Ｐ58	最大長 5.1	最大幅 4.5	最大厚 1.4	炭化物付着
36	石製品	砥石	ＳＩ80Ｒ Ｑ03	—	—	—	墨書「春」
37	須恵器	坏	ＳＫ79	—	7.0	—	底部ヘラ切り、ロクロ
38	須恵器	坏	ＳＫ79	(15.2)	(8.4)	(3.4)	底部ヘラ切り、ロクロ
39	土師器	甕	ＳＫ79	(19.4)	—	—	内外：ハケ目→口縁部ナデ
40	土師器	甕	ＳＫ79	(17.4)	—	—	外：ハケ目→ナデ　内：ナデ
41	土師器	甕	ＳＫ79Ｒ Ｐ03・05	—	—	—	外：ケズリ→ハケ　内：ナデ　口縁のくびれに砂付着
42	土師器	甕	ＳＫ79	—	—	—	内外：ナデ
43	土師器	甕	ＳＫ79Ｒ Ｐ03	—	—	—	外：ナデ　粘土紐痕有り　内：ハケ目
44	土師器	甕	ＳＫ79	—	—	—	外：ハケ目　内：ナデ　付着物有り（斜術－13）

第14図　ＳＩ80・ＳＫ79出土遺物（５）



番号	種別	器形	遺構・層位	計測値			特徴
				口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	
45	土師器	甕	ＳＩ80Ｐ16覆土中ＲＰ ＳＫ79 ＲＰ04	－	(7.0)	－	外：ケズリ 粘土紐痕有り 内：ナデ 炭化物付着(科析－６)
46	土師器	甕	ＳＫ79 ＲＰ01・06	－	(8.4)	－	外：ケズリ 内：剥離有り
47	土師器	甕	ＳＫ274	－	－	－	外：ナデ粘土紐痕有り 内：ナデ
48	土師器	甕	ＳＫ274ＲＰ01	－	－	－	内外：ハケ目 内：付着物有り（科析－９）
49	土師器	甕	ＳＫ274	－	－	－	内外：ハケ目
50	土師器	甕	ＳＫ274	－	－	－	内外：ハケ目 外：付着物痕有り
51	土師器	甕	ＳＫ275	－	－	－	内外：タタキ目
52	土師器	甕	ＳＫ275 ＲＰ	－	－	－	内外：ハケ目

第15図　ＳＫ79・274・275出土遺物（６）

ＳＫ275土坑

《位置と確認》Ａ区ＬＴ・ＭＡ48グリッドのⅡ層で確認した。

《重　　複》ＳＩ80竪穴住居跡とＳＫ274土坑を切っている。

《規模と平面形》規模は長軸2.40m×短軸1.29m、深さ0.48mで、平面形は略円形を呈する。主軸方位はＮ－14°－Ｅを示す。

《土　　層》黒褐色土主体の単層である。ＳＩ80竪穴住居跡の断面（Ａ－Ａ′）の２層である。

《壁・底面》壁は緩く傾斜して立ち上がる。底面は浅いレンズ状を呈する。

《出土遺物》２点を図示した（第15図51・52）。いずれも土師器甕の破片である。

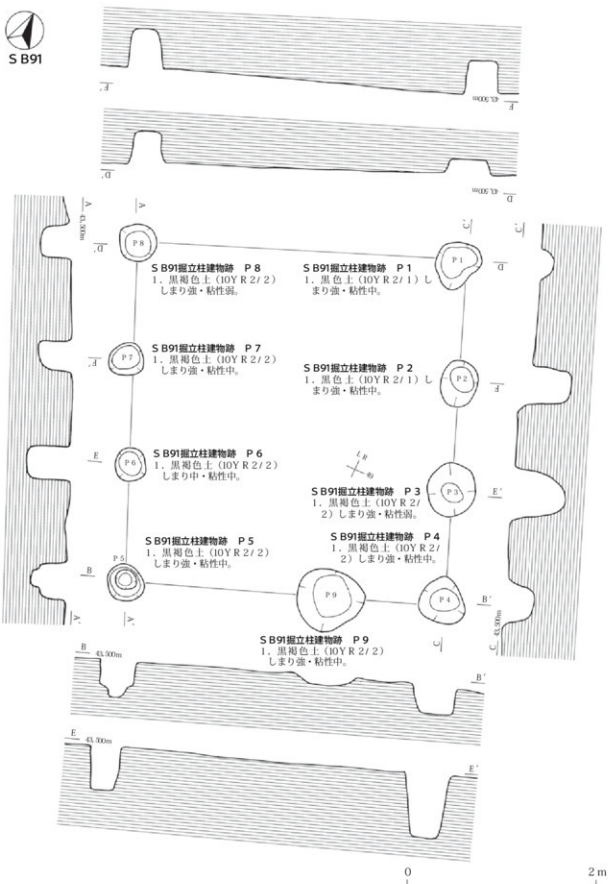
《時　　期》平安時代（９世紀前半）と考えられる。

② 掘立柱建物跡

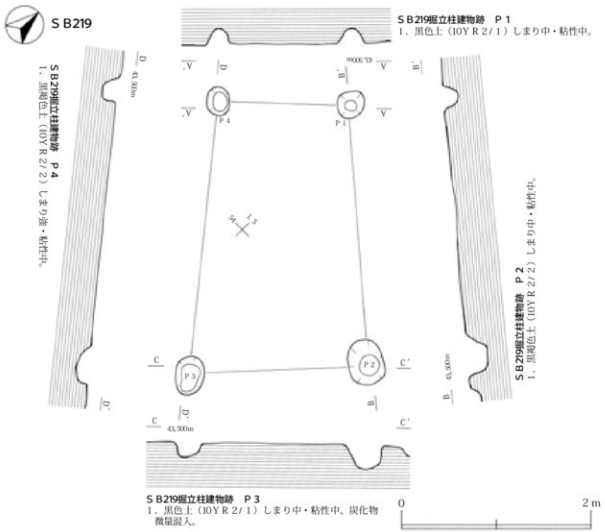
ＳＢ91掘立柱建物跡

《位置と確認》Ａ区ＬＱ・ＬＲ48～49グリッドのⅡ層で確認した。当初、ＳＫＰ91・109～111・115・120～122柱穴様ピットとして検出したが、その配列から掘立柱建物跡と判断した。Ｐ４と５の間にＳＫＰ112（浅い凹み）がある。

《規模と平面形》規模は桁行３間×梁行１間、桁行総長は東側で3.64m、西側では3.58m、柱間距離は東側では南から1.22＋1.20＋1.22m、西側では南から1.30＋1.14＋1.14m、梁行



第16図　S B91掘立柱建物跡



第17図　ＳＢ219掘立柱建物跡

は南側で3.42m、北側では3.30mの側柱式建物である。平面形は正方形に近い。建物方位は東側でＮ－23°－Ｗを示す。

《柱　　穴》Ｐ１～８の計８基を確認した。各柱穴とも土層は黒色土または黒褐色土で、単層である。土層観察からは明瞭な柱痕跡が確認できず、柱材も遺存していなかった。平面形はＰ３・５・６・８の４基が円形、Ｐ１・２・４・７の４基が略円形を呈する。Ｐ５のみ柱掘形が底面に段差となって残っていた。深さは浅いもので0.15m（Ｐ１）、深いものでは0.70m（Ｐ３）と差がある。

《時　　期》平安時代（９世紀代）と考えられる。

ＳＢ219掘立柱建物跡

《位置と確認》Ａ区ＬＲ・ＬＳ53グリッドのⅡ層で確認した。当初、ＳＫＰ219・226・234・252柱穴様ピットとして検出したが、その配列から掘立柱建物跡と判断した。

《規模と平面形》規模は桁行１間×梁行１間、桁行西側は3.26m、東側は3.10mで、梁行南側は2.20m、北側は1.66mの側柱式建物で、建物方位はＮ－45°－Ｅを示す。

《柱　　穴》Ｐ１～４の計４基を確認した。各柱穴とも土層は黒色土または黒褐色土で、単層である。土層観察からは明瞭な柱痕跡が確認できず、柱材も遺存していなかった。平面形は４基とも略円形を呈する。北側の２基（Ｐ１・４）に比べ、南側の２基（Ｐ２・３）の直径が大きい。深さは浅いもので0.15m（Ｐ３）、深いもので0.24m（Ｐ２）である。

《時　　期》平安時代（９世紀代）であると考えられる。

③　土坑

ＳＫ59土坑

《位置と確認》Ａ区ＬＴ49グリッドのⅡ層で確認した。重複は見られなかった。

《規模と平面形》規模は長軸2.48m×短軸2.04m、深さ0.25mで、平面形は略円形を呈する。主軸方位はＮ－81°－Ｗを示す。

《土　　層》２層に分層した。各層（黒褐色土）に微量の焼土・炭化物が混入する。

《壁・底面》壁は緩く傾斜して立ち上がる。底面は南側が平坦であるが、北側は僅かながら凹凸がある。また東側の壁の立ち上がりには、長楕円形の浅い凹みがある。

《出土遺物》６点を図示した（第18図１～６）。いずれも破片だが、須恵器坏２点、土師器甕３点、土師器長胴甕１点である。

《時　　期》平安時代（９世紀代）と考えられる。

ＳＫ60土坑

《位置と確認》Ａ区ＬＮ・ＬＱグリッドのⅡ層で確認した。重複は見られなかった。

《規模と平面形》規模は長軸4.31m×短軸2.91m、深さ0.27mで、平面形は略円形を呈する。主軸方位はＮ－82°－Ｅを示す。

《土　　層》５層に分層した。各層（黒褐色土）に焼土および炭化物が混入していた。

《壁・底面》壁は緩く傾斜して立ち上がる。底面はほぼ平坦だが東側は浅く凹凸がある。西側に向かうに連れてやや深くなる。

《出土遺物》12点を図示した（第19図１～８、第20図９～12）。いずれも破片だが、土師器の台付坏１点、須恵器坏４点、須恵器双耳坏１点、同把手１点、土師器甕５点である。第19図５・６の須恵器双耳坏と把手は同一個体ではなかった。

《時　　期》平安時代（９世紀代）と考えられる。

ＳＫ72土坑

《位置と確認》Ａ区ＬＰ52グリッドのⅡ層で確認した。重複は見られなかった。

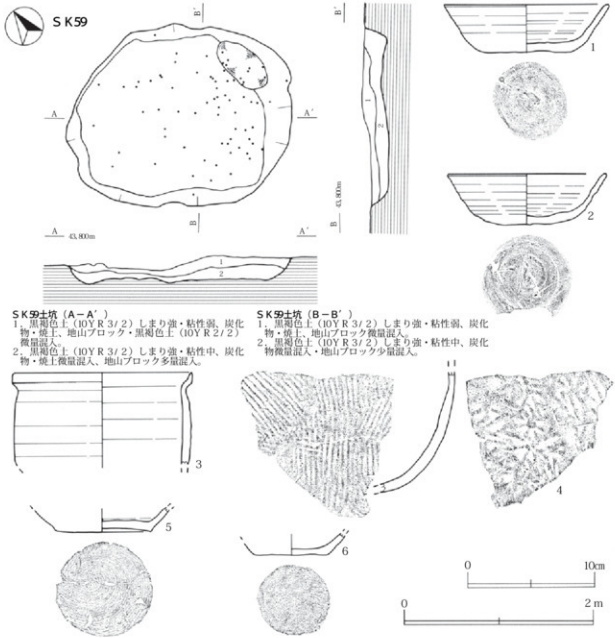
《規模と平面形》規模は長軸0.83m×短軸0.64m、深さ0.08mで、平面形は楕円形を呈する。主軸方位はＮ－79°－Ｗを示す。

《土　　層》単層である。黒褐色土の中に地山ブロックが混入する。

《壁・底面》壁は緩く立ち上がる。底面は平坦である。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

《時　　期》詳細な時期は不明である。



SK59土坑（A－A'）
1．黒褐色土（10YR3/2）しまり強・粘性弱、炭化物・焼土、地山ブロック・黒褐色土（10YR2/2）微量混入。
2．黒褐色土（10YR3/2）しまり強・粘性中、炭化物・焼土微量混入、地山ブロック多量混入。

SK59土坑（B－B'）
1．黒褐色土（10YR3/2）しまり強・粘性弱、炭化物・焼土、地山ブロック微量混入。
2．黒褐色土（10YR3/2）しまり強・粘性中、炭化物微量混入、地山ブロック少量混入。

番号	種別	器形	遺構・層位	計測値 口径(cm)	計測値 底径(cm)	計測値 器高(cm)	特徴
1	須恵器	坏	SK59R P03	(12.5)	6.8	3.8	ヘラ切り　ロクロ
2	須恵器	坏	SK59R P31	(12.4)	6.8	4.1	ヘラ切り
3	土師器	甕	SK59R P20	(14.2)	—	—	ロクロ
4	土師器	長胴甕	SK59R P18・32	—	—	—	内外：タタキ目
5	土師器	甕	SK59R P15	—	7.6	—	回転糸切り　焼成良好
6	土師器	甕	SK59　2層	—	5.5	—	回転糸切り　内：付着物痕有り

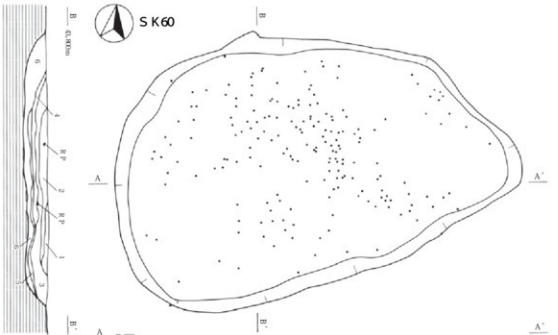
第18図　ＳＫ59土坑・出土遺物

ＳＫ88土坑

《位置と確認》ＡⅠ区ＭＣ50グリッドのⅡ層で確認した。重複は見られなかった。

《規模と平面形》規模は長軸1.25m×短軸0.96m、深さ0.25mで、平面形は略円形を呈する。主軸方位はＮ－85°－Ｅを示す。

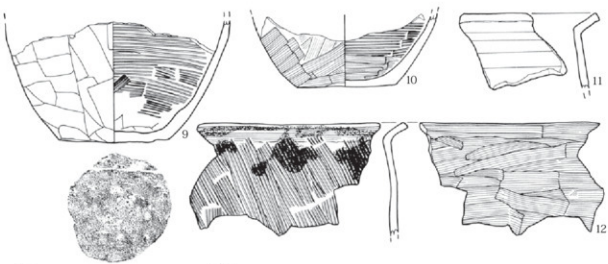
《土　　層》２層に分層した。１層の黒褐色土には微量の炭化物が混入していた。

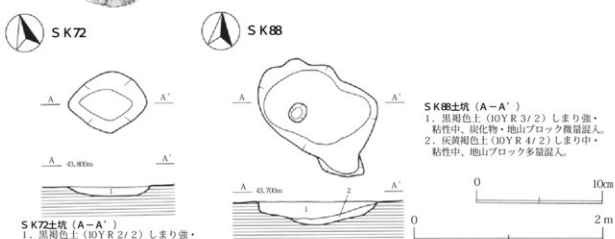


ＳＫ60土坑（Ａ－Ａ′）
1．黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり中・粘性中、炭化物微量混入・地山ブロック多量混入。
2．黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり中・粘性中、炭化物・焼土微量混入、地山ブロック少量混入。
3．黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり中・粘性中、炭化物微量混入・焼土少量混入、地山ブロック多量混入。
4．黒褐色土（10ＹＲ２/２）しまり弱・粘性中（他層より強まり）、焼土・地山ブロック微量混入。
5．黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり中・粘性中、炭化物少量混入・焼土微量混入、地山ブロック多量混入・遺物微量混入。

ＳＫ60土坑（Ｂ－Ｂ′）
1．黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり中・粘性中、炭化物・焼土微量混入、地山ブロック少量混入・遺物微量混入。
2．黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり中・粘性中、炭化物・焼土微量混入、地山ブロック多量混入・遺物微量混入。
3．黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり中・粘性中、炭化物・焼土、地山ブロック・遺物微量混入。
4．黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり中・粘性中、炭化物・焼土微量混入、地山ブロック多量混入。
5．黒褐色土（10ＹＲ２/２）しまり弱・粘性中（他層より強まり）、炭化物多量混入、焼土・地山ブロック微量混入。
6．黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり弱・粘性中、炭化物・焼土微量混入、地山ブロック多量混入。

第19図　ＳＫ60土坑・出土遺物（１）





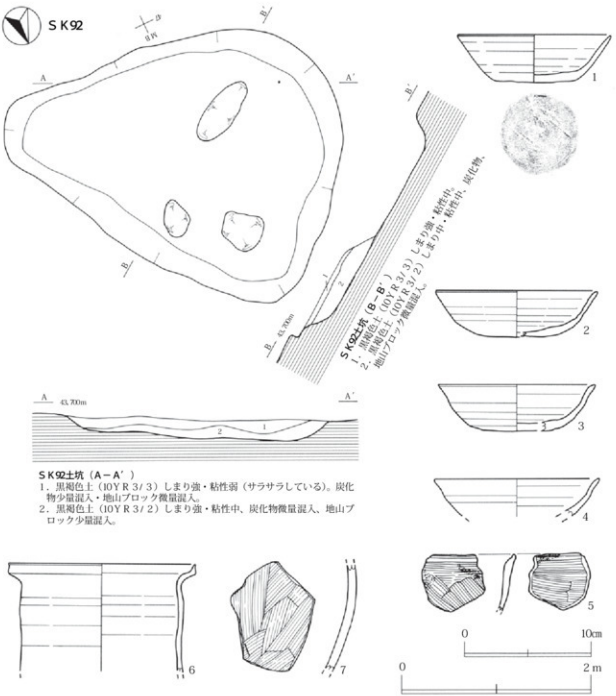
番号	種別	器形	遺構・層位	計測値 口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴
1	土師器	台付坏	ＳＫ60Ｒ Ｐ58	(10.8)	5.0	5.1	ロクロ　内：黒色処理→ミガキ底部静止糸切り
2	須恵器	坏	ＳＫ60Ｒ Ｐ37・38・40	(13.3)	(5.0)	4.4	ロクロ　底部回転糸切り
3	須恵器	坏	ＳＫ60Ｒ Ｐ136	(11.3)	(4.6)	4.7	ロクロ　底部回転糸切り
4	須恵器	坏	ＳＫ60Ｒ Ｐ14・97・98	(13.2)	(5.0)	4.2	ロクロ　底部回転糸切り
5	須恵器	双口坏	ＳＫ60Ｒ Ｐ82・188	10.9	5.4	5.2	ロクロ　底部回転糸切り墨付着
6	須恵器	双口坏(把手)	ＳＫ60Ｒ Ｐ62	—	—	—	—
7	土師器	甕	ＳＫ60Ｒ Ｐ100・149・170	(14.0)	(7.6)	12.8	内外：ナデ　粘土紐痕有り
8	須恵器	坏	ＳＫ60Ｒ Ｐ15	(12.0)	(5.6)	(4.3)	ロクロ
9	土師器	甕	ＳＫ60Ｒ Ｐ127・129・134・135	—	8.6	—	外：ケズリ　内：ハケ目　砂底
10	土師器	甕	ＳＫ60Ｒ Ｐ160	—	7.9	—	外：ケズリ→ナデ　内：ケズリ・ナデ　底部ヘラなで調整
11	土師器	甕	ＳＫ60Ｒ Ｐ07	—	—	—	ロクロ
12	土師器	甕	ＳＫ60Ｒ Ｐ147・148・155・156	—	—	—	外：ハケ目炭化物付着　内：ナデ

第20図　ＳＫ60出土遺物（２）　ＳＫ72・88土坑

《壁・底面》壁は緩く傾斜して立ち上がる。底面は中央に向かって緩やかにくぼむ。
《出土遺物》遺物は出土しなかった。
《時　　期》詳細な時期は不明である。

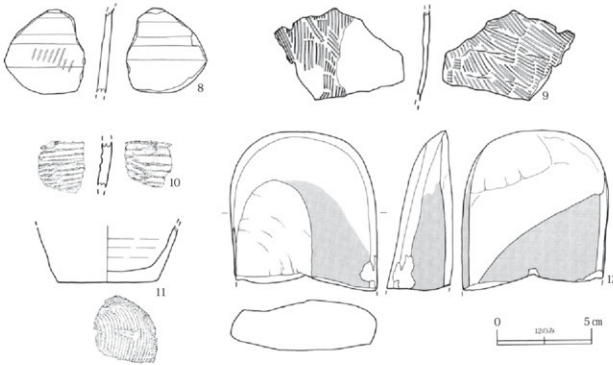
ＳＫ92土坑

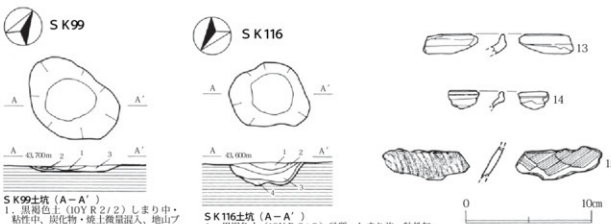
《位置と確認》ＡⅠ区ＭＡ・ＭＢ47グリッドのⅡ層で確認した。重複は見られなかった。
《規模と平面形》規模は長軸3.55m×短軸2.75m、深さ0.22mで、平面形は略円形を呈する。主軸方位はＮ－32°－Ｗを示す。
《土　　層》２層に分層した。各層（黒褐色土）中に微量の炭化物が混入していた。



番　号	種　別	器　形	遺構・層位	計測値 口径(cm)	計測値 底径(cm)	計測値 器高(cm)	特　徴
1	須恵器	坏	SK92南	12.0	6.0	3.8	ヘラ切り
2	土師器	坏	SK92南	(12.6)	(6.1)	3.7	ヘラ切り
3	須恵器	坏	SK92北東	(12.3)	—	3.7	ロクロ・ヘラ切り
4	須恵器	坏	SK92北東	(13.0)	—	—	ロクロ
5	土師器	甕	SK92北	—	—	—	内外：ナデ　炭化物付着
6	土師器	甕	SK92南・北	14.7	—	—	ロクロ
7	土師器	甕	SK92南西	—	—	—	外：タズリ→ナデ
8	土師器	甕	SK92北東	—	—	—	ロクロ→タタキ
9	土師器	甕	SK92北東	—	—	—	内外：ハケ目　粘土紐痕有り
10	土師器	甕	SK92北東	—	—	—	内外：タタキ目
11	土師器	甕	SK92北	—	(8.0)	—	
12	石製品	磨石	SK92南西覆土	最大長(16.9)	最大幅 15.4	最大厚 6.9	
13	土師器	甕	SK90床 P01	—	—	—	
14	土師器	甕	SK116	—	—	—	
15	土師器	甕	SK116	—	—	—	内外：タタキ目

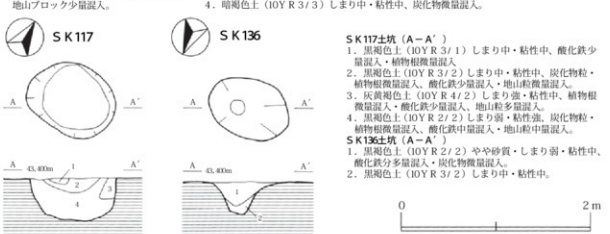
第21図　ＳＫ92土坑・出土遺物（１）





ＳＫ99土坑（Ａ－Ａ'）
1．黒褐色土（10Ｙ Ｒ 2/2）しまり中・粘性中。炭化物・焼土微量混入、地山ブロック多量混入。
2．黒褐色土（10Ｙ Ｒ 3/2）しまり中・粘性中。炭化物微量混入、地山ブロック多量混入。
3．黒褐色土（10Ｙ Ｒ 2/2）しまり中・粘性中。炭化物多量混入・焼土微量混入、地山ブロック少量混入。

ＳＫ116土坑（Ａ－Ａ'）
1．黒褐色土（10Ｙ Ｒ 3/2）砂質・しまり強・粘性無、酸化鉄・炭化物少量混入。
2．黒褐色土（10Ｙ Ｒ 3/2）砂質・しまり弱、酸化鉄・炭化物少量混入、地山ブロック（10ＹＲ6/3、粘性あり）上部に混入。
3．黒褐色土（10Ｙ Ｒ 2/2）しまり中、酸化鉄少量混入・炭化物多量混入。粘性あり。
4．暗褐色土（10Ｙ Ｒ 3/3）しまり中・粘性中、炭化物微量混入。



ＳＫ117土坑（Ａ－Ａ'）
1．黒褐色土（10Ｙ Ｒ 3/1）しまり中・粘性中、酸化鉄少量混入・植物根微量混入。
2．黒褐色土（10Ｙ Ｒ 3/2）しまり中・粘性中、炭化物粒・植物根微量混入、酸化鉄少量混入・地山粒微量混入。
3．灰黄褐色土（10Ｙ Ｒ 4/2）しまり強・粘性中、植物根微量混入・酸化鉄少量混入、地山粒多量混入。
4．黒褐色土（10Ｙ Ｒ 2/2）しまり弱・粘性強、炭化物粒・植物根微量混入、酸化鉄中量混入・地山粒中量混入。

ＳＫ136土坑（Ａ－Ａ'）
1．黒褐色土（10Ｙ Ｒ 2/2）やや砂質・しまり弱・粘性中、酸化鉄分多量混入・炭化物微量混入。
2．黒褐色土（10Ｙ Ｒ 3/2）しまり中・粘性中。

第22図　ＳＫ92出土遺物（２）　ＳＫ99・116・117・136土坑

《壁　・　底　面》壁は緩く立ち上がる。底面は平坦だが東側が僅かに高い。
《出　土　遺　物》12点を図示した（第21図１～12）。土器はいずれも破片だが、土師器坏１点、須恵器坏３点、土師器甕７点、石製品の磨石１点である。
《時　　期》平安時代（９世紀代）と考えられる。

ＳＫ99土坑

《位　置　と　確　認》Ａ区ＬＱ48グリッドのⅡ層で確認した。重複は見られなかった。
《規模と平面形》規模は長軸1.05m×短軸0.72m、深さ0.07mで、平面形は楕円形を呈する。主軸方位はＮ－75°－Ｗを示す。
《土　　層》３層に分層した。各層（黒褐色土）中に微量の炭化物が混入していた。
《壁　・　底　面》壁は緩く立ち上がる。底面は平坦である。
《出　土　遺　物》１点を図示した（第22図13）。土坑西半の３層中から出土した土師器坏（蓋）の口縁部である。
《時　　期》平安時代（９世紀代）と考えられる。

ＳＫ116土坑

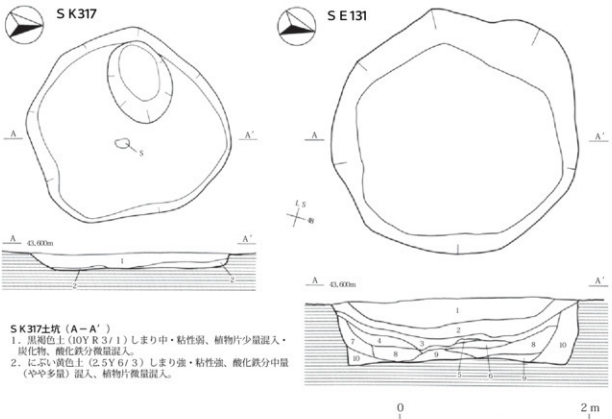
《位　置　と　確　認》Ａ区ＬＱ47グリッドのⅡ層で確認した。重複は見られなかった。
《規模と平面形》規模は長軸0.87m×短軸0.74m、深さ0.24mで、平面形は略円形を呈する。主軸方位はＮ－80°－Ｅを示す。
《土　　層》４層に分層した。各層（黒褐色土）に炭化物が混入するが、特に３層に多く含まれていた。
《壁　・　底　面》壁は緩く傾斜して立ち上がる。底面は中央が僅かに高まっている。
《出　土　遺　物》２点を図示した（第21図14・15）。土師器甕２点である。
《時　　期》平安時代（９世紀代）と考えられる。

ＳＫ117土坑

《位　置　と　確　認》Ａ区ＬＰ49グリッドのⅡ層で確認した。重複は見られなかった。
《規模と平面形》規模は長軸0.95m×短軸0.74m、深さ0.45mで、平面形は楕円形を呈する。主軸方位はＮ－75°－Ｅを示す。
《土　　層》４層に分層した。２・４層（黒褐色土）に微量の炭化物が混入していた。
《壁　・　底　面》壁は急な角度で立ち上がる。底面は皿底状に緩い傾斜がある。
《出　土　遺　物》遺物は出土しなかった。
《時　　期》詳細な時期は不明である。

ＳＫ136土坑

《位　置　と　確　認》Ａ区ＬＱ・ＬＲ52グリッドのⅡ層で確認した。重複は見られなかった。
《規模と平面形》規模は長軸0.88m×短軸0.63m、深さ0.34mで、平面形は楕円形を呈する。主軸方位はＮ－85°－Ｅを示す。
《土　　層》２層に分層した。１層（黒褐色土）に微量の炭化物が混入していた。
《壁　・　底　面》壁は急な角度で立ち上がる。底面は狭く緩い傾斜がある。
《出　土　遺　物》遺物は出土しなかった。



ＳＫ317土坑（Ａ－Ａ′）
1．黒褐色土（10Ｙ Ｒ 3/１）しまり中・粘性弱、植物片少量混入・炭化物、酸化鉄分微量混入。
2．にぶい黄色土（2.5Ｙ 6/３）しまり強・粘性強、酸化鉄分中量（やや多量）混入、植物片微量混入。

ＳＥ131井戸跡（Ａ－Ａ′）
1．黒褐色土（10Ｙ Ｒ 3/１）砂質・しまり強、粘性弱。炭化物、酸化鉄分多量混入。
2．黒褐色土（10Ｙ Ｒ 3/２）しまり強、粘性強、酸化鉄分・炭化物、地山ブロック多量混入。
3．褐灰色土（10Ｙ Ｒ 4/１）水分含有・しまり弱・粘性強、炭化物少量混入、酸化鉄分多量混入・地山ブロック少量混入。
4．黒褐色土（10Ｙ Ｒ 2/２）しまり弱・粘性強、植物片少量混入・炭化物、酸化鉄分・地山ブロック微量混入。
5．にぶい黄褐色土（10Ｙ Ｒ 5/３）しまり弱・粘性強、植物片少量混入。
6．黒色土（7.5Ｙ Ｒ 2/１）粘性弱（パサパサしている）。植物片多量混入、遺物混入・土器混入。
7．褐灰色土（10Ｙ Ｒ 4/１）しまり弱・粘性強、植物片多量混入・酸化鉄分少量混入、地山ブロック多量混入。
8．黒褐色土（7.5Ｙ Ｒ 3/１）しまり弱・粘性強、植物片少量混入・炭化物微量混入、酸化鉄分少量混入。
9．褐灰色土（2.5Ｙ 5/１）しまり弱・粘性強、酸化鉄分少量混入、植物片微量混入。
10．褐灰色土（2.5Ｙ Ｒ 5/２）粘性強・しまり中。

第23図　ＳＫ317土坑・ＳＥ131井戸跡（１）

《時　　期》詳細な時期は不明である。

ＳＫ317土坑

《位置と確認》Ａ区ＬＰ54・55グリッドのⅡ層で確認した。重複は見られなかった。

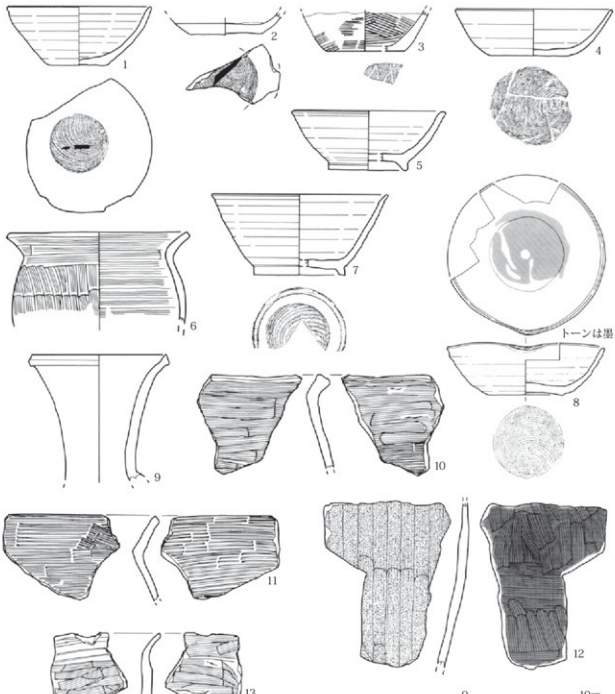
《規模と平面形》規模は長軸2.16m×短軸2.06m、深さ0.17mで、平面形は略円形を呈する。主軸方位はＮ－７°－Ｅを示す。

《土　　層》２層に分層した。１層（黒褐色土）に微量の炭化物が混入していた。

《壁・底面》壁は北側が急角度で立ち上がり、南側は緩く傾斜して立ち上がる。底面は平坦だが南側が僅かに深い。西側の底面には浅い楕円形の凹みがある。

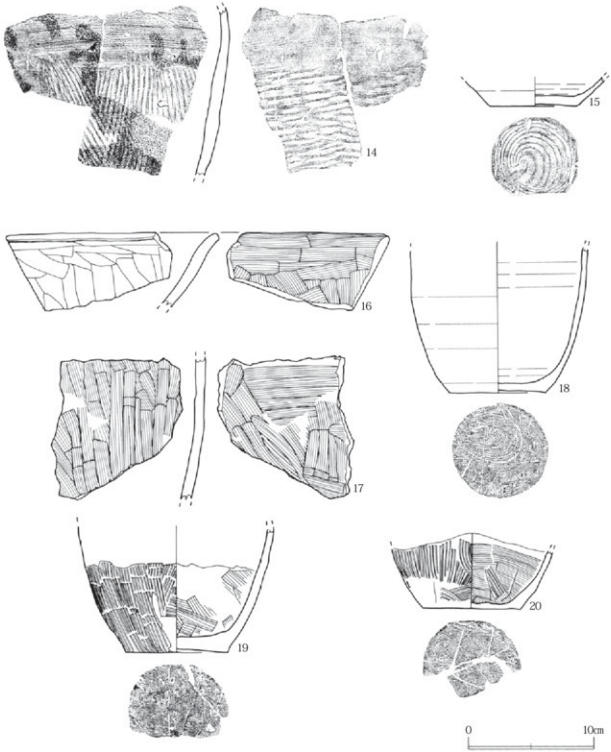
《出土遺物》遺物は出土しなかった。

《時　　期》詳細な時期は不明である。



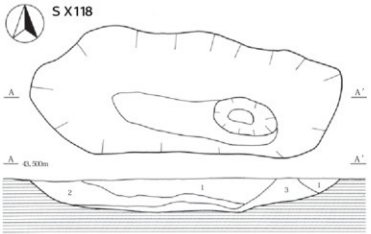
番号	種別	器形	遺構・層位	計測値 口径(cm)	計測値 底径(cm)	計測値 器高(cm)	特徴
1	土師器	坏	ＳＥ131Ｅ P01　東覆土	(11.2)	4.6	4.7	墨書　ロクロ　回転糸切り
2	須恵器	坏	ＳＥ131東	—	5.8	—	墨書　ロクロ　回転糸切り
3	土師器	坏	ＳＥ131	—	(6.3)	—	線刻有り
4	土師器	坏	ＳＥ131西・覆土	(12.2)	6.8	3.7	ロクロ　回転糸切り
5	須恵器	台付坏	ＳＥ131西	(11.6)	(6.0)	4.7	ロクロ　外面染料
6	土師器	甕	ＳＥ131東覆土	(14.0)	—	—	内外：ナデ
7	須恵器	台付坏	ＳＥ131東覆土	(13.8)	(7.2)	6.4	ロクロ
8	須恵器	片口鉢Ⅱ	ＳＥ131東・西覆土	12.3	5.8	4.2	転用硯　回転糸切り
9	須恵器	壺	ＳＥ131東覆土	10.5	—	—	ロクロ　長頸壺
10	土師器	甕	ＳＥ131西	—	—	—	外：ナデ　内：ナデ、ハケ
11	土師器	甕	ＳＥ131東覆土	—	—	—	内外：ハケ目
12	土師器	甕	ＳＥ131東　ＥP01	—	—	—	外：ナデ　炭化物付着（斜桁—10）　内：ナデ　煤
13	土師器	甕	ＳＥ131西	—	—	—	内外：ナデ

第24図　ＳＥ131出土遺物（２）

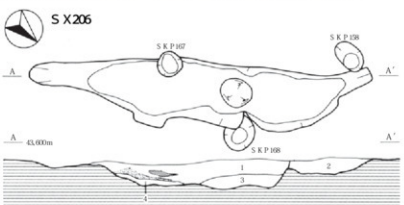


番号	種別	器形	遺構・層位	計測値 口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴
14	土師器	甕	ＳＥ131西層土	—	—	—	内外：タタキ目　外：頭化物付着
15	須恵器	坏	ＳＥ131	—	6.9	—	ロクロ　回転糸切り
16	土師器	鍋	ＳＥ131西層土	—	—	—	外：ケズリ　内：ナデ
17	土師器	甕	ＳＥ131東層土	—	—	—	外：ケズリ→ナデ　内：ナデ
18	土師器	甕	ＳＥ131ＳＰ02・西層土・東層土	—	7.5	—	ロクロ回転糸切り
19	土師器	甕	ＳＥ131東層土	—	8.2	—	外：ハケ目　内：ナデ　底部築脈痕
20	土師器	甕	ＳＥ131東層土	—	7.6	—	外：ハケ目　内：ナデ　底部築脈痕
21	土師器	甕	ＳＸ206北東層土	—	(5.0)	—	—
22	土師器	台付甕	ＳＸ206北東層土	—	—	—	外：タタキ目
23	土師器	甕	ＳＸ206北東層土	—	—	—	内外：ナデ　頭化物付着

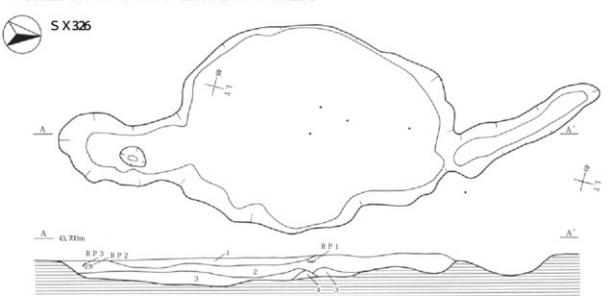
第25図　ＳＥ131出土遺物（３）



ＳＸ118性格不明遺構（Ａ－Ａ′）
1．黒褐色土（10YR 2/2）しまり中・粘性強、炭化物粒・植物根微量混入、酸化鉄多量混入・地山ブロック（φ7cm）１つ混入、地山粒微量混入。
2．黒褐色土（10YR 3/1）しまり弱・粘性強、炭化物粒・植物根微量混入、酸化鉄多量混入・地山ブロック（φ6cm）２つ混入、地山粒少量混入。
3．灰黄褐色土（10YR 5/2）しまり弱・粘性強、植物根微量混入・酸化鉄多量混入、地山粒多量混入。

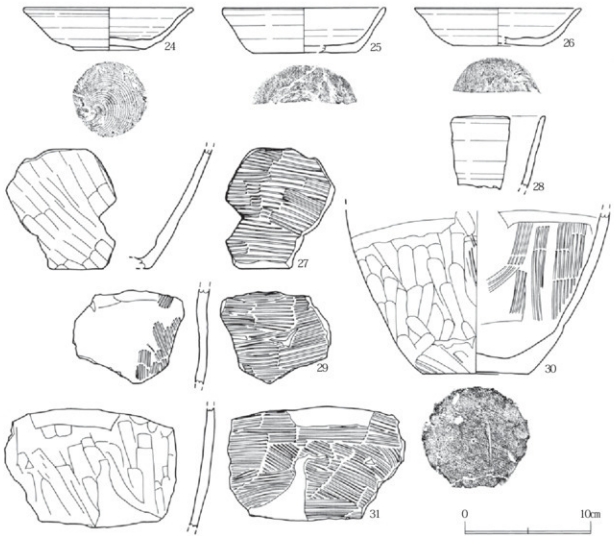


ＳＸ206性格不明遺構（Ａ－Ａ′）
1．黒褐色土（10YR 2/2）しまり弱・粘性強、焼土・炭化物少量混入、地山ブロック微量混入。
2．黒褐色土（10YR 2/2）しまり中・粘性中、炭化物微量混入・地山ブロック多量混入。
3．灰黄褐色土（10YR 4/2）しまり中・粘性中、地山ブロック微量混入。
4．黒褐色土（10YR 2/2）しまり中・粘性中、地山ブロック微量混入。



ＳＸ326性格不明遺構（Ａ－Ａ′）
1．褐灰色土（10YR 4/1）しまり中・粘性強、炭化物少量混入・酸化鉄分、地山ブロック多量混入・植物片微量混入。
2．黒褐色土（10YR 3/1）しまり強・粘性強、炭化物少量混入・酸化鉄分多量混入、植物片微量混入。
3．黒褐色土（2.5T 3/2）しまり強・粘性強、酸化鉄分・地山ブロック多量混入、植物片微量混入。
4．黒褐色土（2.5Y 3/1）しまり強・粘性強、酸化鉄分・植物片微量混入。

第26図　ＳＸ118・206・326性格不明遺構・出土遺物



番号	種別	器形	遺構・層位	計測値 口径(cm)	計測値 底径(cm)	計測値 器高(cm)	特徴
24	須恵器	坏	ＳＸ326Ｒ Ｐ07	13.0	6.0	3.2	ロクロ　回転糸切り
25	土師器	坏	ＳＸ326内	12.7	(8.4)	3.6	ロクロ　ヘラ切り
26	須恵器	坏	ＳＸ326Ｒ Ｐ05	13.0	(7.0)	3.0	ロクロ　ヘラ切り
27	土師器	甕	ＳＸ326南西	—	(10.0)	—	外：ケズリ　内：ハケ目
28	須恵器	陶玉または長頸瓶	ＳＸ326北東	—	—	—	ロクロ　長頸瓶の頸部
29	土師器	甕	ＳＸ326内	—	—	—	外：一部ハケ目　付着物有り　内：ハケ目
30	土師器	甕	ＳＸ326Ｒ Ｐ04	—	8.2	—	外：ケズリ　内：一部ハケ目　砂底　ハケ調整有り
31	土師器	甕	ＳＸ326北東・南西	—	—	—	外：ケズリ　内：ハケ目

第27図　ＳＸ326出土遺物

④　井戸跡

ＳＥ131井戸跡

《位置と確認》Ａ区ＬＳ48グリッドのⅡ層で確認した。重複は見られなかった。

《規模と平面形》規模は長軸2.81ｍ×短軸2.53ｍ、深さ0.69ｍで、平面形は円形を呈する。主軸方位はＮ－61°－Ｗを示す。

《土　　層》10層に分層した。上面（１～２層の黒褐色土）は炭化物が多量に混入し、それ以下は微量混入していた。５～６層に腐植した木片が残存しており、井戸の部材と判断した。８～９層に達すると徐々に水が湧き出てきた。

《壁・底　面》壁は東側が垂直に立ち上がるが、西側は緩く傾斜して立ち上がる。底面は平坦で、

僅かに中央部分が高くなる。

《出土遺物》20点を図示した（第24図１～13、第25図14～20）。破片のものが多いが、土師器坏３点、須恵器坏２点、須恵器台付坏２点、須恵器片口状坏１点、土師器甕10点、土師器鍋１点、須恵器長頸壺１点である。第24図１・２の土師器坏は底部外面に墨書がある。前者は「一」と読めるが、後者は異なる文字の可能性もある。８の須恵器片口坏は内面に墨が付着しており、転用硯であると考えられる。９の長頸壺頸部は20の土師器甕（底面に葉脈痕）と重なって出土した。これらの遺物は、２層以下から井戸跡の底面まで全層から出土した。

《時　　期》平安時代（９世紀代）と考えられる。

⑤　性格不明遺構

ＳＸ118性格不明遺構

《位置と確認》Ａ区ＬＱ・ＬＲ51グリッドのⅡ層で確認した。重複は見られなかった。

《規模と平面形》規模は長軸3.29ｍ×短軸1.34ｍ、深さ0.35ｍで、平面形は楕円形を呈する。主軸方位はＮ－87°－Ｅを示す。

《土　　層》３層に分層した。１・２層（黒褐色土）に微量の炭化物が混入していた。

《壁・底面》壁は緩く傾斜して立ち上がる。底面は平坦である。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

《時　　期》詳細な時期は不明である。

ＳＸ130性格不明遺構

《位置と確認》Ａ区ＬＳ46グリッドのⅡ層で確認した。

《重　　複》ＳＫＰ164・165柱穴様ピットに切られる。

《規模と平面形》正確な規模は不明であるが直径0.50～0.70ｍ、深さ約0.25ｍで、平面形は楕円形を呈する。

《土　　層》黒褐色土の単層である。

《壁・底面》壁は全体的に緩く立ち上がる。底面は浅い凹みで、ほぼ平坦である。

《出土遺物》第７図のＡ区遺構配置図上に図示した。

《時　　期》詳細な時期は不明である。

ＳＸ206性格不明遺構

《位置と確認》Ａ区ＬＳ46・47グリッドのⅡ層で確認した。

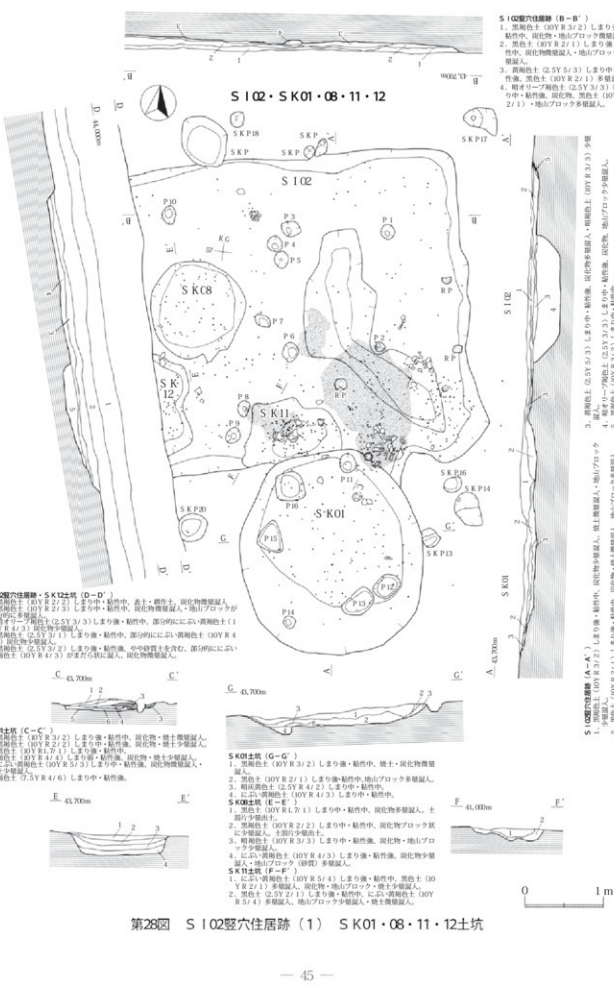
《重　　複》ＳＫＰ158・167柱穴様ピットに切られ、ＳＫＰ168柱穴様ピットを切る。

《規模と平面形》規模は長軸3.62ｍ×短軸0.72ｍ、深さ0.31ｍで、平面形は細長い楕円形を呈する。主軸方位はＮ－42°－Ｗを示す。

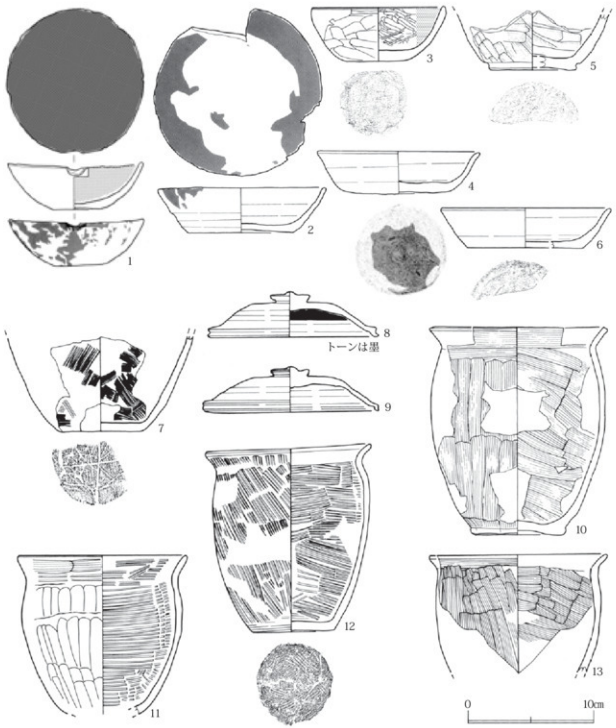
《土　　層》４層に分層した。黒褐色土主体で上位の１・２層のみ、微量の炭化物が含まれる。

《壁・底面》壁は、南北方向が緩く傾斜して立ち上がり、東西方向は急角度で立ち上がる。底面は２段あり、北側が浅く南側は深い。底面中央に浅い凹みがある。

《出土遺物》３点を図示した（第26図21～23）。いずれも破片だが土師器甕である。21は底部で、

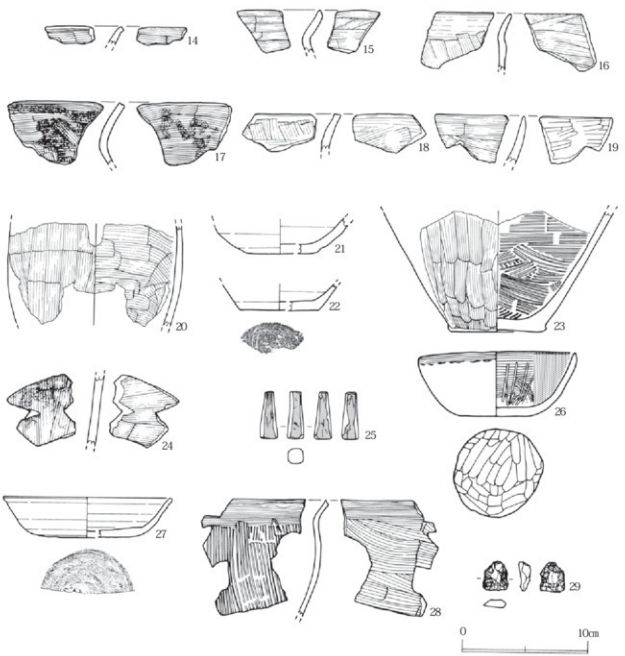


第28図　ＳＩ02竪穴住居跡（１）　ＳＫ01・08・11・12土坑



番号	種別	器形	遺構・層位	計測値 口径(cm)	計測値 底径(cm)	計測値 器高(cm)	特徴
1	土師器	坏	S I02　R P08	10.5	3.6	3.7	漆容器
2	土師器	坏	S I02　K F36　R P17・2層	13.2	8.2	3.5	漆容器　ロクロ　ヘラ切り（科板－2）
3	土師器	坏	S I02　R P19	(10.4)	5.1	4.3	外：ケズリ→ミガキ　内：黒色処理→ミガキ　底部ハケ調整
4	須恵器	坏	S K01　R P75	12.6	7.0	3.3	外：ロクロ　底部ヘラ切り→ナデ　墨付着　内：付着物有り
5	土師器	甕	S I02　R P02・03	—	(6.8)	—	内外：ナデ
6	須恵器	坏	S K01　R P06	(13.2)	(9.2)	3.2	ロクロ　ヘラ切り
7	土師器	甕	S I02　R P01・17・60・覆土 S K12　R P01・12・15・21・22	—	(6.8)	—	内外：ハケ目　葉脈痕
8	須恵器	蓋	S K01　R P72　S I02　R P30	13.5	—	3.1	ロクロ　つまみ径　3.1cm　転用鋭
9	須恵器	蓋	S K01　R P72　S I02　R P30	13.9	—	3.6	ロクロ　つまみ径　3.0cm
10	土師器	甕	S K01　R P50・52・53・90・97・119	(13.5)	7.2	16.4	外：ケズリ→ナデ　内：ナデ
11	土師器	甕	S K01　R P01・46・108・110 S I02　R P09・18・56・61	(13.2)	—	—	外：ナデ，ケズリ　内：ハケ目
12	土師器	甕	S K01　R P01・03・05・10・17・18・33・49	13.0	6.5	14.9	内外：ハケ目　底部ハケ目
13	土師器	甕	S I02　R P15・23・29	(14.0)	—	(9.3)	内外：ナデ

第29図　S I02・S K01出土遺物（２）



番号	種別	器形	遺構・層位	計測値 口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴
14	土師器	椀	ＳＫ01　ＲＰ52	—	—	—	内外：ナデ
15	土師器	甕	ＳＫ01　ＲＰ81	—	—	—	内外：ナデ
16	土師器	甕	ＳＫ01　ＲＰ73	—	—	—	内外：ナデ
17	土師器	甕	ＳＫ12　ＲＰ09	—	—	—	内外：ナデ　炭化物付着　貼土頭痕有り
18	土師器	甕	ＳＫ01　ＲＰ18	—	—	—	内外：ナデ
19	土師器	坏	ＳＫ01　ＲＰ85	—	—	—	外：ナデ　内：ミガキ
20	土師器	甕	ＳＫ01　ＲＰ15・96・110・111・113・115・125	—	—	—	内外：ナデ
21	須恵器	坏	ＳＫ01　ＲＰ76	—	—	—	ロクロ
22	土師器	坏	ＳＫ01　ＲＰ49	—	(5.2)	—	ロクロ　底部ハケ目
23	土師器	甕	ＳＫ01　ＲＰ33・64・27	—	(6.2)	—	外：ナデ　内：ハケ目
24	土師器	甕	ＳＫ01　ＲＰ43	—	(7.4)	—	内外：ナデ　外面に炭化物付着（斜術－１）
25	石製品	—	ＳＫ01　ＲＱ02	最大長 5.3	最大幅 1.7	最大厚 1.7	研ぎ面有り
26	土師器	坏	ＳＫ11　ＲＰ41	12.1	5.8	5.1	外：ケズリ→ミガキ・一部横ナデ 内：黒色処理→ミガキ（横位・放射状）・タテ）底部ケズリ
27	須恵器	坏	ＳＫ11　ＲＰ02	13.6	8.0	3.2	ロクロ　ヘラ切り
28	土師器	甕	ＳＫ11　ＲＰ30・47・50	—	—	—	外：ハケ目・一部横ナデ　内：ナデ
29	剥片石器	—	ＳＫ01　ＲＱ01	最大長 3.1	最大幅 2.7	最大厚 0.8	黒曜石

第30図　ＳＩ02・ＳＫ01・08・11・12出土遺物（３）

22は長胴甕の胴部、23は胴部破片で内面に炭化物が付着している。

《時　　期》平安時代（９世紀代）と考えられる。

ＳＸ326性格不明遺構

《位置と確認》A区ＬＳ47・48、ＬＴ47・48グリッドのⅡ層で確認した。重複は見られなかった。

《規模と平面形》規模は長軸5.71ｍ×短軸2.18ｍ、深さ0.30ｍで、平面形は略円形であるが南側に長楕円形の張り出しがあり、北側には溝状の穴が取り付く形態を呈する。主軸方位はＮ－20°－Ｗを示す。

《土　　層》４層に分層した。黒褐色土主体で上位の１・２層のみ、微量の炭化物が含まれる。

《壁・底面》壁は南北方向が緩く傾斜して立ち上がり、東西方向は急角度で立ち上がる。底面はおおむね平坦である。北側が浅く南側は深い。

《出土遺物》８点を図示した（第27図24～31）。土師器坏１点、須恵器坏２点、須恵器１点、土師器甕４点である。第27図24の土師器坏は完形品に近いもので、28の須恵器破片は瓶または長頸瓶の頸部と考えられる。

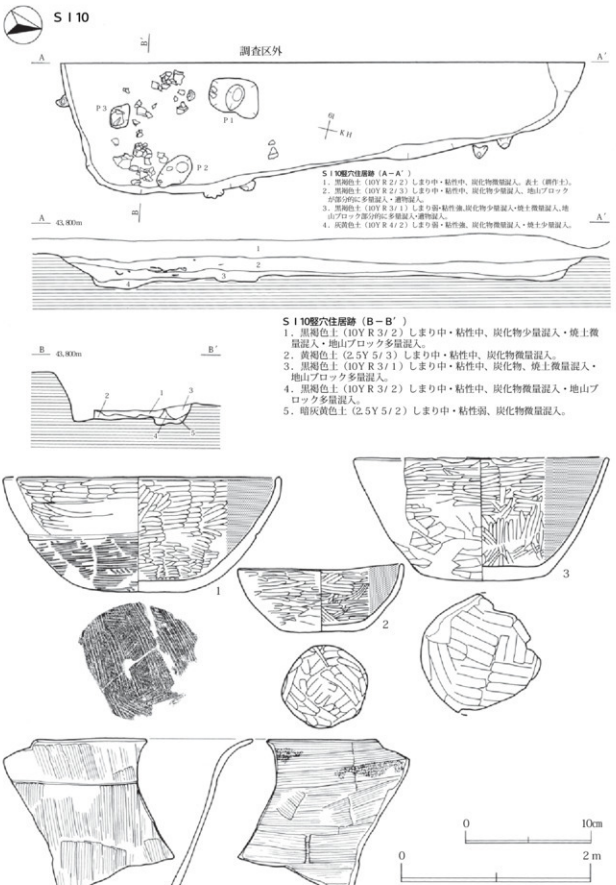
《時　　期》周囲をＳＫ59土坑やＳＩ80竪穴住居跡、ＳＥ131井戸跡などに囲まれた遺構である。出土した遺物から、それら周辺遺構と同じ時期のものと考えられる。よって平安時代（９世紀代）と判断した。精査後の形態から性格不明遺構としたが、その機能は土坑に準ずるものと想定される。

⑥　柱穴様ピット

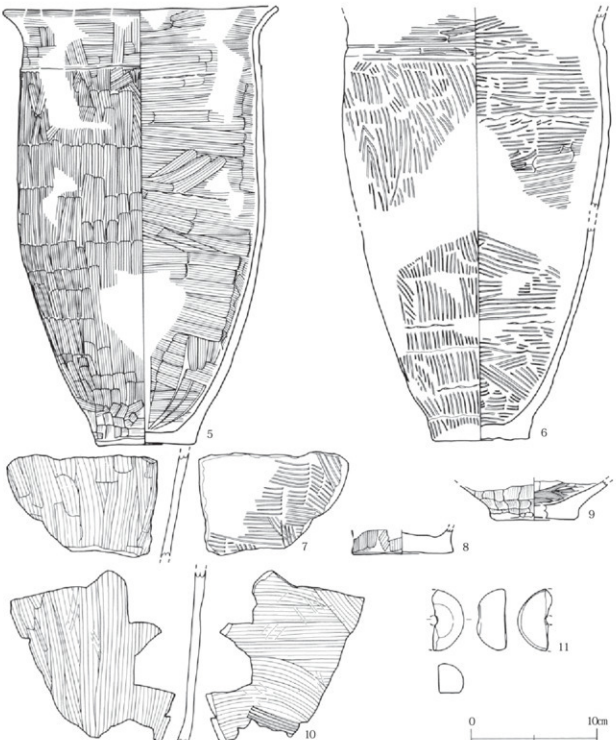
ＳＫＰ181基（Ａ区）※数が多いため計測一覧に記載。

第４表　柱穴様ピット計測一覧（Ａ区その１）

遺構番号	所在区	確認面	長軸(単位:m)	短軸(単位:m)	深さ（単位：m）	底面標高(m)	平面形	覆土
ＳＫＰ62	ＭＡ47	Ⅱ	0.33	0.27	0.22	43.44	円形	黒褐色土（10ＹＲ3/2）しまり中　粘性無
ＳＫＰ63	ＬＱ49	Ⅱ	0.25	0.24	0.17	43.49	円形	黒褐色土（10ＹＲ2/2）しまり強　粘性無
ＳＫＰ64	ＬＱ49	Ⅱ	0.28	0.21	0.16	43.53	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ2/3）しまり強　粘性無
ＳＫＰ65	ＬＰ52	Ⅱ	0.29	0.27	0.17	43.40	円形	黒褐色土（10ＹＲ2/3）しまり強　粘性無
ＳＫＰ66	ＬＰ52	Ⅱ	0.29	0.28	0.18	43.40	隅丸方形	黒褐色土（10ＹＲ2/3）しまり強　粘性無
ＳＫＰ67	ＬＰ52	Ⅱ	0.37	0.32	0.19	43.38	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ2/2）しまり中　粘性無
ＳＫＰ68	ＬＰ52	Ⅱ	0.36	0.31	0.13	43.44	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ3/1）しまり強　粘性無
ＳＫＰ69	ＬＰ52	Ⅱ	0.34	0.31	0.19	43.39	円形	黒褐色土（10ＹＲ2/3）しまり強　粘性無
ＳＫＰ70	ＬＯ52	Ⅱ	0.33	0.24	0.13	43.43	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ2/3）しまり中　粘性中
ＳＫＰ71	ＬＰ52	Ⅱ	0.45	0.32	0.16	43.42	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ2/3）しまり強　粘性無
ＳＫＰ74	ＭＡ51	Ⅱ	0.47	0.30	0.17	43.29	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ2/2）しまり強　粘性無
ＳＫＰ75	ＭＢ・ＭＣ51	Ⅱ	0.32	0.27	0.19	43.29	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ2/2）しまり中　粘性弱
ＳＫＰ78	ＬＳ51	Ⅱ	0.57	0.37	0.23	43.20	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ2/2）しまり強　粘性中
ＳＫＰ84	ＬＱ52	Ⅱ	0.49	0.39	0.65	42.79	楕円形	黒色土（10ＹＲ1.7/1）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ91（ＳＢ91－Ｐ3）	ＬＱ49	Ⅱ	0.57	0.51	0.70(ＳＰＥ－Ｅ') 0.97(ＳＰＣ－Ｃ')	42.79	円形	黒褐色土（10ＹＲ2/2）しまり中　粘性弱
ＳＫＰ97	ＬＮ48	Ⅱ	0.26	0.25	0.14	43.45	隅丸方形	黒褐色土（10ＹＲ2/2）しまり中　粘性中
ＳＫＰ102	ＬＱ46	Ⅱ	0.32	0.28	0.14	43.46	隅丸方形	黒褐色土（10ＹＲ3/2）しまり強　粘性中
ＳＫＰ103	ＬＱ46	Ⅱ	0.55	0.28	0.25	43.30	隅丸方形	黒褐色土（10ＹＲ3/2）しまり強　粘性中
ＳＫＰ104	ＬＱ46	Ⅱ	0.55	0.32	0.20	43.36	隅丸方形	黒褐色土（10ＹＲ3/2）しまり強　粘性中
ＳＫＰ109（ＳＢ91－Ｐ1）	ＬＱ・ＬＲ49	Ⅱ	0.51	0.45	0.15(ＳＰＣ－Ｃ') 0.15(ＳＰＦ－Ｆ')	43.15	隅丸方形	黒色土（10ＹＲ2/1）　しまり強　粘性中
ＳＫＰ110（ＳＢ91－Ｐ2）	ＬＱ49	Ⅱ	0.50	0.40	0.41(ＳＰＥ－Ｅ') 0.41(ＳＰＦ－Ｆ')	42.93	楕円形	黒色土（10ＹＲ2/1）　しまり強　粘性中
ＳＫＰ111（ＳＢ91－Ｐ4）	ＬＱ48	Ⅱ	0.51	0.47	0.30(ＳＰＢ－Ｂ') 0.28(ＳＰＣ－Ｃ')	43.14	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ2/2）しまり強　粘性中
ＳＫＰ112	ＬＱ48	Ⅱ	0.71	0.66	0.11	43.37	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ2/2）しまり強　粘性中
ＳＫＰ115（ＳＢ91－Ｐ5）	ＬＲ48	Ⅱ	0.40	0.37	0.39(ＳＰＢ－Ｂ') 0.37(ＳＰＡ－Ａ')	43.07	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ2/2）しまり強　粘性中
ＳＫＰ120（ＳＢ91－Ｐ6）	ＬＲ48	Ⅱ	0.37	0.35	0.36(ＳＰＥ－Ｅ') 0.35(ＳＰＡ－Ａ')	42.99	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ2/2）しまり中　粘性中

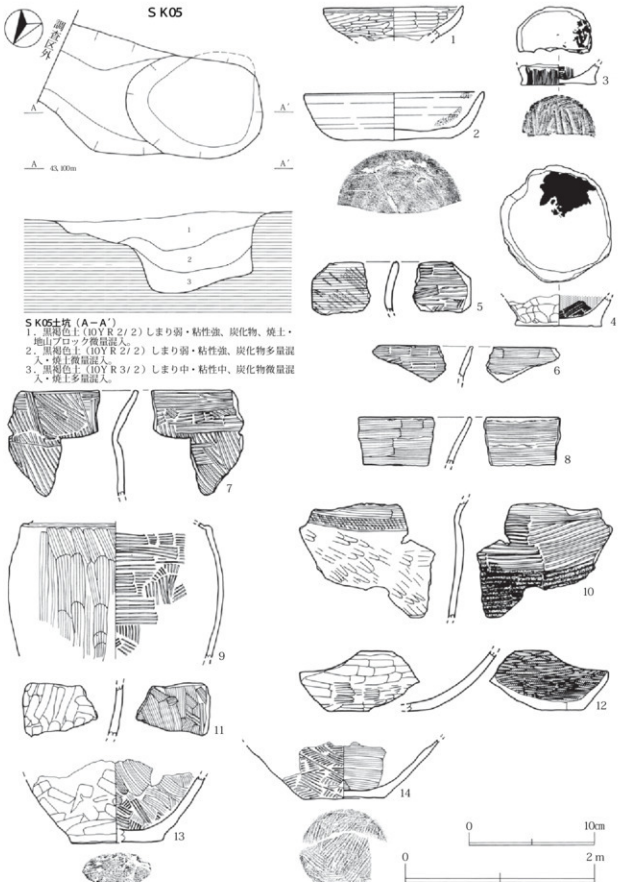


第31図　ＳＩ10竪穴住居跡・出土遺物（１）



番号	種別	器形	遺構・層位	計測値 口径(cm)	計測値 底径(cm)	計測値 器高(cm)	特徴
1	土師器	鉢	ＳＩ10Ｒ Ｐ10･24･25･29･30･65･67･75･94･98･107・２層・３層	21.2	7.0	9.1	外：ハケ目→ミガキ　内：黒色処理→ミガキ　底部ハケ目
2	土師器	坏	ＳＩ10Ｒ Ｐ10･26･41･120･122・２層	12.7	6.4	4.9	外：ケズリ→ミガキ　内：黒色処理→ミガキ　底部ケズリ
3	土師器	鉢	ＳＩ10Ｒ Ｐ10･65･98･101･125･148・75	(2.0)	(6.2)	5.8	外：ケズリ→ミガキ　内：黒色処理→ミガキ　底部ケズリ
4	土師器	甕	ＳＩ10Ｒ Ｐ132	(22.0)	—	—	外：ハケ目→ナデ　内：ナデ　底板圧痕有（料析－４）
5	土師器	甕	ＳＩ10Ｒ Ｐ5･22･41･30･93･99･119･97･104･96･99･154･156・２層・99トレンチ	21.3	7.8	34.6	外：ハケ目→ナデ　内：ナデ
6	土師器	甕	ＳＩ10Ｒ Ｐ30･85･121･161･192･190・２層	—	(7.6)	—	内外：ハケ目　貼土接痕有り　図上復元
7	土師器	甕	ＳＩ10Ｒ Ｐ131	—	—	—	外：ナデ　内：ハケ目
8	土師器	甕	ＳＩ10Ｒ Ｐ122・２層	—	(8.0)	—	外：ナデ
9	土師器	鍋	ＳＩ10Ｒ Ｐ156	—	(6.2)	—	内外：ナデ
10	土師器	甕	ＳＩ10Ｒ Ｆ22･30･85･98･86･96･98	—	—	—	内外：ハケ目→ナデ
11	土製品	紡錘車	ＳＩ10Ｒ Ｐ133	最大長 4.9	最大幅 (2.5)	最大厚 2.3	

第32図　ＳＩ10出土遺物（２）



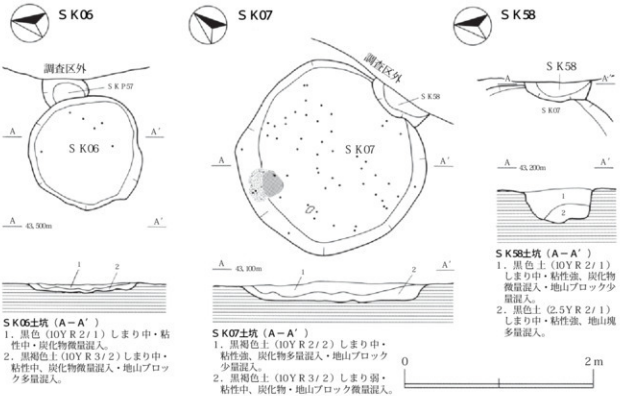
第33図　ＳＫ05土坑・出土遺物

第５表　柱穴様ピット計測一覧（Ａ区その２）

遺構番号	所在区	確認面	長軸(単位:m)	短軸(単位:m)	深さ（単位：m）	標高値(単位:m)	平　面　形	覆　　土
ＳＫＰ121（ＳＢ91－Ｐ7）	ＬＲ48・49	Ⅱ	0.37	0.34	0.35(ＳＰＡ－Ａ') 0.34(ＳＰＦ－Ｆ')	43.10	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ２/２）しまり強　粘性中
ＳＫＰ122（ＳＢ91－Ｐ8）	ＬＲ49	Ⅱ	0.42	0.41	0.33(ＳＰＤ－Ｄ') 0.31(ＳＰＡ－Ａ')	43.09	円形	黒褐色土（10ＹＲ２/２）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ127	ＬＲ48	Ⅱ	0.51	0.31	0.20	43.25	隅丸方形	黒褐色土（10ＹＲ２/２）しまり強　粘性中
ＳＫＰ128	ＬＲ47	Ⅱ	0.31	0.28	0.19	43.35	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ２/２）しまり強　粘性中
ＳＫＰ137	ＬＲ53	Ⅱ	0.28	0.23	0.13	43.22	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり強　粘性中
ＳＫＰ138	ＬＲ52・53	Ⅱ	0.22	0.21	0.12	43.22	円形	黒色土（10ＹＲ２/１）しまり強　粘性中
ＳＫＰ139	ＬＳ52	Ⅱ	0.28	0.24	0.15	43.19	楕円形	黒色土（10ＹＲ２/１）しまり強　粘性中
ＳＫＰ140	ＭＣ47	Ⅱ	0.27	0.25	0.13	43.34	円形	1．黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり強　粘性中 2．黄褐色土（2.5ＹＲ５/４）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ141	ＭＡ46	Ⅱ	0.35	0.31	0.54	43.04	円形	1．暗褐色土（10ＹＲ３/３）しまり中　粘性弱 2．暗褐色土（10ＹＲ３/３）しまり強　粘性中
ＳＫＰ142	ＬＴ46	Ⅱ	0.31	0.29	0.19	43.39	円形	黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり強　粘性中
ＳＫＰ143	ＭＡ46	Ⅱ	0.18	0.17	0.09	43.50	隅丸方形	黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ144	ＭＡ46	Ⅱ	0.24	0.19	0.23	43.36	隅丸方形	黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ145	ＭＡ46	Ⅱ	0.28	0.25	0.24	43.35	隅丸方形	黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり強　粘性中
ＳＫＰ146	ＬＴ46	Ⅱ	0.44	0.37	0.40	43.18	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり強　粘性中
ＳＫＰ147	ＬＴ46	Ⅱ	0.38	0.21	0.18	43.41	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり強　粘性中
ＳＫＰ148	ＬＳ・ＬＴ46	Ⅱ	0.37	0.30	0.27	43.23	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり強　粘性中
ＳＫＰ149	ＬＳ・ＬＴ46	Ⅱ	0.62	0.33	0.26	43.24	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり強　粘性中
ＳＫＰ150	ＬＴ46	Ⅱ	0.57	0.30(現存値)	0.30	43.20	隅丸方形	1．灰黄褐色土（10ＹＲ４/２）しまり強　粘性無 2．にぶい黄褐色土（10ＹＲ４/３）しまり強　粘性弱 3．にぶい黄褐色土（10ＹＲ４/３）しまり強　粘性中
ＳＫＰ151	ＬＴ46	Ⅱ	0.28	0.23	0.18	43.32	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり強　粘性中
ＳＫＰ152	ＬＴ46	Ⅱ	0.37	0.29	0.22	43.25	隅丸方形	黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり強　粘性中
ＳＫＰ154	ＬＴ45	Ⅱ	0.24	0.23	0.10	43.31	円形	黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり中　粘性中
ＳＫＰ155	ＬＴ45	Ⅱ	0.25	0.20	0.33	43.08	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり強　粘性中
ＳＫＰ156	ＬＳ47	Ⅱ	0.36(現存値)	0.34(現存値)	0.32	43.17	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり強　粘性中
ＳＫＰ157	ＬＳ47	Ⅱ	0.60	0.47	0.53	42.96	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり強　粘性弱

第６表　柱穴様ピット計測一覧（Ａ区その３）

遺構番号	所在区	確認面	長軸(単位:m)	短軸(単位:m)	深さ（単位：m）	標高値(単位:m)	平　面　形	覆　　土
ＳＫＰ158	ＬＳ47	Ⅱ	0.36	0.23	0.50	42.92	楕円形	1．暗褐色土（10ＹＲ３/３）しまり強　粘性中 2．黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり中　粘性中 3．黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり中　粘性中
ＳＫＰ159	ＬＳ46・47	Ⅱ	0.27	0.24	0.22	−1.75	隅丸方形	黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ160	ＬＳ46	Ⅱ	0.15	0.15	0.07	43.43	円形	黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり強　粘性中
ＳＫＰ161	ＬＳ46	Ⅱ	0.18	0.14	0.05	43.44	隅丸方形	黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ162	ＬＳ46	Ⅱ	0.28	0.27	0.17	43.32	円形	黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり強　粘性中
ＳＫＰ163	ＬＳ46	Ⅱ	0.23	0.20	0.30	43.18	円形	黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ164	ＬＳ46	Ⅱ	0.36	0.31	0.19	43.26	円形	黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり強　粘性中
ＳＫＰ165	ＬＳ46	Ⅱ	0.25	0.20(現存値)	0.26	43.17	円形	黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり中　粘性中
ＳＫＰ166	ＬＳ46	Ⅱ	0.33	0.26	0.25	43.16	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり中　粘性中
ＳＫＰ167	ＬＳ47	Ⅱ	0.26	0.25	0.25	43.11	円形	灰黄褐色土（10ＹＲ４/２）しまり強　粘性中
ＳＫＰ168	ＬＳ46・47	Ⅱ	0.38	0.31	0.16	43.33	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり強　粘性中
ＳＫＰ169	ＬＳ46	Ⅱ	0.22	0.19	0.16	43.31	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ170	ＬＳ46	Ⅱ	0.26	0.21	0.27	43.21	隅丸方形	黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ171	ＬＳ46	Ⅱ	0.53	0.48	0.59	42.88	円形	1．にぶい黄褐色土（10ＹＲ４/３）しまり中　粘性中 2．にぶい黄褐色土（10ＹＲ４/３）しまり中　粘性中
ＳＫＰ172	ＬＳ46	Ⅱ	0.24	0.20	0.14	43.27	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり中　粘性中
ＳＫＰ173	ＬＳ46	Ⅱ	0.24	0.24	0.15	43.28	隅丸方形	黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり強　粘性中
ＳＫＰ174	ＬＳ46	Ⅱ	0.24	0.20	0.14	43.31	隅丸方形	黒褐色土（10ＹＲ２/２）しまり強　粘性中
ＳＫＰ175	ＬＳ46	Ⅱ	0.35	0.20	0.15	43.27	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり強　粘性中
ＳＫＰ176	ＬＳ46	Ⅱ	0.49	0.23	0.13	43.29	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり中　粘性中
ＳＫＰ177	ＬＳ46	Ⅱ	0.32	0.22	0.17	43.25	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり中　粘性中
ＳＫＰ178	ＬＳ45・46	Ⅱ	0.37	0.25	0.16	43.25	隅丸方形	黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり強　粘性中
ＳＫＰ179	ＬＳ46	Ⅱ	0.28	0.26	0.26	43.24	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ180	ＬＳ46	Ⅱ	0.26(現存値)	0.22(現存値)	0.16	43.32	円形	黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり中　粘性弱
ＳＫＰ181	ＬＳ46	Ⅱ	0.50	0.38	0.23	43.22	隅丸方形	黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり強　粘性中
ＳＫＰ182	ＬＳ46	Ⅱ	0.49	0.28	0.28	43.09	隅丸方形	黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり中　粘性中



ＳＫ06土坑（Ａ－Ａ'）
1．黒色（10ＹＲ２/１）しまり中・粘性中・炭化物微量混入。
2．黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり中・粘性中、炭化物微量混入・地山ブロック多量混入。

ＳＫ07土坑（Ａ－Ａ'）
1．黒褐色土（10ＹＲ２/２）しまり中・粘性強、炭化物多量混入・地山ブロック少量混入。
2．黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり弱・粘性中、炭化物・地山ブロック微量混入。

ＳＫ58土坑（Ａ－Ａ'）
1．黒色土（10ＹＲ２/１）しまり中・粘性強、炭化物微量混入・地山ブロック少量混入。
2．黒色土（2.5ＹＲ２/１）しまり中・粘性強、地山塊多量混入。

番号	種別	器形	遺構・層位	計測値 口径(cm)	計測値 底径(cm)	計測値 器高(cm)	特徴
1	土師器	坏	ＳＫ05Ｒ Ｐ18	(10.9)	—	—	外：ケズリ→ミガキ　内：ミガキ
2	須恵器	坏	ＳＫ05Ｒ Ｐ20	(14.2)	(9.5)	3.7	ロクロ　ヘラ切り　内：炭化物付着
3	土師器	甕	ＳＫ05Ｒ Ｐ01・27			—	外：ナデ　内：ハケ目
4	土師器	甕	ＳＫ05Ｒ Ｐ17	—	(6.8)	—	外：ケズリ　内：ハケ目　漆付着物有り
5	土師器	甕	ＳＫ05Ｒ Ｐ03	—	—	—	外：ハケ→ミガキ・ハケ→ナデ　内：ハケ目
6	土師器	甕	ＳＫ05Ｒ Ｐ08	—	—	—	内：ナデ
7	土師器	鉢	ＳＫ05Ｒ Ｐ41	—	—	—	外：ケズリ→ナデ　一部ミガキ 内：黒色処理→ミガキ
8	土師器	甕	ＳＫ05Ｒ Ｐ20	—	—	—	内外：ナデ　粘土紐痕有り
9	土師器	甕	ＳＫ05Ｒ Ｐ24・29・91	—	(6.4)	—	外：ハケ目　内：ナデ　底部ハケ目
10	土師器	甕	ＳＫ05Ｒ Ｐ48	—	—	—	外：ハケ目→ナデ 内：ハケ目　炭化物付着　粘土紐痕
11	土師器	甕	ＳＫ05Ｒ Ｐ34	—	—	—	外：ハケ目　内：ナデ
12	土師器	甕	ＳＫ05Ｒ Ｐ118	—	(3.5)	—	内：ハケ目・ナデ
13	土師器	甕	ＳＫ05Ｒ Ｐ72・107	—	—	—	内外：ハケ目
14	土師器	甕	ＳＫ05Ｒ Ｐ06	—	(6.0)	—	内外：ハケ目　底部ハケ目

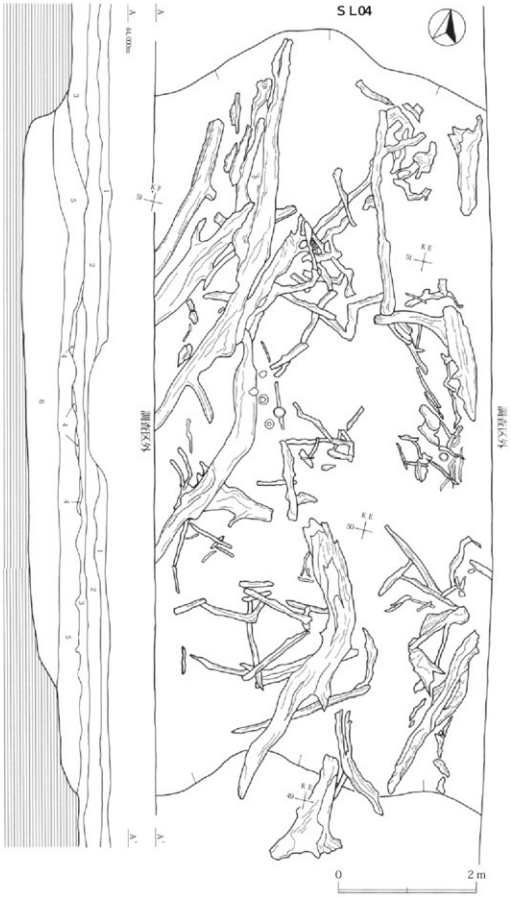
第34図　ＳＫ06・07・58土坑

第７表　柱穴様ピット計測一覧（Ａ区その４）

遺構番号	所在区	確認面	長軸(単位:m)	短軸(単位:m)	深さ（単位：m）	標高値(単位:m)	平　面　形	覆　　土
ＳＫＰ183	ＬＳ46	Ⅱ	0.25	0.22	0.14	43.31	円形	黒褐色土（10ＹＲ3/2）しまり強　粘性中
ＳＫＰ184	ＬＳ46	Ⅱ	0.29	0.22	0.14	43.31	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ3/2）しまり強　粘性中
ＳＫＰ185	ＬＴ45	Ⅱ	0.25	0.19	0.16	43.21	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ3/2）しまり中　粘性中
ＳＫＰ187	ＬＴ47	Ⅱ	0.41	0.36	0.15	43.36	円形	灰黄褐色土（10ＹＲ4/2）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ188	ＬＴ47	Ⅱ	0.20	0.14	0.10	43.38	隅丸方形	黒褐色土（10ＹＲ3/2）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ196	ＬＳ47	Ⅱ	0.22	0.19	0.12	43.33	隅丸方形	黒褐色土（10ＹＲ3/2）しまり強　粘性中
ＳＫＰ197	ＬＳ47	Ⅱ	0.22	0.20	0.32	43.13	隅丸方形	黒褐色土（10ＹＲ3/2）しまり中　粘性中
ＳＫＰ198	ＬＳ47	Ⅱ	0.25	0.21	0.16	43.25	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ2/2）しまり弱　粘性中
ＳＫＰ200	ＬＳ47	Ⅱ	0.31	0.24	0.21	43.24	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ2/2）しまり強　粘性中
ＳＫＰ202	ＬＳ47	Ⅱ	0.46	0.42	0.45	43.07	隅丸方形	1．黒褐色土（10ＹＲ3/2）しまり中　粘性弱 2．暗褐色土（10ＹＲ3/3）しまり中　粘性中
ＳＫＰ203	ＬＳ47	Ⅱ	0.52	0.44	0.45	0.445	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ3/2）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ204	ＭＡ47	Ⅱ	0.31	0.24	0.17	43.40	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ3/2）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ205	ＭＡ47	Ⅱ	0.38(現存値)	0.33	0.37	43.21	楕円形	灰黄褐色土（10ＹＲ4/2）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ207	ＬＳ・ＬＴ46	Ⅱ	0.48	0.32	0.13	43.31	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ3/2）しまり強　粘性中
ＳＫＰ208	ＬＳ52・53	Ⅱ	0.43	0.25	0.17	43.18	楕円形	黒色土（10ＹＲ2/1）しまり中　粘性中
ＳＫＰ209	ＬＳ53	Ⅱ	0.40	0.24	0.23	43.12	楕円形	黒色土（10ＹＲ2/1）しまり中　粘性中
ＳＫＰ210	ＬＳ53	Ⅱ	0.35	0.31	0.14	43.21	隅丸方形	黒色土（10ＹＲ2/1）しまり中　粘性中
ＳＫＰ211	ＬＳ53	Ⅱ	0.41	0.26	0.23	43.11	楕円形	黒色土（10ＹＲ2/1）しまり強　粘性中
ＳＫＰ212	ＬＳ53	Ⅱ	0.62	0.40	0.30	43.05	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ3/2）しまり弱　粘性中
ＳＫＰ214	ＬＳ53	Ⅱ	0.22	0.21	0.13	43.22	円形	黒褐色土（10ＹＲ2/2）しまり中　粘性中
ＳＫＰ216	ＬＳ53	Ⅱ	0.25	0.20	0.16	43.18	隅丸方形	黒褐色土（10ＹＲ2/2）しまり中　粘性中
ＳＫＰ217	ＬＳ53	Ⅱ	0.50	0.35	0.31	43.00	楕円形	黒色土（10ＹＲ2/1）しまり中　粘性中
ＳＫＰ218	ＬＲ53	Ⅱ	0.31	0.20	0.15	43.18	楕円形	黒色土（10ＹＲ2/1）しまり中　粘性中
ＳＫＰ219 (ＳＢ29－P5)	ＬＲ53	Ⅱ	0.41	0.31	0.15(ＳＰＣ－Ｃ') 0.12(ＳＰＤ－Ｄ')	43.20	楕円形	黒色土（10ＹＲ2/1）しまり中　粘性中
ＳＫＰ221	ＬＳ53	Ⅱ	0.23	0.17	0.14	43.19	楕円形	黒色土（10ＹＲ2/1）しまり中　粘性中

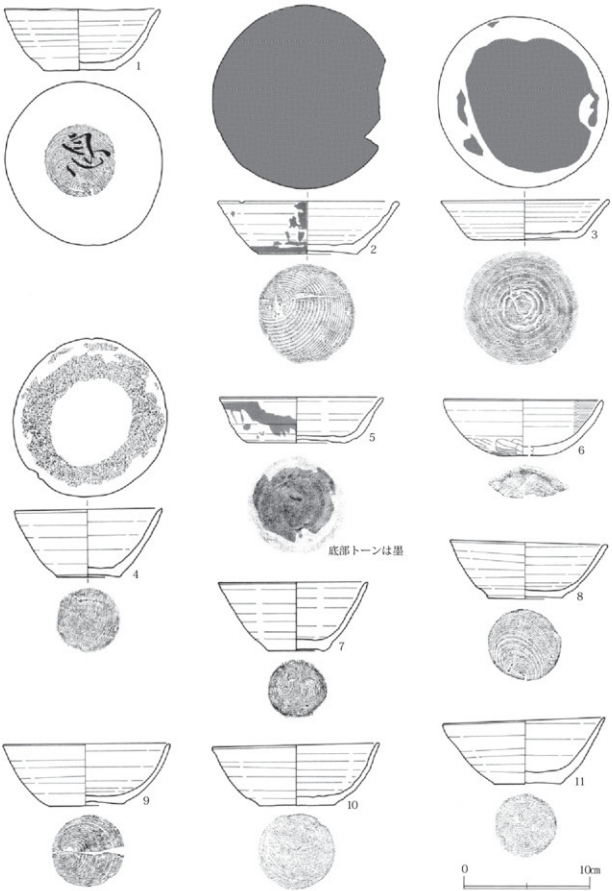
第８表　柱穴様ピット計測一覧（Ａ区その５）

遺構番号	所在区	確認面	長軸(単位:m)	短軸(単位:m)	深さ（単位：m）	標高値(単位:m)	平　面　形	覆　　土
ＳＫＰ224	ＬＳ53	Ⅱ	0.36	0.34	0.15	43.17	円形	黒褐色土（10ＹＲ2/2）しまり中　粘性中
ＳＫＰ225	ＬＳ53	Ⅱ	0.35	0.29	0.03	43.19	隅丸方形	黒褐色土（10ＹＲ3/2）しまり中　粘性中
ＳＫＰ226 (ＳＢ29－P3)	ＬＳ53・54	Ⅱ	0.48	0.37	0.24(ＳＰＥ－Ｅ') 0.20(ＳＰＢ－Ｂ')	43.07	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ2/2）しまり中　粘性中
ＳＫＰ227	ＬＲ54	Ⅱ	0.45	0.3	0.07	42.98	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ2/2）しまり強　粘性中
ＳＫＰ231	ＬＳ54	Ⅱ	0.50	0.39	0.17	43.16	楕円形	黒色土（10ＹＲ2/1）しまり強　粘性中
ＳＫＰ232	ＬＳ54	Ⅱ	0.17	0.16	0.14	43.19	円形	黒色土（10ＹＲ2/2）しまり中　粘性中
ＳＫＰ233	ＬＳ54	Ⅱ	0.18	0.14	0.10	43.24	隅丸方形	黒色土（10ＹＲ2/1）しまり中　粘性中
ＳＫＰ234 (ＳＢ29－P1)	ＬＳ54	Ⅱ	0.33	0.27	0.16(ＳＰＢ－Ｂ') 0.15(ＳＰＡ－Ａ')	43.15	楕円形	黒色土（10ＹＲ2/1）しまり中　粘性中
ＳＫＰ235	ＬＳ54	Ⅱ	0.54	0.50	0.21	43.11	楕円形	黒色土（10ＹＲ2/1）しまり中　粘性強
ＳＫＰ237	ＬＲ52	Ⅱ	0.28	0.21	0.11	43.22	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ2/2）しまり強　粘性中
ＳＫＰ238	ＬＲ52	Ⅱ	0.30	0.20	0.30	43.03	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ2/1）しまり強　粘性中
ＳＫＰ239	ＬＲ52	Ⅱ	0.54	0.43	0.17	43.16	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ2/2）しまり強　粘性中
ＳＫＰ240	ＬＲ52	Ⅱ	0.39	0.30	0.30	43.07	円形	黒色土（10ＹＲ2/1）しまり強　粘性中
ＳＫＰ242	ＬＲ52	Ⅱ	0.30	0.30	0.16	43.19	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ2/2）しまり中　粘性中
ＳＫＰ243	ＬＳ53	Ⅱ	0.38	0.33	0.23	43.10	楕円形	黒色土（10ＹＲ2/1）しまり強　粘性中
ＳＫＰ247	ＬＲ52・53	Ⅱ	0.38	0.27	0.16	43.22	楕円形	黒色土（10ＹＲ2/1）しまり中　粘性中
ＳＫＰ248	ＬＲ53	Ⅱ	0.41	0.36	0.19	43.16	隅丸方形	黒褐色土（10ＹＲ2/2）しまり強　粘性中
ＳＫＰ249	ＬＯ46	Ⅱ	0.34	0.32	0.25	43.23	隅丸方形	黒褐色土（10ＹＲ2/2）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ250	ＬＳ54	Ⅱ	0.25	0.22	0.33	43.00	円形	黒色土（10ＹＲ2/1）しまり強　粘性中
ＳＫＰ251	ＬＳ55	Ⅱ	0.34	0.25	0.18	43.11	楕円形	黒色土（10ＹＲ2/1）しまり中　粘性中
ＳＫＰ252 (ＳＢ29－P4)	ＬＳ54	Ⅱ	0.31	0.29	0.17(ＳＰＡ－Ａ') 0.14(ＳＰＤ－Ｄ')	43.16	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ2/2）しまり強　粘性中
ＳＫＰ253	ＬＳ54	Ⅱ	0.33	0.31	0.12	43.18	円形	黒色土（10ＹＲ2/1）しまり強　粘性中
ＳＫＰ254	ＬＳ54	Ⅱ	0.32	0.31	0.26	43.04	隅丸方形	黒褐色土（10ＹＲ2/2）しまり強　粘性中
ＳＫＰ255	ＬＳ54	Ⅱ	0.37	0.27	0.13	43.17	隅丸方形	黒褐色土（10ＹＲ2/2）しまり強　粘性中
ＳＫＰ256	ＭＤ48	Ⅱ	0.30	0.22	0.14	43.44	隅丸方形	褐灰色土（10ＹＲ4/1）しまり強　粘性弱

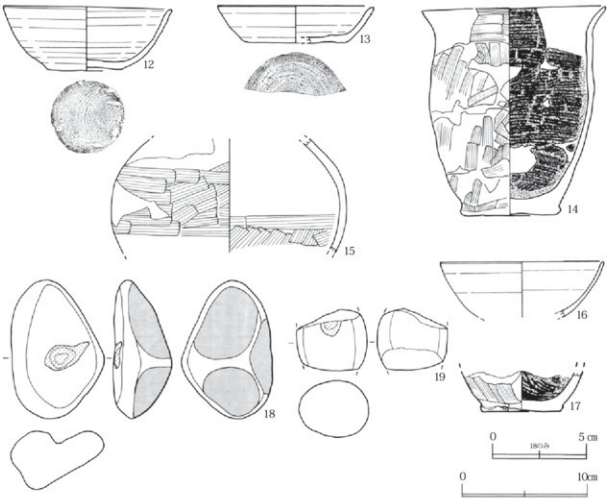


SL04河川跡（A－A'）
1. 黒褐色上（10YR 3/2）しまり中・粘性中、表上・植物根多量混入。
2. 黒褐色上（10YR 3/1）しまり中・粘性中、耕作上・植物根少量混入。
3. 黒色上（10YR 2/1）しまり中・粘性強。
4. 暗褐色上（10YR 3/3）しまり中・粘性強、表山消移層、砂質分を少し含む。
5. 灰黄褐色上（10YR 5/2）しまり中・粘性中、地山粘上、砂質分を含む。
6. 極暗褐色上（7.5YR 8/3）しまり中・粘性強、埋木の枝葉多量混入。

第35図　ＳＬ04河川跡（１）



第36図　ＳＬ04出土遺物（２）



番　号	種　別	器　形	遺　構　・　層　位	計　測　値			特　　徴
				口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	
1	土師器	坏	ＳＬＯＲＥＰ11	12.1	5.7	4.9	墨書　ロクロ　回転糸切り
2	土師器	坏	ＳＬＯＲＥＰ28・29・31	13.9	8.0	3.9	うるし容器　ロクロ　回転糸切り　炭化物付着(科析―11)
3	須恵器	坏	ＳＬＯＲＥＰ47	13.3	8.0	3.2	うるし容器　ロクロ　回転糸切り　炭化物付着
4	土師器	坏	ＳＬＯＲＥＰ02	11.6	5.0	5.1	内外：すす状炭化物付着　ロクロ　回転糸切り
5	須恵器	坏	ＳＬＯＲＥＰ04・22・83	12.8	7.8	3.6	底部墨付着　ロクロ　内外：柿しぶ状付着物 内：黒色処理→ミガキ
6	土師器	坏	ＳＬＯＲＥＰ05	(12.4)	—	4.6	ロクロ　外：ハケ目・ミガキ　底部ヘラ目
7	土師器	坏	ＳＬＯＲＥＰ00・23	11.7	4.6	5.4	ロクロ　回転糸切り　内：付着物有り
8	土師器	坏	ＳＬＯＲＥＰ07・08	12.4	5.8	4.6	ロクロ　回転糸切り
9	土師器	坏	ＳＬＯＲＥＰ03	13.0	5.8	4.9	ロクロ　回転糸切り
10	土師器	坏	ＳＬＯＲＥＰ01	13.1	6.0	5.0	ロクロ　回転糸切り
11	土師器	坏	ＳＬＯＲＥＰ21	12.6	5.2	5.0	ロクロ　静止糸切り
12	土師器	坏	ＳＬＯＲＥＰ10	13.3	5.8	5.1	ロクロ　回転糸切り
13	須恵器	坏	ＳＬＯ４	12.2	(8.0)	(2.9)	ロクロ　ヘラ切り
14	土師器	甕	ＳＬＯＲＥＰ21	14.4	7.3	16.3	外：ハケ目　内：ハケ目　炭化物付着(科析―12)
15	土師器	丸底	ＳＬＯＲＥＰ02・00・22・26・27・28・32・36・72・73・76・81	—	—	—	内外：ハケ目→ナデ
16	土師器	坏	ＳＬＯＲＥＰ26・ＲＥＰ02・07・08	12.8	—	—	ロクロ
17	土師器	甕	ＳＬＯＲＥＰ32	—	(6.1)	—	外：ケズリ→ナデ　内：ハケ目　炭化物付着
				最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	
18	石製品	凹石	ＳＬＯＲＱ00	14.7	10.0	6.2	擦り面有り
19	石製品	凹石	ＳＬＯ４	(6.5)	7.4	6.0	

番　号	器　種	遺　構　・　層　位	計　測　値			特　　徴
			最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	
20	底板	ＳＬＯＲＷ07	18.3	—	1.1	一部こげ有り
21	加工板	ＳＬＯＲＷ１・４層	21.2	8.9	0.9	加工痕有り（科析―19）
22	板状木製品	ＳＬＯ４	24.4	3.1	0.7	加工痕有り
23	建築材	ＳＬＯＲＷ00	37.0	2.6	2.1	ほぞ穴有り（科析―25）
24	底板	ＳＬＯＲＷ44	15.3	5.6	0.9	
25	底板	ＳＬＯＲＷ02・３層	18.2	8.2	0.9	底板（科析―20）
26	底板	ＳＬＯＲＷ01・４層	16.9	9.4	0.9	丸太板に転用（科析―22）
27	曲物（一部）	ＳＬＯＲＷ02・４層	—	—	0.4	加工痕有り（科析―21）
28	棒状木製品	ＳＬＯ４	34.7	1.3	1.2	
29	棒状木製品	ＳＬＯ４	17.8	1.0	1.2	
30	串状木製品	ＳＬＯ４	14.7	1.0	1.2	
31	箸状木製品	ＳＬＯ４	—	0.7	0.6	
32	箸状木製品	ＳＬＯ４	—	0.6	0.3	
33	曲物（一部）	ＳＬＯＲＷ77	—	—	0.4	（科析―23）

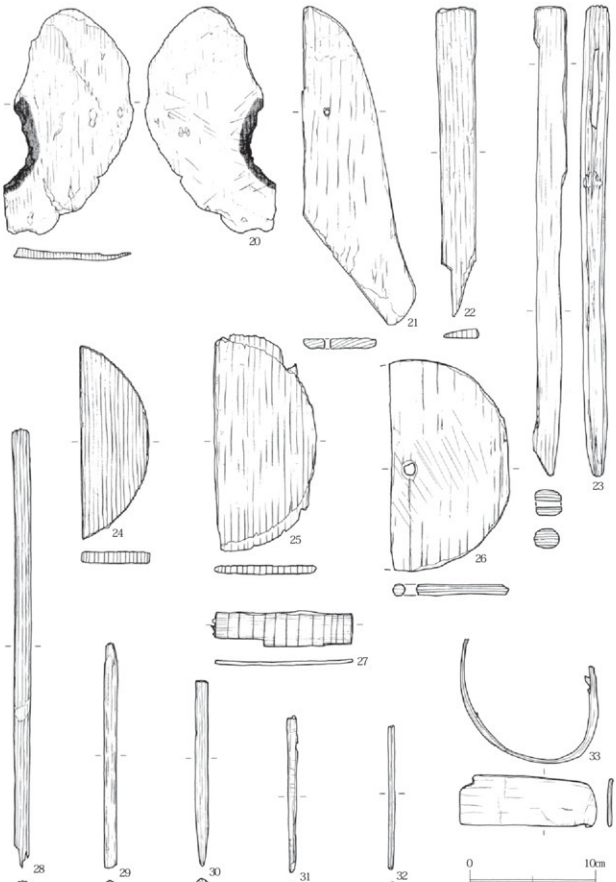
第37図　ＳＬ04出土遺物（３）

第９表　柱穴様ピット計測一覧（Ａ区その６）

遺構番号	所在区	確認面	長軸(単位:m)	短軸(単位:m)	深さ（単位：m）	底面高(単位:m)	平　面　形	覆　　土
ＳＫＰ257	ＭＤ49	Ⅱ	0.28	0.25	0.13	43.42	楕円形	黒灰色土（10ＹＲ４/１）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ258	ＭＤ49	Ⅱ	0.27	0.26	0.21	43.31	円形	黒灰色土（10ＹＲ４/１）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ259	ＭＦ･ＭＧ49･50	Ⅱ	0.58	0.50	0.41	43.16	隅丸方形	黒褐色土（10ＹＲ３/１）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ260	ＭＤ49	Ⅱ	0.29	0.28	0.13	43.39	円形	黒灰色土（10ＹＲ４/１）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ261	ＭＤ49	Ⅱ	0.32	0.18	0.12	43.47	楕円形	黒灰色土（10ＹＲ４/１）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ262	ＭＧ49	Ⅱ	0.34	0.20(現存値)	0.19	43.38	円形	黒色土（10ＹＲ２/１）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ263	ＭＦ52	Ⅱ	0.37	0.34	0.18	43.36	隅丸方形	黒色土（10ＹＲ２/１）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ265	ＬＰ52・53	Ⅱ	0.38	0.35	0.07	43.51	隅丸方形	黒褐色土（10ＹＲ３/１）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ266	ＬＰ53	Ⅱ	0.29	0.22	0.10	43.48	楕円形	黒灰色土（10ＹＲ４/１）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ267	ＬＰ53	Ⅱ	0.34	0.32	0.20	43.36	円形	黒褐色土（10ＹＲ３/１）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ268	ＭＣ52	Ⅱ	0.27	0.25	0.10	43.49	円形	黒褐色土（10ＹＲ３/１）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ269	ＭＢ52	Ⅱ	0.28	0.20	0.25	43.34	円形	黒褐色土（10ＹＲ３/１）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ271	ＭＤ52	Ⅱ	0.22	0.18	0.14	43.44	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ３/１）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ272	ＭＥ51	Ⅱ	0.18	0.17	0.08	43.50	円形	黒褐色土（10ＹＲ３/１）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ273	ＭＥ52	Ⅱ	0.27	0.20	0.16	43.43	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ３/１）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ276	ＭＣ51	Ⅱ	0.53	0.43	0.12	43.48	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ３/１）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ277	ＬＳ52	Ⅱ	0.26	0.22	0.13	43.17	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ３/１）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ278	ＭＡ53	Ⅱ	0.39	0.30	0.12	43.27	楕円形	黒色土（10ＹＲ２/１）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ279	ＬＴ53・54	Ⅱ	0.36	0.27	0.13	43.22	円形	黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ280	ＬＴ53・54	Ⅱ	0.40	0.32	0.15	43.21	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ３/１）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ281	ＬＴ53	Ⅱ	0.45	0.33	0.19	43.17	楕円形	黒色土（10ＹＲ２/１）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ283	ＬＳ55	Ⅱ	0.30	0.29	0.25	43.05	円形	黒色土（10ＹＲ２/１）しまり中　粘性中
ＳＫＰ286	ＭＡ54	Ⅱ	0.23	0.22	0.21	43.21	円形	黒褐色土（10ＹＲ３/１）しまり中　粘性中
ＳＫＰ287	ＬＯ53・52	Ⅱ	0.32	0.30	0.22	43.29	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ288	ＬＯ54	Ⅱ	0.50	0.47	0.10	43.43	円形	黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり強　粘性弱

第10表　柱穴様ピット計測一覧（Ａ区その７）

遺構番号	所在区	確認面	長軸(単位:m)	短軸(単位:m)	深さ（単位：m）	底面高(単位:m)	平　面　形	覆　　土
ＳＫＰ289	ＭＡ54	Ⅱ	0.31	0.25	0.12	43.29	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ３/１）しまり中　粘性中
ＳＫＰ290	ＬＳ･ＬＴ53	Ⅱ	0.49	0.39	0.22	43.13	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ３/１）しまり中　粘性中
ＳＫＰ291	ＬＴ54	Ⅱ	0.37	0.31	0.20	43.15	楕円形	黒色土（10ＹＲ２/１）しまり中　粘性中
ＳＫＰ292	ＬＴ54	Ⅱ	0.21	0.21	0.14	43.22	円形	黒色土（10ＹＲ２/１）しまり中　粘性中
ＳＫＰ293	ＬＲ･ＬＳ54	Ⅱ	0.41	0.38	0.17	43.13	楕円形	黒色土（10ＹＲ２/１）しまり中　粘性中
ＳＫＰ296	ＬＴ52	Ⅱ	0.56	0.31	0.31	43.04	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ３/１）しまり中　粘性中
ＳＫＰ298	ＬＯ49	Ⅱ	0.27	0.21	0.10	43.44	楕円形	黒色土（10ＹＲ２/１）しまり強　粘性中
ＳＫＰ299	ＬＯ51	Ⅱ	0.35	0.33	0.12	43.43	円形	黒褐色土（10ＹＲ２/２）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ300	ＬＯ51	Ⅱ	0.30	0.29	0.14	43.36	円形	黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ301	ＬＰ52	Ⅱ	0.41	0.37	0.20	43.33	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ２/２）しまり強　粘性中
ＳＫＰ302	ＬＯ52・53	Ⅱ	0.80	0.71	0.34	43.21	隅丸方形	黒褐色土（10ＹＲ２/２）しまり強　粘性中
ＳＫＰ303	ＬＰ52・53	Ⅱ	0.48	0.30	0.13	43.43	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ２/２）しまり強　粘性無
ＳＫＰ304	ＬＰ53	Ⅱ	0.36	0.34	0.14	43.42	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ２/２）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ305	ＬＯ･ＬＰ53	Ⅱ	0.25	0.19	0.13	43.44	隅丸方形	黒褐色土（10ＹＲ２/２）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ306	ＬＯ53	Ⅱ	0.39	0.32	0.25	43.31	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ２/２）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ307	ＬＰ53	Ⅱ	0.28	0.27	0.1	43.45	隅丸方形	黒褐色土（10ＹＲ２/２）しまり強　粘性中
ＳＫＰ309	ＬＯ53	Ⅱ	0.38	0.34	0.23	43.30	隅丸方形	黒褐色土（10ＹＲ２/２）しまり強　粘性中
ＳＫＰ310	ＬＰ･ＬＱ53	Ⅱ	0.38	0.35	0.15	43.39	隅丸方形	黒褐色土（10ＹＲ２/１）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ311	ＬＰ53	Ⅱ	0.38	0.31	0.13	43.43	隅丸方形	黒褐色土（10ＹＲ２/２）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ312	ＬＰ53	Ⅱ	0.45	0.33	0.17	43.38	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ２/２）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ313	ＬＰ53・54	Ⅱ	0.71	0.49	0.21	43.33	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ２/２）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ314	ＬＰ54	Ⅱ	0.42	0.42	0.13	43.43	隅丸方形	黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ315	ＬＰ54	Ⅱ	0.38	0.38	0.15	43.41	隅丸方形	黒褐色土（10ＹＲ２/２）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ316	ＬＯ53	Ⅱ	0.33	0.31	0.23	43.31	円形	黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり中　粘性弱
ＳＫＰ318	ＬＯ53	Ⅱ	0.41	0.39	0.14	43.42	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり強　粘性無
ＳＫＰ319	ＬＯ53	Ⅱ	0.56	0.36	0.11	43.45	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり強　粘性無
ＳＫＰ320	ＬＯ53	Ⅱ	0.42	0.32	0.19	43.34	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ２/２）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ322	ＬＯ･ＬＰ55	Ⅱ	0.43	0.38	0.41	43.11	円形	黒褐色土（10ＹＲ２/２）しまり強　粘性中
ＳＫＰ327	ＭＡ49	Ⅱ	0.34	0.28	0.17	43.41	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり中　粘性中
ＳＫＰ328	ＬＲ48	Ⅱ	0.32	0.26	0.23	43.18	隅丸方形	黒褐色土（10ＹＲ３/１）しまり中　粘性中
ＳＫＰ330	ＬＰ55	Ⅱ	0.31	0.31	0.08	43.40	円形	黒褐色土（10ＹＲ２/２）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ331	ＬＰ54	Ⅱ	0.44	0.41	0.07	43.45	隅丸方形	黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ332	ＬＮ50	Ⅱ	0.27	0.25	0.16	43.41	円形	黒褐色土（10ＹＲ２/２）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ333	ＬＮ49	Ⅱ	0.29	0.25	0.06	43.49	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり強　粘性無



第38図　ＳＬ04出土遺物（４）

２　Ｄ区の検出遺構と遺物

⑴　奈良・平安時代

①　竪穴住居跡

ＳＩ02竪穴住居跡

《位置と確認》Ｄ区ＫＦ56・57、ＫＧ56・57グリッドのⅡ層で確認した。住居西側の一部は調査区外にある。確認面は耕作による攪乱が著しかった。

《規模と平面形》規模は長軸4.10ｍ×短軸4.01ｍ、深さ0.43ｍで、平面形は、確認された部分で正方形を呈する。ＳＫ01土坑と重複する部分が僅かに張り出している。主軸方位はＮ－17°－Ｗである。

《重　　複》ＳＫ01・08・11土坑に切られており、ＳＫ12土坑を切っている。

《土　　層》４層に分層した。１～２層は耕作のため攪乱を受けているが、３～４層は黒褐色土および暗褐色土が主体で、焼土・炭化物を含む。

《　壁　》壁は緩く傾斜して立ち上がる。

《床　　面》平坦である。住居中央から南東方向に溝状の穴（幅34～92㎝、最深部32㎝）が確認された。４層は貼床面と考えられる。

《柱　　穴》10基確認した。規模は直径12～28㎝と小さい。

《カ　マ　ド》ＳＫ01土坑との接点で確認した。南側の壁に取り付くが、ＳＫ01土坑に切られているため、明瞭な燃焼部や煙道部は確認されなかった。

《出土遺物》９点を図示した（第29図１～３、５・７～９・11・13）。土師器坏３点、須恵器蓋２点、土師器甕４点である。第29図１・２の土師器坏は、内外面に漆が多く付着しており、その容器として使用されたものと考えられる。１は口縁部に意図的な欠損が見られ、この欠けた部分から外面に漆が付着している。２については自然科学的分析を行った（第５章を参照）。８・９の須恵器蓋は床面から出土した。８の内面には墨が付着しており、転用硯と考えられる。これと対応する須恵器坏（第29図４）はＳＫ01土坑から出土している。

《時　　期》平安時代（９世紀前葉）と考えられる。

ＳＩ10竪穴住居跡

《位置と確認》Ｄ区ＫＧ60・61、ＫＨ60・61グリッドのⅡ層で確認した。重複は見られなかった。住居の半分以上が西側の調査区外にあるものと想定される。

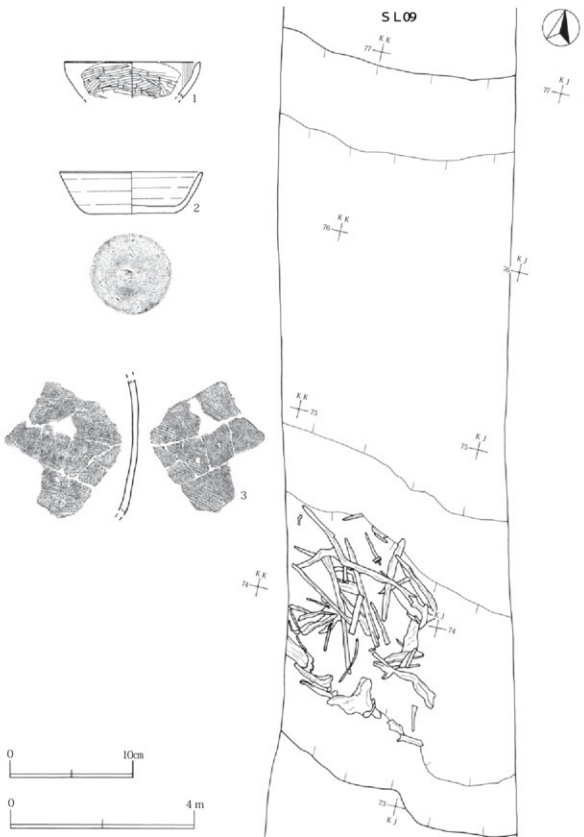
《規模と平面形》規模は長軸5.17ｍ×短軸1.41ｍ、深さ0.30ｍで、平面形は、長方形を呈する竪穴住居跡の東側部分（３分の１程度）と考えられる。主軸方位はＮ－24°－Ｗである。

《土　　層》４層に分層した。１層表土の下、２・３層は黒褐色土が主体で、４層のみ暗灰黄色土となる。３・４層は部分的に焼土・炭化物を含む。

《　壁　》壁は南・北側は緩く傾斜して立ち上がり、東側は急な角度で立ち上がる。

《床　　面》平坦である。南側のみ15㎝前後低くなり、段差が付く。

《柱　　穴》３基確認した。Ｐ１は住居の主柱穴と考えられる。３基とも内部から土器片が出土した。住居の壁際にも小柱穴を４基（南壁１基、東壁南側１基、東壁北側２基）確



番号	種別	器形	遺構・層位	計測値 口径(cm)	計測値 底径(cm)	計測値 器高(cm)	特徴
1	土師器	坏	SL09　4層	(11.0)	－	－	外：ミガキ　内：黒色処理→ミガキ
2	須恵器	坏	SL09RP02	11.5	6.8	3.4	ロクロ　ヘラ切り
3	土師器	甕	SL09	－	－	－	内外：調整痕有り

第39図　ＳＬ09河川跡・出土遺物（１）

認したが規模は小さい。

《カ　マ　ド》南東隅の遺物出土地点（Ｐ２の南側）で焼土を確認し、カマドと判断した。１・３～５層の１段掘り下げられた部分が焚口および燃焼部と考えられる。煙道部は確認されなかった。

《出 土 遺 物》11点を図示した（第31図１～４、第32図５～11）。いずれも破片だが、土師器坏１点、土師器甕６点、土師器鉢２点、土師器鍋１点、紡錘車１点である。このうち、第31図１～３は平安時代よりも古い時期に比定されるものと考えられるが、他に共伴して出土した土師器甕など平安時代の遺物もある。第32図４については自然科学的分析を行った（第５章を参照）。

《時　　期》奈良時代後半～平安時代（９世紀前葉）と考えられる。

②土坑

ＳＫ01土坑

《位置と確認》Ｄ区ＫＦ55・56グリッドのⅡ層で確認した。

《重　　複》ＳＩ02竪穴住居跡とＳＫ11土坑を切る。

《規模と平面形》規模は長軸2.65m×短軸2.34m、深さ0.21mで、平面形は略円形を呈する。主軸方位はＮ－36°－Ｗを示す。

《土　　層》３層に分層した。各層（黒褐色土主体）に焼土・炭化物が混入していた。

《壁・底面》壁は緩く傾斜して立ち上がる。底面は平坦で中心に向かって僅かにくぼむ。

《柱　　穴》内部に柱穴様ピットが７基（Ｐ11～17）、外部に４基（ＳＫＰ13・14・16・20）の計11基を確認した。本遺構または切り合い関係にあるＳＩ02竪穴住居跡とＳＫ11土坑に伴う柱穴様ピットと判断したが、詳細は不明である。

《出 土 遺 物》17点を図示した（第29図４・６・10・12、第30図14～25・29）。土師器坏２点、須恵器坏３点、土師器埦１点、土師器甕９点、石製品１点、黒曜石剥片１点である。第29図４の須恵器坏は底面に墨が付着しており、ＳＩ02竪穴住居跡出土の須恵器蓋（第29図８転用硯）に対応するものと考えられる。17・24の土師器甕の内面には炭化物が付着しており、24については自然科学的分析を行った（第５章を参照）。25の石製品は砥ぎ面から砥石と思われる。この他、出土した遺物の中にはＳＩ02竪穴住居跡出土遺物と接合したものがある（観察表を参照）。

《時　　期》平安時代（９世紀代前葉）と考えられる。

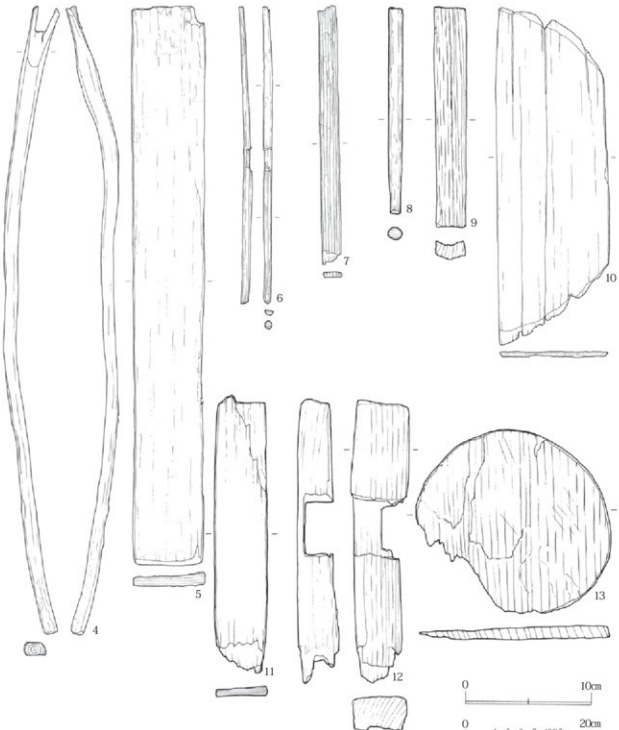
ＳＫ05土坑

《位置と確認》Ｄ区ＫＯ99グリッドのⅡ層で確認した。重複は見られなかった。

《規模と平面形》規模は長軸1.17m×短軸0.62m、深さ0.42mで、平面形は楕円形だが調査区外に伸びる溝状のプランと一体を成す。主軸方位はＮ－60°－Ｅを示す。

《土　　層》３層に分層した。各層（黒褐色土）に多量の焼土・炭化物が混入していた。

《壁・底面》壁は西側が急な角度で立ち上がり、東側は緩く傾斜して立ち上がる。南側のみ内側にえぐれる。底面は西側から東側に向かって傾斜する。



番　号	器　種	遺　構　・　層　位	計　測　値			特　徴
			最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	
4	建具材	ＳＬ09Ｒ W10	101.2	3.6	3.2	切り欠き有り
5	板状木製品	ＳＬ09Ｒ W08	90.0	15.0	2.2	
6	棒状木製品	ＳＬ09	47.7	1.5	1.4	
7	板状木製品	ＳＬ09	41.6	3.2	1.0	
8	棒状木製品	ＳＬ09Ｒ W03	16.3	1.2	1.0	（科析－26）
9	板状木製品	ＳＬ09	17.5	2.5	1.5	
10	曲物底板	ＳＬ09	54.2	18.2	1.5	底板
11	板状木製品	ＳＬ09Ｋ J 74・3層	52.6	4.2	0.8	
12	建具材	ＳＬ09Ｒ W03	22.5	4.7	3.3	切り欠き有り
13	曲物底板	ＳＬ09Ｒ W07	14.5	15.4	1.1	底板（科析－24）

第40図　ＳＬ09出土遺物（２）

《出土遺物》14点を図示した（第33図１～14）。土師器坏１点、須恵器坏１点、土師器甕11点、土師器鉢１点である。２の須恵器坏内面には炭化物が付着し、４の土師器甕底部内面には漆のような付着物がある。

《時　　期》平安時代（９世紀代）と考えられる。

ＳＫ06土坑

《位置と確認》Ｄ区ＫＯ98グリッドのⅡ層で確認した。

《重　　複》ＳＫＰ57柱穴様ピットを切る。

《規模と平面形》規模は長軸1.25m×短軸1.20m、深さ0.09mで、平面形は円形を呈する。主軸方位はＮ－40°－Ｅを示す。

《土　　層》２層に分層した。各層（黒褐色土）に微量の炭化物が混入していた。

《壁・底面》壁は緩く立ち上がる。底面は概ね平坦であるが南側に若干の凹凸がある。

《出土遺物》土師器片・須恵器片が数点出土したが、著しく微細なもののみで器形を判別できるものはなかった。

《時　　期》平安時代前半と考えられる。

ＳＫ07土坑

《位置と確認》Ｄ区ＫＮ・ＫＯ97グリッドのⅡ層で確認した。

《重　　複》ＳＫ58土坑に切られる。

《規模と平面形》規模は長軸2.05m×短軸2.03m、深さ0.18mで、平面形は円形を呈する。主軸方位はＮ－52°－Ｅを示す。

《土　　層》２層に分層した。両方とも黒褐色土であるが、炭化物（粒状）の混入については１層が多量で、２層は微量であった。

《壁・底面》壁は緩く傾斜して立ち上がる。底面は平坦である。

《出土遺物》土師器片・須恵器片が多数出土したが、著しく微細なもののみで器形を判別できるものはなかった。

《時　　期》平安時代前半と考えられる。

ＳＫ08土坑

《位置と確認》Ｄ区ＫＦ・ＫＧ56グリッドのⅡ層で確認した。

《重　　複》ＳＩ02竪穴住居跡の内部に位置し、住居の床面を切っている。

《規模と平面形》規模は長軸1.25m×短軸1.18m、深さ0.24mで、平面形は円形を呈する。主軸方位はＮ－６°－Ｅを示す。

《土　　層》４層に分層した。上位２層（黒褐色土）に炭化物が多量に混入していた。

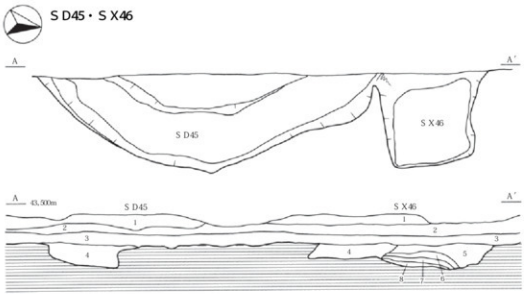
《壁・底面》壁は急な角度で立ち上がる。底面は平坦である。

《出土遺物》土師器片・須恵器片が数点出土したが、著しく微細なもののみで器形を判別できるものはなかった。

《時　　期》平安時代（９世紀代）以降と考えられる。

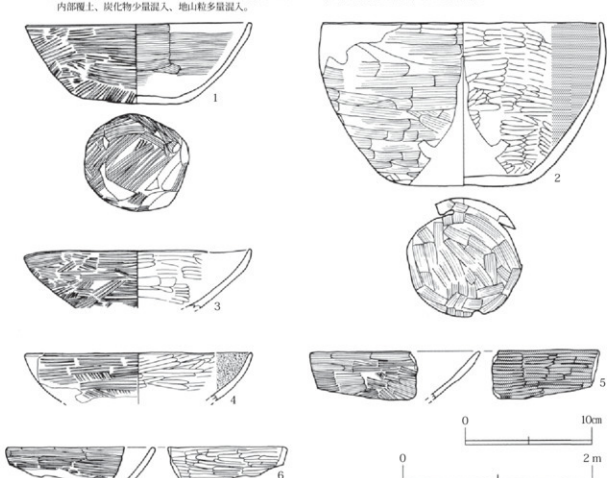
ＳＫ11土坑

《位置と確認》Ｄ区ＫＦ56グリッドのⅡ層で確認した。

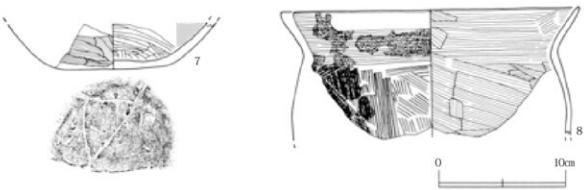


ＳＤ45溝跡およびＳＸ46性格不明遺構（Ａ－Ａ'）

1．暗褐色土（10ＹＲ３/３）しまり中・粘性中、表土・耕作土（旧水田）。
2．黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり強・粘性中。
3．黒褐色土（10ＹＲ２/２）しまり強・粘性中。
4．黒褐色土（10ＹＲ３/１）しまり弱・粘性強、溝跡内部覆土、炭化物・地山粒少量混入。
5．褐灰色土（10ＹＲ４/１）しまり弱・粘性強、ＳＸ46内部覆土、炭化物少量混入、地山粒多量混入。
6．黒色土（10ＹＲ２/１）しまり中・粘性中、ＳＸ46内部覆土、炭化物多量混入。地山ブロック少量混入。炭化物塊大粒が部分的に混入。
7．黒褐色土（10ＹＲ２/３）しまり強・粘性弱、ＳＸ46内部覆土、焼土多量混入（ほぼ焼土層）、炭化物少量混入、地山粒微量混入。
8．黒色土（10Ｙ Ｒ1.7/１）しまり強・粘性弱、ＳＸ内部覆土、炭化物多量混入（ほぼ炭化層）。



第41図　ＳＤ45溝跡・ＳＸ46性格不明遺構



番号	種別	器形	遺構・層位	計測値 口径(cm)	計測値 底径(cm)	計測値 器高(cm)	特徴
1	土師器	坏	ＳＸ46	(17.5)	8.5	6.3	外：ハケ目　内：ナデ　底部ハケ目
2	土師器	鉢	ＳＸ46	(21.9)	8.6	12.9	外：ミガキ・ナデ　内：黒色処理→ミガキ　底部ナデ
3	土師器	坏	ＳＸ46	(17.6)	—	—	外：ハケ目　内：ミガキ
4	土師器	坏	ＳＸ46	(17.6)	—	—	外：ハケ目　内：ミガキ　炭化物付着（科析－14）
5	土師器	坏	ＳＸ46	—	—	—	外：ハケ目・ナデ　内：黒色処理→ミガキ
6	土師器	坏	ＳＸ46	—	—	—	外：ハケ目・ミガキ　内：ミガキ
7	土師器	鉢	ＳＤ45	—	8.0	—	外：ナデ　内：黒色処理→ミガキ
8	土師器	甕	ＳＤ45	(23.4)	—	—	外：ハケ目・ナデ　炭化物付着　内：ナデ

第42図　ＳＤ45・ＳＸ46出土遺物

《重　　複》ＳＫ01土坑に切られ、ＳＩ02竪穴住居跡を切る。

《規模と平面形》規模は長軸1.28m×短軸0.77m、深さ0.33mで、平面形は略円形を呈する。主軸方位はＮ－70°－Ｅを示す。

《土　　層》２層に分層した。黒色土とにぶい黄褐色土で、上位の黒色土には炭化物が微量混入していた。両方に地山ブロックの混入が確認された。

《壁・底面》壁は南西側が緩く傾斜して立ち上がり、北東側が急な角度で立ち上がる。底面は凹凸があり、南西側の方が浅い。

《出土遺物》３点を図示した（第30図26～28）。完形の土師器坏１点、これ以外は破片であるが、須恵器坏１点、土師器甕１点である。

《時　　期》平安時代（９世紀前葉）と考えられる。

ＳＫ12土坑

《位置と確認》ＤⅠ区ＫＧ56グリッドのⅡ層で確認した。遺構の西側半分は調査区外にある。

《重　　複》ＳＩ02竪穴住居跡に切られる。

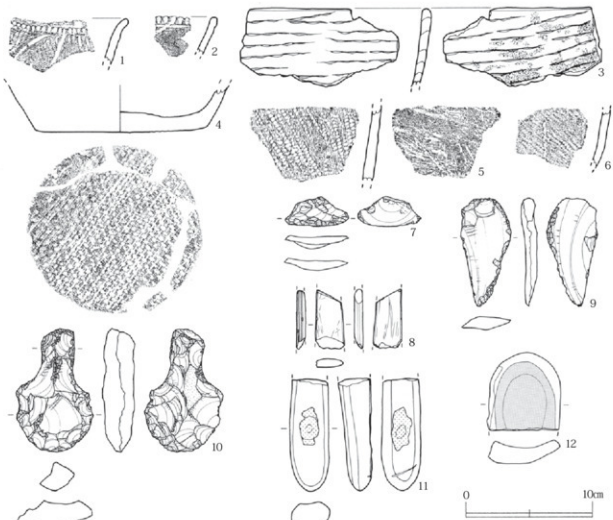
《規模と平面形》規模は長軸1.31m×短軸0.40m、深さ0.15mで、平面形は略円形を呈する。主軸方位はＮ－15°－Ｗを示す。

《土　　層》黒褐色土の単層である。ＳＩ02竪穴住居跡の４層下がこれに当たる。部分的ににぶい黄褐色土が斑状に混入し、炭化物も微量混入している。

《壁・底面》壁は南側が緩く傾斜して立ち上がり、北側はやや急な角度で立ち上がる。

《出土遺物》土師器片が数点出土したが、著しく微細なもののみで器形を判別できるものはなかった。

《時　　期》平安時代（９世紀前葉－ＳＩ02竪穴住居跡以前）と考えられる。



番号	種別	器形	グリッド・層位	計測値			特徴
				口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	
1	縄文土器	深鉢	6トレンチ－7　A区	—	—	—	
2	縄文土器	深鉢	6トレンチ－8　A区	—	—	—	
3	縄文土器	深鉢	RP124　A・D区内	—	—	—	炭化物付着
4	縄文土器	深鉢	12トレンチ－1　A区	—	13.6	—	
5	縄文土器	深鉢	8トレンチT1　A区	—	—	—	
6	縄文土器	深鉢	LS52　Ⅱ層　A区	—	—	—	胴代
				最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	
7	石器	スクレイパー	KN97Ⅱ層D区	3.2	6.7	1.3	
8	石製品	石剣	9トレンチ－4　D区	(6.3)	3.1	0.9	
9	石器	スクレイパー	LQ51　A区	11.5	5.4	1.4	
10	石器	打製石斧	MH52　上層　A区	13.1	8.2	3.4	
11	石器	凹石	9トレンチ　包含層　D区	(11.9)	4.2	(3.5)	
12	石器	石錐	KN91　Ⅱ層　D区	8.3	7.8	2.4	

第43図　遺構外出土遺物（１）

ＳＫ58土坑

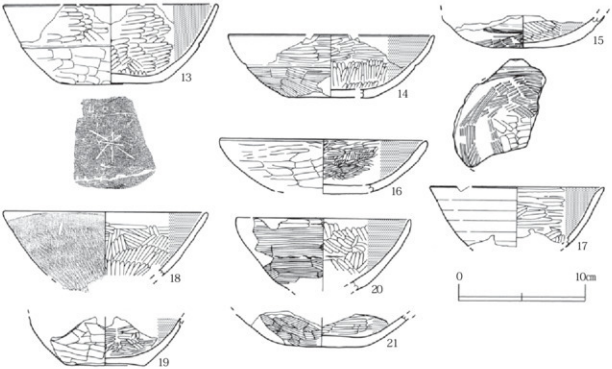
《位置と確認》Ｄ区ＫＮ97グリッドのⅡ層で確認した。

《重　　複》ＳＫ07土坑を切る。

《規模と平面形》規模は長軸0.59m×短軸0.20m、深さ0.36mで、平面形は楕円形を呈する。主軸方位はＮ－９°－Ｗを示す。

《土　　層》２層に分層した。黒色土を主体とし、地山ブロックが混入していた。

《壁・底面》壁は南側がほぼ垂直に立ち上がり、北側はやや急な角度で立ち上がる。底面は中央



番　号	種　別	器　形	グリッド・層位	計　測　値			特　徴
				口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	
13	土師器	坏	9トレンチ－2　D区	(16.8)	(8.0)	(6.3)	外：ケズリ→ミガキ　内：黒色処理→ミガキ　底部にヘラ書き
14	土師器	坏	15トレンチ　D区	16.2	－	(4.9)	外：ナデ・ミガキ　内：黒色処理→ミガキ
15	土師器	坏	15トレンチ　D区	－	(5.4)	－	外：ハケ目　内：黒色処理→ミガキ
16	土師器	坏	8トレンチ－1　A・D区外	(16.2)	－	－	外：ケズリ・ミガキ　内：黒色処理→ミガキ
17	土師器	坏	7トレンチ－9　A・D区外	(13.6)	－	－	ロクロ　内：黒色処理→ミガキ
18	土師器	坏	9トレンチ－2　D区	(16.0)	－	－	外：ミガキ　内：黒色処理→ミガキ
19	土師器	坏	ＬＳ47　Ⅱ層　A区	－	6.2	－	外：ケズリ　内：黒色処理→ミガキ
20	土師器	坏	ＫＤ48　Ⅱ層　D区	(13.7)	－	－	外：ナデ　一部ミガキ　内：黒色処理→ミガキ　雲母入り粘土細痕有り
21	土師器	坏	9トレンチ－1　D区	－	7.0	－	外：ナデ　内：黒色処理→ミガキ
22	須恵器	坏	ＬＳ46　Ⅱ層　A区	12.8	7.0	3.5	墨書「仲」　ロクロ　回転糸切り
23	土師器	坏	ＫＨ64　Ⅱ層　D区	(13.1)	(5.2)	4.2	墨書「□月」　ロクロ　回転糸切り
24	土師器	坏	1トレンチ－12　A・D区外	(13.4)	15.2	4.2	墨書「工」　ロクロ　回転糸切り
25	土師器	坏	6トレンチ　排土　A区	(12.4)	(6.0)	4.1	墨付き　ロクロ　回転糸切り
26	土師器	坏	6トレンチ－10　表土　A区	12.8	5.9	4.0	墨付き　ロクロ　回転糸切り
27	須恵器	坏	7トレンチ－12　ＲＰ02　A・D区外	12.6	5.5	4.2	墨書　ロクロ　回転糸切り
28	須恵器	坏	ＫＣ45　Ⅱ層　D区	12.4	3.6	5.6	墨書　ロクロ　回転糸切り

第44図　遺構外出土遺物（２）

から南側に段差がある。

《出　土　遺　物》遺物は出土しなかった。

《時　　期》詳細な時期は不明である。

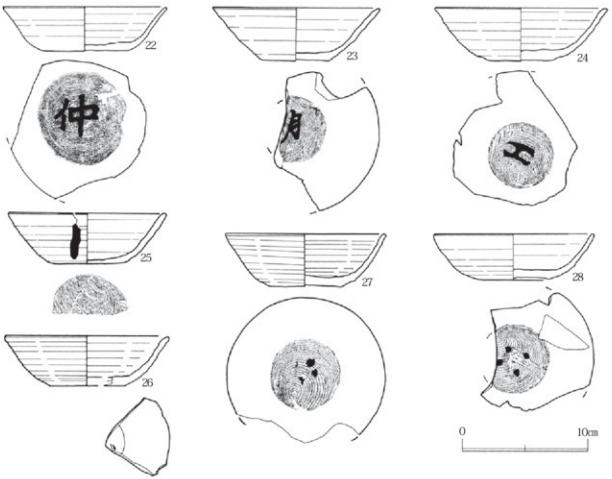
③　河川跡

ＳＬ04河川跡

《位置と確認》Ｄ区ＫＤ48～51、ＫＥ48～51、ＫＦ51グリッドのⅡ層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸10.94m×短軸4.88m、深さ1.28mである。平面形は、河川流路を調査区の横幅分（約５m）南北方向に掘り下げた状態を呈する。この南北方向で確認した川幅は平均10.6mである。

《土　　層》６層に分層した。各層とも黒褐色土と暗褐色土を主体とする。５・６層は河川跡の



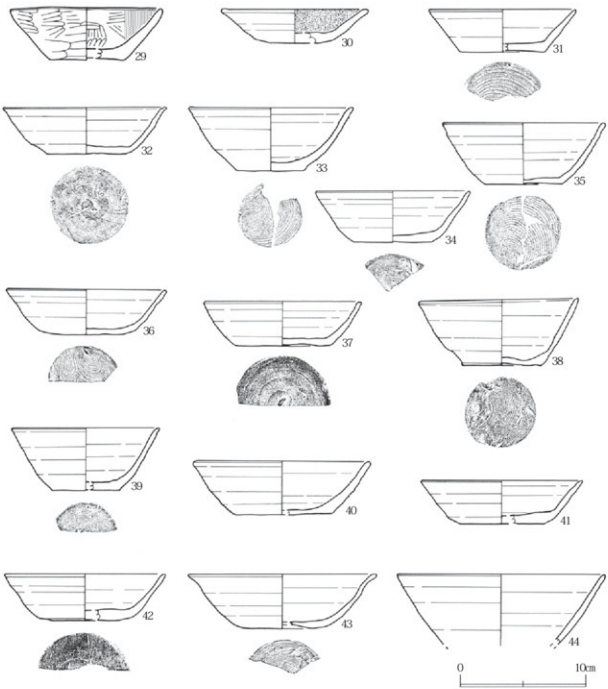
第45図　遺構外出土遺物（３）

堆積土であり、土器・木製品・種子等の遺物が出土し、自然木も含まれる層である。４層は希薄な層だが灰白色土であり、降下した火山灰が残存したものと考えられる。川底の６層は暗褐色土だが、砂質土（河砂）が混入する。

《底　　面》ほぼ平坦である。僅かに南側が浅く、北側が深い。川底の全面から土器・木製品が出土し、自然木の幹・枝・種子が堆積していた。底面から水が湧き、調査区境界線の壁際底面からも水が滲み出る。

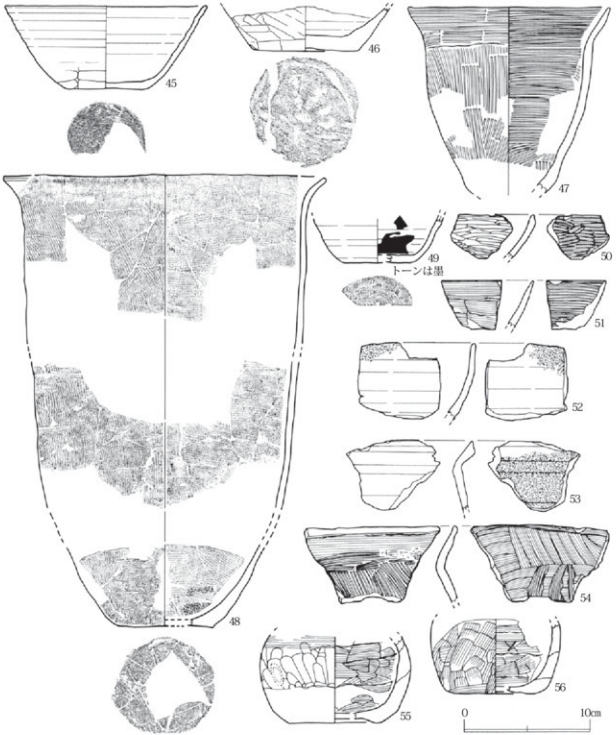
《川岸と流路》北岸はやや急な角度で立ち上がり、南岸は緩く傾斜して立ち上がる。流水方向は不明である。底面標高では西側が低く東側が高い。川底からの湧水も多い。

《出土遺物》33点を図示した（第36図１～11、第37図12～19、第38図20～33）。土師器坏11点、須恵器坏３点、土師器甕３点、石製品２点、木製品14点である。第36図１の土師器坏は墨書土器で、底部外面に「息」と書かれている。この土器は同図４と11土師器坏に挟まれ、三枚重なった状態で出土した。２と３は内外面に漆が付着しており、その容器として使用されたものと考えられる。５の須恵器坏は底面と外面に墨が付いており、転用硯の可能性がある。坏はいずれも完形品が多く、ＳＬ04河川跡の中央やや西側の５～６層から出土した。14と17の土師器甕は、内面に炭化物が多く付



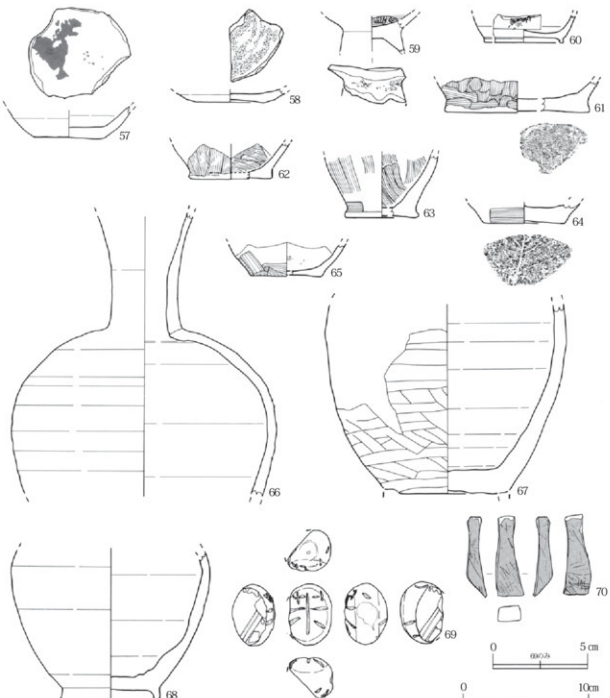
番　号	種　別	器　形	グリッド・層位	計　測　値			特　徴
				口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	
29	土師器	坏	K O99　Ⅱ層　D区	11.8	(5.7)	4.1	外：ケズリ→ナデ　一部ミガキ　内：黒色処理→ミガキ
30	土師器	坏	3トレンチ　表土　A・D区外	(11.6)	(6.0)	(2.7)	ロクロ　内：炭化物付着
31	土師器	坏	6トレンチ－1　排土　A区	11.5	(6.4)	3.4	ロクロ　回転糸切り
32	土師器	坏	L S 88　・Ⅱ層　A区	6.2	12.8	3.7	ロクロ　ヘラ切り
33	土師器	坏	7トレンチ－12　A・D区外	(12.9)	3.6	5.0	ロクロ　回転糸切り
34	須恵器	坏	K H64　Ⅱ層　D区	12.0	6.2	4.1	ロクロ　ヘラ切り
35	土師器	坏	7トレンチ－8　A・D区外	12.7	6.0	4.9	ロクロ　回転糸切り
36	須恵器	坏	3トレンチ　表土　A・D区外	(12.4)	5.6	3.6	ロクロ　回転糸切り
37	須恵器	坏	L P 88　Ⅱ層　A区	(12.2)	(7.0)	3.9	ロクロ　ヘラ切り
38	土師器	坏	7トレンチ－8 ＲＰ01 A・D区外	12.4	6.0	5.2	ロクロ　回転糸切り
39	土師器	坏	7トレンチ－9　表土A・D区外	5.0	(11.4)	5.0	ロクロ　回転糸切り
40	土師器	坏	7トレンチ－12　A・D区外	13.5	(7.0)	4.3	ロクロ　ヘラ切り
41	土師器	坏	6トレンチ－7　表土　A区	12.6	(6.0)	3.4	ロクロ　ヘラ切り
42	土師器	坏	K O98　Ⅱ層　D区	(12.6)	(6.4)	(3.7)	ロクロ　ヘラ切り
43	土師器	坏	L O84　Ⅱ層　A区	14.8	3.0	4.3	ロクロ　回転糸切り
44	土師器	鉢	9トレンチ－1　D区	16.3	－	(5.6)	ロクロ

第46図　遺構外出土遺物（４）



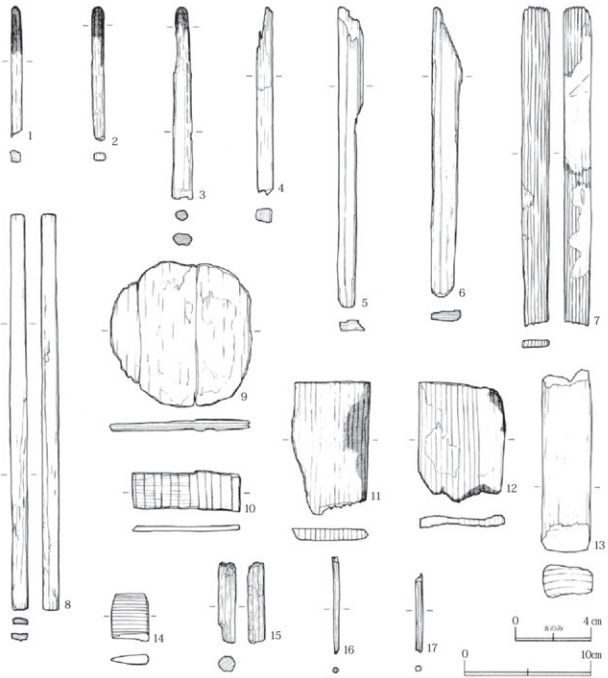
番号	種別	器形	グリッド・層位	計測値			特徴
				口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	
45	土師器	坏	KO97　Ⅱ層　RP01　D区	16.0	6.0	6.5	外:ロクロ→一部ケズリ・ナデ(転糸切り 内面底部に付着物有り
46	土師器	甕	LS48　Ⅱ層　A区	(13.0)	8.5	3.5	外：ケズリ　底部指頭圧痕
47	土師器	甕	KG・KH65　Ⅱ層KH65Ⅲ層　D区	15.9	—	—	外：ハケ目　内：ナデ　粘土紐痕有り
48	土師器	甕	KC41・KO41　Ⅱ層RP02・03・05表土　D区	(25.2)	7.6	—	内外：ハケ目　底部梁脈痕　図上復元
49	須恵器	坏	3トレンチ　表土　A区	—	(6.0)	—	転用硯　ロクロ　ヘラ切り
50	土師器	坏	7トレンチ　A・D区外	—	—	—	外：ミガキ　内：黒色処理→ミガキ
51	土師器	坏	LR46　Ⅱ層　A区	—	—	—	外：ナデ　内：ハケ目　雲母入り
52	土師器	坏	12トレンチ－1　A区	—	—	—	ロクロ　内外：炭化物付着
53	土師器	甕	3トレンチ　表土　A・D区外	—	—	—	ロクロ　内：炭化物付着
54	土師器	甕	8トレンチ－1　A・D区外	—	—	—	外：ハケ目　内：ナデ　炭化物付着
55	土師器	小甕	KD48　Ⅱ層　D区	—	(4.8)	—	外：ケズリ→ナデ・指頭圧痕有り　内：ナデ
56	土師器	小甕	KD48　Ⅱ層　D区	—	(7.2)	—	外：ケズリ→ナデ　内：ナデ

第47図　遺構外出土遺物（５）



番　号	種　別	器　形	グリッド・層位	計　測　値			特　徴
				口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	
57	土師器	坏	6トレンチ－9　焼土A区	－	5.5	－	ロクロ　回転糸切り　内底うるし
58	土師器	坏	B－MF33　Ⅱ層　A・D区外	－	(5.0)	－	赤色顔料付き　ロクロ　回転糸切り
59	土師器	高台付坏	7トレンチ－1　北　A・D区外	－	(4.8)	－	外：赤色付着物有り　内：黒色処理→ミガキ
60	須恵器	台付坏	緑土中　A区	－	(5.8)	－	双耳坏　ロクロ
61	土師器	甕	6トレンチ－7　表土　A区	－	(11.2)	－	外：ナデ　底部葉脈痕
62	土師器	甕	11トレンチ－1　A・D区外	－	(6.6)	－	内外：ナデ
63	土師器	甕	8トレンチ－1　A・D区外	－	(5.6)	－	内外：ナデ
64	土師器	甕	8トレンチ－1　A・D区外	－	(6.4)	－	外：ナデ　底部葉脈痕
65	土師器	坏	3トレンチ　表土　A・D区外	－	(5.6)	－	付着物有り
66	須恵器	壺	7トレンチ　A・D区外	－	－	－	外：ナデ　内：付着物有り
67	須恵器	壺	KC41　Ⅰ層表採・KH64　Ⅱ層　D区	－	－	－	ロクロ　高台部分欠損
68	須恵器	台付壺	7トレンチ－9　A・D区外	－	7.7	－	ロクロ　外：ケズリ
				最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	
69	土製品	－	LS50　Ⅱ層　A区	4.9	3.4	3.4	
70	石製品	砥石	3トレンチ－1　A・D区外	8.5	2.6	1.6	

第48図　遺構外出土遺物（６）



番　号	器　種	グリッド・層位	計　測　値			特　徴
			最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	
1	棒状木製品	８トレンチ 谷地層 Ａ・Ｄ区外	10.4	0.9	1.0	付け木
2	棒状木製品	８トレンチ 前谷地層 Ａ・Ｄ区外	10.7	1.0	0.6	付け木
3	棒状木製品	８トレンチ　Ａ・Ｄ区外	15.2	1.7	1.0	付け木
4	棒状木製品	８トレンチ　排土　Ａ・Ｄ区外	14.8	1.4	1.2	
5	建具	８トレンチ 谷地層 Ａ・Ｄ区外	23.8	2.0	0.8	
6	建具	８トレンチ 谷地層 Ａ・Ｄ区外	22.9	2.4	0.8	加工痕有り
7	建具	６トレンチ－６　Ａ・Ｄ区外	25.2	2.3	0.7	加工痕有り
8	建具	８トレンチ　Ａ・Ｄ区外	52.0	2.1	1.0	加工痕有り
9	曲物	８トレンチ　Ａ・Ｄ区外	11.6	11.0	0.9	底板
10	曲物（一部）	８トレンチ 谷地層 Ａ・Ｄ区外	3.1	8.5	0.5	
11	建具	８トレンチ 前谷地層 Ａ・Ｄ区外	10.6	6.1	1.0	一部炭化している
12	建具	８トレンチ　Ａ・Ｄ区外	10.0	6.7	0.9	一部炭化している
13	建具	８トレンチ　Ａ・Ｄ区外	14.5	4.0	2.6	
14	加工材	ＫＥ49　攪乱　Ｄ区	4.0	2.9	0.8	用途不明
15	棒状木製品	９トレンチ　Ｄ区	6.4	1.4	1.2	
16	箸状木製品	８トレンチ－ＲＷ３　Ａ・Ｄ区外	7.7	0.7	0.5	（科析－27）
17	箸状木製品	９トレンチ－ＲＷ２　Ｄ区	6.3	0.9	0.5	（科析－28）

第49図　遺構外出土遺物（７）

着していた。木製品は、曲物底板４点、曲物側板２点、用途不明の加工板１点、建具材１点、板状木製品１点、棒状木製品２点、串状木製品１点、箸状木製品２点が出土した。26の曲物底板は、まな板に転用された可能性がある。これら遺物の出土状況や組み合わせから、何らかの祭祀行為が河川跡で行われていたものと判断される。

《時　　期》平安時代（９世紀前半）と考えられる。

ＳＬ09河川跡

《位置と確認》Ｄ区ＫＩ72～75、ＫＪ73～77、ＫＫ74～77グリッドのⅡ層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸16.60m×短軸5.12m、深さ約2.20mで、平面形は、河川流路を調査区の横幅分（約５m）南北方向に掘り下げた状態を呈する。この南北方向で確認した川幅は平均16.32mである。

《土　　層》土層断面の記録ができなかった。

《底　　面》ＫＫ～ＫＪ75ラインとＫＫ～ＫＩ74ラインの間に、幅2.08～1.32m、高さ20～30cm段差がある。川底の南側で土器・木製品が出土し、自然木の幹・枝・種子も堆積していた。底面から水が湧き、調査区境界線の壁際底面からも水が滲み出る。

《川岸と流路》北岸はやや急な角度で立ち上がり、南岸は緩く傾斜して立ち上がる。流水方向は不明である。底面標高では西側が低く東側が高い。

《出土遺物》13点を図示した（第39図１～３、第40図４～13）。土師器坏１点、須恵器坏１点、土師器甕１点、木製品10点である。遺物はほとんどが河川跡南側（ＫＫ・ＫＪ75ライン以南）からまとまって出土しており、ＳＬ04河川跡とは様相が異なる。土器よりも木製品の方が多く出土しているのが特徴である。建具材２点、曲物底板２点、板状木製品４点、棒状木製品２点が出土した。

《時　　期》平安時代（９世紀前半）と考えられる。

④　溝跡

ＳＤ45溝跡

《位置と確認》Ｄ区ＫＯ95グリッドのⅡ層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸3.60m×短軸0.72m、深さ0.24mで、平面形は南北方向に「く」の字状を呈する。調査区外の西側に溝が続くものと思われる。

《重　　複》ＳＸ46性格不明遺構を切る。

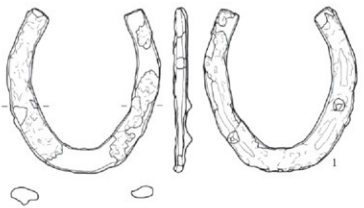
《土　　層》４層に分層した。溝跡自体の堆積土は黒褐色土の単層で、粒状の炭化物が底面の外側に多く含まれる。

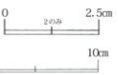
《　壁　》内側の壁は急な角度で立ち上がり、外側の壁は比較的緩く立ち上がる。

《底　　面》溝底は内側の方が外側より僅かに深い。北側に寄るにつれ平坦となる。

《出土遺物》２点を図示した（第42図７・８）。いずれも破片だが土師器甕と土師器鉢である。

《時　　期》平安時代（９世紀前葉）と考えられる。





番　号	種　別	器　形	グリッド・層位	計　測　値			特　徴
				最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	
1	鉄製品	蹄鉄	MQ31　I層	13.0	12.1	1.4	
2	銅貨	―	KK83　II層	2.3	2.3	0.1	治平元寶

第50図　遺構外出土遺物（８）

⑤　性格不明遺構

ＳＸ46性格不明遺構

《位置と確認》D区KO95・96グリッドのⅡ層で確認した。調査区外の西側に遺構が含まれるものと考えられる。

《重　　複》ＳＤ45溝跡に切られている。

《規模と平面形》規模は長軸1.20m×短軸1.17m、深さ0.26mで、平面形は部分的ながら隅丸方形を呈する。主軸方位はＮ－57°－Ｗを示す。

《土　　層》ＳＤ45溝跡と重複関係にあるため全８層に分層した内の下位４層（第41図の５～８層）がこれに該当する。各層に炭化物が混入しているが、特に底面の８層は炭化物層である。６～８層に遺物が多く含まれる。

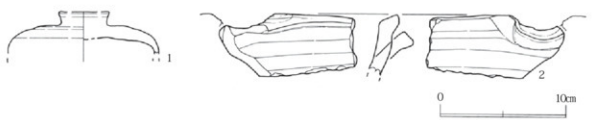
《壁・底面》壁は緩く傾斜して立ち上がる。底面は僅かな凹凸があり、平坦ではない。

《出土遺物》６点を図示した（第41図１～６）。いずれも破片だが、土師器坏５点、土師器鉢１点である。第41図４には炭化物が付着している。これは自然科学的分析を行った（第５章を参照）。

《時　　期》奈良時代後半～平安時代（９世紀前葉）と考えられる。

⑥　柱穴様ピット

ＳＫＰ25基（D区）※数が多いため計測一覧に記載。



番　号	種　別	器　形	グリッド・層位	計　測　値			特　徴
				口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	
1	須恵器系中世陶器	器	ＫＯ97　Ⅱ層　Ｄ区	つまみ径(4.0)	－	－	陸条有り
2	須恵器系中世陶器	鉢・瓶鉢	ＫＬ79　Ⅱ層　Ｄ区	－	－	－	片口状

第51図　遺構外出土遺物（９）

第11表　柱穴様ピット計測一覧（Ｄ区）

遺構番号	所在区	確認面	長軸(単位：m)	短軸(単位：m)	深さ（単位：m）	底面高(単位:m)	平　面　形	覆　土
ＳＫＰ13	ＫＦ56	Ⅱ	0.25	0.20	0.26	43.11	円形	黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ14	ＫＦ56	Ⅱ	0.48	0.33	0.30	43.14	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ２/２）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ15	ＫＥ・ＫＦ56	Ⅱ	0.25	0.24	0.27	43.15	円形	黒褐色土（10ＹＲ２/２）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ16	ＫＦ56	Ⅱ	0.27	0.20	0.06	43.35	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ２/２）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ17	ＫＦ57	Ⅱ	0.39	0.26	0.27	43.18	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ２/２）しまり強　粘性無
ＳＫＰ18	ＫＦ・ＫＧ57	Ⅱ	0.21	0.19	0.12	43.26	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ２/２）しまり強　粘性弱
ＳＫＰ20	ＫＦ・ＫＧ56	Ⅱ	0.40	0.36	0.11	43.29	隅丸方形	黒褐色土（10ＹＲ２/２）しまり強　粘性中
ＳＫＰ21	ＫＧ60	Ⅱ	0.21	0.20	0.22	43.03	隅丸方形	黒褐色土（10ＹＲ３/１）しまり中　粘性中
ＳＫＰ22	ＫＧ61	Ⅱ	0.28	0.14	0.24	43.23	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ３/１）しまり中　粘性中
ＳＫＰ24	ＫＧ60	Ⅱ	0.24	0.12	0.36	43.09	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ２/２）しまり中　粘性中
ＳＫＰ26	ＫＧ61	Ⅱ	0.27	0.20	0.11	43.36	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ２/１）しまり中　粘性中
ＳＫＰ31	ＫＧ60	Ⅱ	0.15	0.10	0.28	43.15	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり中　粘性中
ＳＫＰ32	ＫＧ60	Ⅱ	0.22	0.19	0.17	43.27	円形	黒褐色土（10ＹＲ３/２）しまり中　粘性中
ＳＫＰ34	ＫＯ97	Ⅱ	0.40	0.30	0.34	42.62	隅丸方形	黒褐色土（10ＹＲ２/３）しまり強　粘性中
ＳＫＰ35	ＫＯ97	Ⅱ	0.33	0.31	0.38	42.57	円形	黒褐色土（10ＹＲ２/２）しまり強　粘性中
ＳＫＰ36	ＫＯ99	Ⅱ	0.26	0.25	0.10	42.77	隅丸方形	黒褐色土（10ＹＲ２/２）しまり中　粘性中
ＳＫＰ49	ＫＧ60・61	Ⅱ	0.20	0.19	0.15	43.33	円形	黒褐色土（10ＹＲ２/１）しまり中　粘性中
ＳＫＰ50	ＫＧ60	Ⅱ	0.22	0.22	0.17	43.32	円形	黒褐色土（10ＹＲ２/２）しまり中　粘性中
ＳＫＰ54	ＫＧ60	Ⅱ	0.35	0.20	0.17	43.27	楕円形	黒褐色土（10ＹＲ２/２）しまり中　粘性中
ＳＫＰ56	ＫＯ97	Ⅱ	0.29	0.22	0.05	42.90	円形	黒褐色土（10ＹＲ２/２）しまり強　粘性中

３　Ｂ・Ｃ区について

調査区のＢ区とＣ区は、発掘調査の結果、遺物が出土したのみで遺構は検出されなかった。よって、その出土遺物は本章第３節の遺構外出土遺物に掲載した。出土地点（グリッド）は観察表に記した。

第３節　遺構外出土遺物

本遺跡の遺構外から出土した遺物は、縄文時代と古代（奈良～平安時代）、中世以降の三つに大別される。これらの遺物の９割以上は、平安時代に比定される時期のものであり、検出遺構の内部から出土した遺物の時期と合致する。この遺構外出土遺物を第43～52図に掲載した。第43図は縄文時代の遺物、第44図は奈良時代後半から平安時代初頭の遺物、第45～49図は平安時代の遺物、第50・51図は中世以降の遺物である。

第52図は奈良修介氏が『秋田県の考古学』（吉川弘文館、昭和42年刊）第五章第三節の第126図53～56で、始めて紹介した墨書土器４点を含む遺物である。秋田県内では著名な土器であり、大見内遺跡の発掘調査にあたり、所有者である佐々木順之助・ハナ子夫妻から御協力を得て再実測・拓本の上、掲載した。奈良修介氏は同書の中で、雄物川町「石塚」出土としているが、発見者でもある佐々木順

之助氏と雄物川町郷土資料館の島田祐悦氏が現地踏査した結果、現在の上大見内遺跡（遺跡番号60－72）範囲内から出土した遺物であることが判明した。以下、遺構外出土遺物について略述する。

第43図は縄文時代の土器と石器である。土器６点、石器６点を図示した。

第44図13～21は、古代の土器のうち、奈良時代（８世紀後半）から平安時代初頭に比定されるものを９点図示した。13は刻書土器で底部外面に「米」と刻まれている。

第45図22～28は、平安時代の土師器坏と須恵器坏のうち、墨書土器７点を図示した。22～24・26～28は底部外面に墨書されており、25のみ胴部外面に墨書される。22は「仲」、23は「月」または「月」を含む文字の一部、24は「工」、25～28は文字としては不明である。27・28は記号の一種と考えられる。

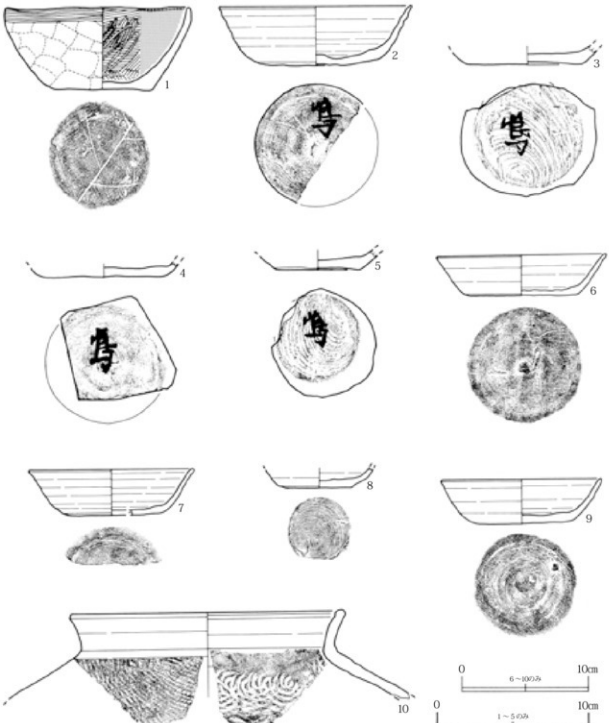
第46図29～44、第47図45～56、第48図57～68は、平安時代の土師器・須恵器40点を図示した。平成13年度の大見内遺跡確認調査で出土したものと、平成14年度の本調査で出土したものがある。

第49図１～17は、木製品17点を図示した。用途不明のものも含まれるが、人為的な加工の痕跡が認められる遺物である。

第50図１・２は鉄製品と銭貨の２点を図示した。１は蹄鉄であり、２は北宋銭の治平元寶である。２はその造りから模鋳銭である可能性が高いと考える。

第51図１・２は須恵器系中世陶器２点を図示した。１は蓋、２は鉢または擂鉢の口縁部（片口）である。

第52図１～10は、前述の上大見内遺跡出土遺物10点を図示した。発掘調査開始前は、大見内遺跡出土遺物と認識していたものである。１・８は土師器坏、２～７・９は須恵器坏、10は須恵器甕である。２～５は墨書土器であり、底部外面に「嶌」と書かれている。同一筆跡のものと考えられる。



番　号	種　別	器　形	グリッド・層位	計　測　値			特　　徴
				口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	
1	土師器	坏	—	12.1	6.6	5.4	外：ケズリ→ミガキ→柿しぶ　内：ミガキ（横位→放射状タテ→黒色処理）　底部葉脈痕
2	須恵器	坏	—	12.6	(8.2)	3.9	墨書　回転ヘラ切り
3	須恵器	坏	—	—	7.5	—	墨書　回転糸切り　底図的な打ち欠き、内面使用痕顕著
4	須恵器	坏	—	—	(8.0)	—	墨書　回転ヘラ切り
5	須恵器	坏	—	—	5.8	—	墨書　回転糸切り
6	須恵器	坏	—	13.3	9.0	3.3	回転ヘラ切り
7	須恵器	坏	—	(12.9)	(8.0)	3.6	ヘラ切り
8	土師器	坏	—	—	5.1	—	回転糸切り
9	須恵器	坏	—	12.5	8.0	3.6	回転ヘラ切り　軸薬有り（柿しぶ）
10	須恵器	甕	—	—	—	—	内：タタキ目

第52図　遺構外出土遺物（10）

第５章　自然科学的分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

大見内遺跡は、かつての氾濫原上で現在の水田地帯に位置し、雄物川右岸の砂礫段丘上に立地する。今回の発掘調査では、縄文時代中期～後期の土器埋設遺構と土坑、古代（奈良時代後半～平安時代前半）の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、河川跡、井戸跡、溝跡などが検出されている。これらの遺構からは、土器、石器、土師器、須恵器、土製品等の他、木製品や種実遺体などの植物質遺物も出土している。

今回の分析調査では、出土した炭化物、漆片、土器付着炭化物等について放射性炭素年代測定を行い、遺物や遺物の年代に関する資料を得る。また、木製品の樹種同定・種実遺体の同定・花粉分析を行い、木材利用・植物利用・古環境に関する資料を得る。

第１節　放射性炭素年代測定

⑴　試料

試料は、住居跡等から出土した炭化物２点（試料番号１、４）、漆塗膜片１点（試料番号２）、土器付着炭化物15点（試料番号３、５～18）の合計18点である。炭化物と漆塗膜片は、そのまま分析試料とした。

土器付着炭化物については、カッターナイフ等を用いて土器表面から炭化物を削りとって試料とした。

⑵　方法

測定は、加速器質量分析法（ＡＭＳ法）で行い、放射性炭素の半減期はＬＩＢＢＹの5568年を使用した。なお、測定は、株式会社加速器分析研究所（ＩＡＡ）が行った。

⑶　結果

年代測定結果を表１に示す。試料の測定年代値は、ＳＸ46出土土器付着炭化物（試料番号14）が2400ＢＰ（補正年代2240ＢＰ）の他は、1040～1400ＢＰ（補正年代1090～1410ＢＰ）の値を示す。

なお、試料番号１、４については、炭化物の同定を行い、試料番号１がクリの炭化材、試料番号４がモクレン属にそれぞれ同定された。

⑷　考察

放射性炭素年代測定結果は、ＳＸ46出土土器付着炭化物とそれ以外とで大きく２つに分けられる。ＳＸ46出土土器付着炭化物（試料番号14）の年代値は、2400ＢＰ（補正年代2240ＢＰ）であった。キーリ・武藤（1982）によれば、東北地方の縄文時代晩期は3250～2250ＢＰとされており、今回の測定値は縄文時代晩期末～弥生時代初頭に相当する。

ＳＸ46出土土器付着炭化物（試料番号14）を除く各試料の年代値は、1040～1400ＢＰ（補正年代1090～1410ＢＰ）となり、1200～1300ＢＰ付近に値が集中する。各試料の補正年代を用いて、ＩＮ

ＴＣＡＬ98（Stuiver, M. et al, 1998）による暦年較正を行うと、各試料の暦年代は補正年代より最大100年程度新しくなるが、大きくは変わらない。したがって、これらの土器付着物や漆片の年代としては、７世紀中頃～10世紀末が想定される。この結果は、奈良時代後半～平安時代前半の遺構が検出されていることとも調和的である。

第２節　花粉分析

第12表　放射性炭素年代測定結果

番号	遺構名	遺物番号	試料の質	測定年代	σ13C	補正年代	Code. No.
1	ＳＫ01	ＲＣ１	炭化材（クリ）	1270±50ＢＰ	−28.79±0.83‰	1210±50ＢＰ	ＩＡＡＡ−11800
2	ＳＩ02	ＲＣ１	出土炭化物（漆塗膜片）	1280±40ＢＰ	−28.17±0.90‰	1230±50ＢＰ	ＩＡＡＡ−11801
3	ＳＩ02	ＲＰ１	土器付着炭化物	1300±40ＢＰ	−31.03±0.80‰	1240±40ＢＰ	ＩＡＡＡ−11802
4	ＳＩ10	ＲＣ４	炭化材（モクレン）	1280±40ＢＰ	−23.36±0.80‰	1310±40ＢＰ	ＩＡＡＡ−11803
5	ＳＩ80	ＲＰ58	土器付着炭化物（漆塗膜片）	1250±70ＢＰ	−34.40±0.96‰	1090±70ＢＰ	ＩＡＡＡ−11804
6	ＳＩ80	ＲＰ16	土器付着炭化物	1330±40ＢＰ	−30.03±0.98‰	1250±50ＢＰ	ＩＡＡＡ−11805
7	ＳＫ12	ＲＰ７	土器付着炭化物	1280±40ＢＰ	−24.76±0.75‰	1230±40ＢＰ	ＩＡＡＡ−11806
8	ＳＫ60	ＲＰ１	土器付着炭化物	1060±60ＢＰ	−19.14±0.94‰	1140±60ＢＰ	ＩＡＡＡ−11807
9	ＳＫ274	ＲＰ１	土器付着炭化物	1400±40ＢＰ	−25.49±0.76‰	1400±40ＢＰ	ＩＡＡＡ−11808
10	ＳＥ131	ＲＰ１	土器付着炭化物	1200±40ＢＰ	−26.29±0.76‰	1250±40ＢＰ	ＩＡＡＡ−11809
11	ＳＬ04	ＲＰ１	土器付着炭化物	1380±40ＢＰ	−31.51±0.75‰	1270±40ＢＰ	ＩＡＡＡ−11800
12	ＳＬ04	ＲＰ２	土器付着炭化物	1340±40ＢＰ	−21.55±1.22‰	1400±50ＢＰ	ＩＡＡＡ−11801
13	ＳＫ79	ＲＰ１	土器付着炭化物	1170±40ＢＰ	−21.15±0.88‰	1230±40ＢＰ	ＩＡＡＡ−11802
14	ＳＫ46	ＲＰ１	土器付着炭化物	2400±40ＢＰ	−22.72±0.96‰	2240±40ＢＰ	ＩＡＡＡ−11803
15	遺構外ＫＨ64	ＲＰ１	土器付着炭化物	1330±70ＢＰ	−34.04±0.86‰	1200±80ＢＰ	ＩＡＡＡ−11804
16	遺構外ＫＮ94	ＲＰ１	土器付着炭化物	1220±50ＢＰ	−13.42±0.69‰	1410±50ＢＰ	ＩＡＡＡ−11805
17	遺構外ＫＨ63	ＲＰ１	土器付着炭化物	1200±40ＢＰ	−21.15±0.79‰	1250±40ＢＰ	ＩＡＡＡ−11806
18	遺構外ＬＳ50	ＲＰ１	土器付着炭化物	1330±40ＢＰ	−19.50±0.83‰	1400±40ＢＰ	ＩＡＡＡ−11807

1）測定は、加速器質量分析法（ＡＭＳ法）による。
2）年代は、1950年を基点とした年数で、補正年代はσ13Cの基に同位体効果による年代誤差を補正した値。
3）放射性炭素の半減期は、5568年を使用した。

(1)　試料

試料は、Ｄ区ＳＩ01・ＳＩ02より各１点採取された土壌２点（試料番号39・40）、Ａ区ＳＥ131より採取された土壌１点（試料番号41）の計３点である。

(2)　方法

試料10ｇについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）よる有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸９：濃硫酸１の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・科学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

(3)　結果

結果を表２に示す。表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なもの

第13表　花粉分析結果

種類	試料番号	Ｄ区 ＳＩ01	Ｄ区 ＳＩ02	Ａ区 ＳＥ131
木本花粉				
ツガ属		−	−	1
マツ属複維管束亜属		2	7	−
マツ属（不明）		1	7	−
サワグルミ属		1	1	−
カバノキ属		2	1	−
ハンノキ属		1	2	−
ブナ属		4	−	−
コナラ属コナラ亜属		1	−	−
モチノキ属		1	−	−
カエデ属		2	−	−
トチノキ属		−	1	−
シナノキ属		1	−	−
草本花粉				
サジオモダカ属		1	−	−
イネ科		29	23	5
カヤツリグサ科		1	−	−
タデ科		1	−	−
サナエタデ節−ウナギツカミ節		1	1	−
タデ属		−	1	−
ナデシコ科		−	1	−
ワレモコウ属		1	−	−
セリ科		1	−	−
ヨモギ属		2	8	−
キク亜科		2	9	−
不明花粉		2	2	−
シダ胞子				
ヒカゲノカズラ属		1	1	1
他のシダ胞子		19	37	5
合　計				
木本花粉		16	19	1
草本花粉		39	43	5
不明花粉		2	2	0
シダ胞子		20	38	6
総計（不明を除く）		75	100	12

である。いずれの試料においても検出される花粉化石数は少ない。

ＳＩ01・ＳＩ02（試料番号39・40）からは花粉化石の産出が認められるが、定量解析を行うだけの個体数は得られなかった。保存状態もやや悪い。木本花粉ではマツ属・ブナ属・カバノキ属・ハンノキ属などが、草木花粉ではイネ科・ヨモギ属・キク亜科などが認められる。

ＳＥ131（試料番号41）は、保存状態は比較的良好であるものの、花粉化石がほとんど産出しない。わずかにツガ属・イネ科花粉が認められるだけである。

(4) 考察

Ｄ区ＳＩ01・ＳＩ02（試料番号39・40）の花粉分析結果は、ある程度の種類数が認められるものの、産出個体数は少ない。一般的に花粉・シダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壌微生物によって分解・消失するとされている（中村，1967；徳永・山内，1971）。本試料は、２条の河川跡に挟まれた住居跡より採取されている。詳細な状況は不明であるが、この地点が河川の自然堤防上のような環境条件であった可能性がある。もしそうだとすると、取り込まれた花粉は好気的な環境にさらされていたと推測される。したがって、本地点から花粉化石が検出されなかった理由としては、堆積時に取り込まれた花粉・シダ類胞子が、その後の経年変化により分解・消失した可能性があげられる。今後、堆積環境を検証するためには、珪藻分析を実施することが望まれる。

なお、検出された花粉化石では、イネ科・ヨモギ属・キク亜科などの草本類が比較的認められる。これらの花粉は、当時の本地点周辺に生育していた草本類に由来する可能性がある。また、わずかではあるが、水生植物であるサジオモダカ属も認められている。これは旧河川に生育していた可能性がある。

一方、Ａ区ＳＥ131底面土壌（試料番号41）からは、花粉化石はほとんど検出されなかった。花粉化石・シダ類胞子の産出状況が悪い場合、元々取り込まれる花粉量が少なかった、あるいは、取り込まれた花粉が消失した、という２つの可能性が想定される。しかし、検出された花粉化石は少ないものの、その保存状態は比較的良好である。このことから、ＳＥ131から花粉化石がほとんど産出しなかったのは、土坑内に花粉が取り込まれにくかった可能性があげられる。

第３節　種実遺体同定

(1) 試料

試料は河川跡（ＳＬ04、09）から出土した、種実遺体10点26個体（試料番号29～38）である。

(2) 方法

試料を肉眼および双眼実体顕微鏡下で観察し、形態的特徴および当社所有の現生標本との比較から種類を同定・計数する。同定後の種実遺体は種類毎にビン詰めをおこない、乾燥した種実遺体は乾燥剤を共に入れて保存する。水湿を帯びた種実遺体は、50％程度のエタノール溶液による液浸保存処理を施す。

(3) 結果

種実遺体同定結果を表３に示す。種実遺体の状態は良好で、針葉樹１種類（イヌガヤ）、広葉樹

５種類（オニグルミ、コナラ亜属、クスノキ科、マタタビ属、トチノキ）が同定された。以下に同定された種実遺体の形態的特徴などを記す。

・イヌガヤ（Cephalotaxus Harringtonia（Knight）K. Koch f. drupacea（Sieb. et Zucc.）Kitamura）　イヌガヤ科イヌガヤ属

種子が同定された。灰褐色、倒卵体で両端は尖る。長さ19㎜、幅10.5㎜、厚さ８㎜程度。基部から半ば付近の両側に稜がある。種皮は硬く木質で、表面はやや平滑。

・オニグルミ（Juglans mandshurica Maxim. subsp. Sieboldiana（Maxim.）Kitamura）　クルミ科クルミ属

核の半分が同定された。茶褐色、広卵形で頂部がやや尖る。長さ23.5－27.5㎜、径1.75－20.5㎜程度。１本の明瞭な縦の縫合線があり、縫合線に沿って半分に割れている。核は硬く、表面には縦方向に溝状の浅い彫紋が走り、ごつごつしている。内部には子葉が入る２つの大きな窪みと隔壁がある。

第14表　種実遺体同定結果

番号	遺構	遺物番号	出土層	イヌガヤ	オニグルミ	コナラ亜属	クスノキ科		マタタビ属	トチノキ	
				種子	核	果実	果実	種子	種子	果実	種子
29	ＳＬ04	ＲＮ１	４層	－	－	－	－	－	－	2	1
30	ＳＬ04	ＲＮ２	４層	－	－	－	1	3	－	－	－
31	ＳＬ04	ＲＮ３	４層	－	－	－	－	－	－	1	2
32	ＳＬ04	ＲＮ４	４層	1	－	－	－	－	－	－	－
33	ＳＬ04	ＲＮ５	４層	－	3	－	－	－	－	－	－
34	ＳＬ09	ＲＮ１	４層	－	3	－	－	－	－	－	－
35	ＳＬ09	ＲＮ２	４層	－	－	－	－	－	－	－	2
36	ＳＬ09	ＲＮ３	４層	－	－	－	－	－	－	2	－
37	ＳＬ09	ＲＮ４	４層	－	－	2	－	－	－	－	－
38	ＳＬ09	ＲＮ５	４層	－	－	1	－	－	－	－	1

・コナラ属コナラ亜属（Quercus subgen. Quercus）ブナ科

果実の破片が同定された。茶褐色、卵形か。長さ23㎜、径10㎜程度。基部の着点の径は４㎜程度。果実頂部の輪状紋は認められない。基部の着点は円形、淡褐色で維管束の穴が輪状に並ぶ。果皮外面は平滑で、ごく浅く微細な縦筋がある。

・クスノキ科（Cinnamomum）

果実と種子が同定された。黒色、球形。径14－17㎜程度。果実の基部はやや突出し、円形の臍がある。果実表面は平滑で光沢がある。種子の基部には突起状の臍からはじまる低い稜があり、側面の途中で終わる。種皮は薄く硬く、表面は平滑となる。

・マタタビ属（Actinidia）マタタビ科

種子が検出された。灰褐色、楕円形で両凸レンズ形。長さ２㎜、幅1.5㎜程度。種皮は硬く、表面には円形・楕円形などの凹点が密布し網目模様をなす。

・トチノキ（Aesculus turbinata Blume）トチノキ科トチノキ属

果実と種子が同定された。果実は灰褐色、倒卵球形、径17－26㎜程度。果実には３裂する線が走る。果皮は厚くやや弾力があり、表面は皮目状の斑点がある。種子は偏球形、径25－30㎜程度。試料番号38は径11㎜で、未熟個体と思われる。種子は、上半部の黒色の光沢部分と、下半部の光沢のない灰褐色部分に独特のラインで別れる。種皮は薄く硬く、表面の上半部は平滑、下半部はややざらつく。

(4)　考察

今回同定された種実遺体は、全て大木類であった。針葉樹のイヌガヤは、山林の林下に生える常

緑小木である。オニグルミ、トチノキは、沢沿いなどの適湿の地を好んで生育する落葉高木である。これらは、コナラ亜属、クスノキ科、籐本類のマタタビ属と共に、本地域で比較的普通に見られる種類である。現在の植生などを考慮すれば、オニグルミやトチノキが沢沿い等に生育し、コナラ亜属、クスノキ科、マタタビ属等は自然堤防上や台地等に生育していたと考えられる。

同定された種類のうち、オニグルミ、コナラ亜属、トチノキは、果実が有用となる種類である。コナラ亜属とトチノキはアク抜きを必要とするが、果実が食用となり、長期の保存が可能で収量も多い。トチノキのアク抜き技術は、既に縄文時代にはあったことが知られており、本遺跡でもアク抜きをした上で食糧として利用していた可能性がある。また、イヌガヤは種子が食用や油採に利用可能である。落葉籐本のマタタビ属は、果実が多汁で生食が可能である。これらの種類についても利用されていたことが推定される。

第４節　木製品の樹種同定

⑴　試料

試料は、河川跡（ＳＬ04、09）および確認調査で出土した木製品10点（試料番号19～28）である。木製品の破損部分を利用して、小片の採取または直接切片を採取して試料とした。

⑵　方法

木片は、剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製する。切片はガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

⑶　結果

木製品は、全て針葉樹のスギに同定された（表４）。主な解剖学的特徴を以下に記す。

・スギ（Cryptomeria japonica（L. f.）D. Don）スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成され、仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔はスギ型で、１分野に２～４個。放射組織は単列、１～15細胞高。

⑷　考察

木製品は、試料採取時の観察から、曲物の側板や底板等が半数を占め、他に箸と考えられる棒状の製品、用途不明の加工材（加工板、ほぞのある角材、棒状製品）がある。樹種は、全て針葉樹のスギであった。

木製品のうち、曲物は底板・側板とも柾目板の加工を施している。また、加工板は板目板となる木取りであった。ほぞのある角材は、

第15表　樹種同定結果

番号	遺　構	遺物番号	器　種	木取	樹種
19	ＳＬ04	ＲＷ１	加工板（孔有）	板目	スギ
20	ＳＬ04	ＲＷ２	曲物の底板（半円形）	柾目	スギ
21	ＳＬ04	ＲＷ３	曲物側板	柾目	スギ
22	ＳＬ04	ＲＷ４	曲物底板（円形）	柾目	スギ
23	ＳＬ04	ＲＷ77	曲物側板	柾目	スギ
24	ＳＬ09	ＲＷ７	曲物側板（円形）	柾目	スギ
25	ＳＬ04	ＲＷ９	ほぞのある角材		スギ
26	ＳＬ09	ＲＷ３	棒状製品	棒状	スギ
27	確認調査８トレ	ＲＷ３	箸	棒状	スギ
28	確認調査９トレ	ＲＷ２	箸	棒状	スギ

加工面が柾目と板目になる木取りであった。スギは、木理が通直で割裂性が大きく、柾目や板目面に沿って容易に割ることができるため、柾目板や板目板の加工が容易である。曲物、加工板、ほぞのある角材は、スギ材の割裂性を利用したことが推定される。また、曲物については、耐水性等も考慮されている可能性がある。一方、棒状製品と箸は、いずれも断面が多角形～丸状となるが、年輪は同心円ではなく平行線状になる。このことから、大きな木材から削り出して製作されたことが推定される。

全ての木製品が同一樹種であることから、スギ材を主とした木材利用が推定される。しかし、今回対象とした器種は、各地で行われた調査でもスギやヒノキなどの針葉樹材が多く利用されている（島地・伊東、1988）。一方、椀や皿などではブナ属、トチノキ、ケヤキなどの広葉樹材が利用されていることが多いことから、本遺跡でも器種によって種類構成が異なっていた可能性がある。今後、これらの広葉樹材が多く用いられる器種等についても樹種同定を行い、器種による木材利用の実態を明らかにしたい。

引用文献

キーリC. T.・武藤康弘（1982）縄文時代の年代．「縄文文化の研究１縄文人とその環境」，p. 246－275. 雄山閣.

中村　純（1967）花粉分析．232 P., 古今書院

島地　謙・伊東隆夫編（1988）日本の遺跡出土木製品総覧．296 p., 雄山閣.

Stuiver, M., Reimer, P. J., Bard, E., Beck, J. W., Burr, G. S., Hughen, K. A., Kromer, B., McCormac, G., vanderplincht, J. and Spurk, M.（1998）INTCAL 98 radiocarbonage calibration, 24,000－0 cal BP. Radiocarbon, 40, p.1041－1083.

徳永重元・山内輝子（1971）花粉・胞子．「化石の研究法」，p. 50－73. 共立出版株式会社.

第６章　まとめ

今回の大見内遺跡発掘調査では、242遺構が検出され、コンテナ60箱分の遺物が出土した。遺跡全体の推定面積約390,000㎡に比べれば、ごく僅かな調査面積（4,250㎡：1.09％）に留まるが、明らかになった事実も多い。以下、検出した遺構と出土遺物について、その特徴を述べたい。

１．遺跡の性格

発掘調査は、水路になる箇所と削平がまぬがれない箇所という、ごく限られた範囲であるため、検出した竪穴住居跡は３軒（Ａ区：ＳＩ80、Ｄ区：ＳＩ02・10）と少ない。この竪穴住居跡に隣接あるいは重複して検出された土坑の存在などから、本遺跡は奈良時代後葉から平安時代初頭～中葉の集落跡であると考えられる。しかし、住居跡の密度が希薄なことから、一箇所に集住して継続的に営まれた集落ではなく、雄物川の氾濫やその支流である小河川の流路変遷に合わせ、住居を移しながら営まれた集落であると想定される。よって竪穴住居跡以外の掘立柱建物跡２棟（Ａ区：ＳＢ91・219）を含めても、集落としては散在的である。

もうひとつの性格は、検出した河川跡（ＳＬ04・09）が示す、水辺祭祀の場としての性格である。底面に「息」と墨書された土師器坏が出土し、曲物や箸、串、付け木などの木製品も共伴していることは、近年の五城目町中谷地遺跡や千畑町尿川谷地遺跡などの事例と同様に、水辺で祭祀が営まれていたものと考えられる。これら祭祀に関連する遺物は、第４章第２節で示したとおりである。

２．遺跡の時期・年代

検出遺構から出土した遺物は、平安時代の初頭から前葉に比定されるものが最も多い。この時期が本遺跡で集落が営まれた主要な時期であると考えられる。一方で、最も古い時期の遺構は、奈良時代の後半までさかのぼる（ＳＩ10竪穴住居跡・ＳＸ46性格不明遺構）。また、調査区によって時期の違いがあり、Ａ区の検出遺構は概ね平安時代（９世紀代）に収まるのに対し、Ｄ区の検出遺構は奈良時代（８世紀第３四半期）から平安時代（９世紀第３四半期）までの比較的長い期間に及ぶ。横手盆地の中には、奈良時代の遺跡が現在までに十数遺跡発掘調査されている。すなわち、雄物川町では末館窯跡、十三塚遺跡、蝦夷塚古墳群、釘貫遺跡、八卦遺跡の５遺跡、平鹿町では中藤根遺跡、下藤根遺跡、年子狐遺跡、竹原窯跡の４遺跡、横手市では郷土館窯跡、羽後町では足田遺跡、柏原古墳群などである。数は少ないながら、大見内遺跡も秋田県における８世紀代の土器編年に新たな資料を加えた遺跡となった。

３．検出遺構と遺物の特徴

⑴　ＳＩ80竪穴住居跡について

Ａ区で検出したＳＩ80竪穴住居跡は、その南側に掘立柱建物跡が一体となって取り付く形態を示している。このような形態の竪穴住居跡が横手盆地内で検出されたのは初めての事例となる。類似する例としては、平成12年に横手市前通遺跡で検出されたＳＩ112Ａ竪穴住居跡がある。この場合「竪穴部の外側に主要な柱穴がめぐる構造を持つため、竪穴部を有する掘立柱建物跡」と捉える見解が示され、出土した遺物から９世紀前半～中頃の時期に比定されている。また、平成14年に仙北町払田柵跡で検出されたＳＩ1401竪穴住居跡は、柱穴配置が南北２間、東西１間で竪

穴部を覆い、さらに竪穴部の北壁柱列から北側にＩ間分の張り出しが伴う「いわゆる竪穴住居に掘立柱建物が併設される施設と考えることができる」[註2]との見解がある。大見内遺跡のＳＩ80竪穴住居跡の場合、前通遺跡よりも払田柵跡の事例に近いが、住居の主軸方位（Ｎ－35°－Ｗ）に合わせ、南東の一方向だけに掘立部が取り付くため、全く同じとは言えない。今後の検出事例を待って検討したい。

⑵　ＳＬ04・09河川跡について

Ｄ区で検出したＳＬ04・09河川跡は、雄物川や大宮川支流の小河川があった跡と考えられる。出土した遺物やその出土状況から、これら河川跡では祭祀行為が行われていたものと考えられる。規模は小さいものの、墨書土器や灯明皿、多数の木製品などの出土は、千畑町扇川谷地遺跡の事例に近似する。平成15年度に調査された大見内・館野遺跡の調査結果も踏まえ、祭祀遺跡としての性格をさらに検討する必要がある。

近年、雄物川町では県営ほ場整備事業に係る発掘調査が盛んに行われ、大見内遺跡と同じ時期に比定される検出遺構・出土遺物が確認された遺跡がある。それは平成14年に発掘調査された蝦夷塚古墳群[註3]であり、同年確認調査された釘貫遺跡と八卦遺跡[註4]である。いずれも８世紀までさかのぼるという点で、これらの遺跡は同時期に営まれたものと考えられ、雄物川町を中心とした横手盆地の古代史を研究する上で欠かせない遺跡群であると言える。

註１　秋田県教育委員会『前通遺跡』秋田県文化財調査報告書第351集　2003（平成15）年

註２　秋田県教育庁払田柵跡調査事務所『払田柵跡第121次調査概要』秋田県文化財調査報告書第364集
（払田柵跡調査事務所年報2002）　2003（平成15）年

註３　雄物川町教育委員会『蝦夷塚古墳群』雄物川町文化財調査報告書第３集　2003（平成15）年

註４　雄物川町教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』雄物川町文化財調査報告書第４集　2003（平成15）年

国土交通省国土地理院
昭和51年11月6日撮影

空から見た大見内遺跡　（南→）

図版2　遺跡風景

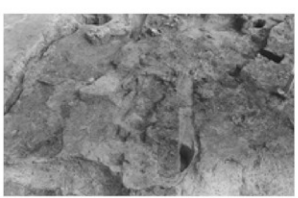
1．調査区A区近景（北→）

2．調査区D区近景（北→）

1．ＳＩ80およびＳＫ79・274・275完掘（北西→）

2．ＳＩ80竪穴住居跡断面（南西→）

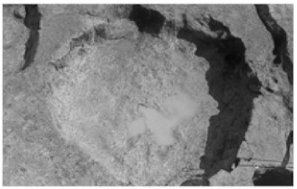
3．ＳＩ80竪穴住居跡焼土（北東→）



4．ＳＩ80竪穴住居跡カマド（北→）

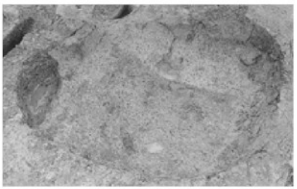
5．ＳＩ80竪穴住居跡カマド断面（北東→）

図版4　検出遺構(2)



1．ＳＫ79土坑完掘（北→）

2．ＳＫ79土坑断面（南東→）



3．ＳＫ275土坑完掘（北→）

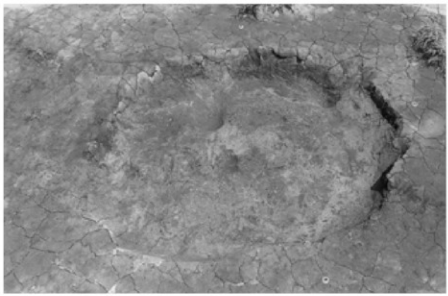
4．ＳＫ275土坑断面（南西→）

5．ＳＫ274土坑断面（北東→）

6．ＳＫ79土坑遺物出土状況（南東→）

7．ＳＩ80竪穴住居跡遺物出土状況（西→）

8．ＳＩ80竪穴住居跡遺物出土状況（南西→）



1．ＳＫ59土坑完掘
（南西→）

2．ＳＫ59土坑断面
（南東→）

3．ＳＫ59土坑断面
（北東→）

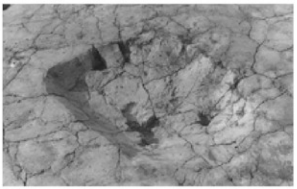
図版6　検出遺構(4)

1．SK60土坑完掘（南東→）

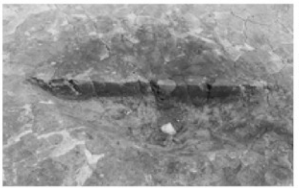
2．SK60土坑断面（南東→）

3．SK60土坑断面（南西→）

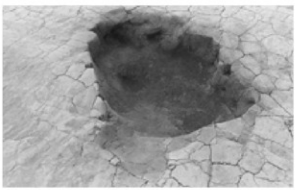
4．SK60遺物出土状況（南東→）



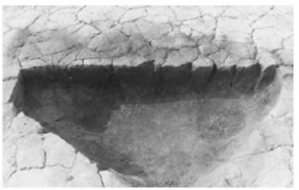
1．ＳＫ72土坑完掘（南→）



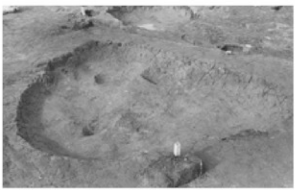
2．ＳＫ72土坑断面（南→）



3．ＳＫ88土坑完掘（南東→）

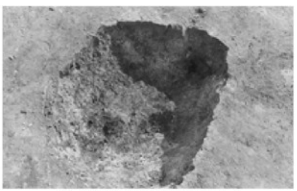


4．ＳＫ88土坑断面（南→）

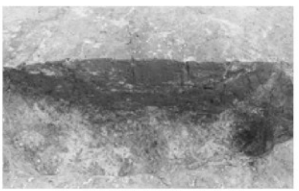


5．ＳＫ92土坑完掘（南→）

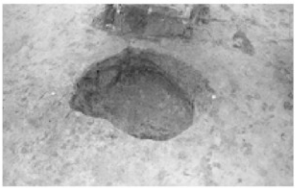
6．ＳＫ92土坑断面（北東→）



7．ＳＫ116土坑完掘（北東→）

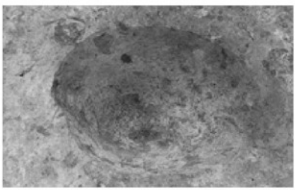


8．ＳＫ116土坑断面（北西→）



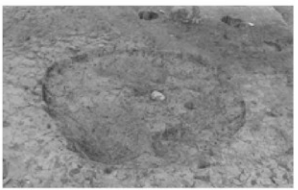
1．ＳＫ117土坑完掘（南東→）

2．ＳＫ117土坑断面（南東→）



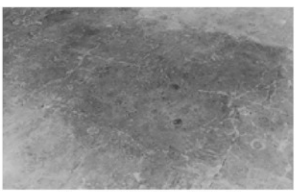
3．ＳＫ136土坑完掘（北→）

4．ＳＫ136土坑断面（北→）



5．ＳＫ317土坑完掘（西→）

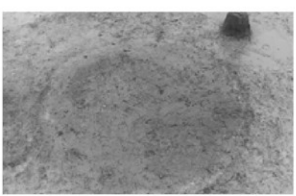
6．ＳＫ317土坑断面（東→）



7．ＳＫ99土坑完掘（南東→）

8．ＳＲ282土器埋設遺構断面（南→）

1．ＳＥ131井戸跡完掘（東→）

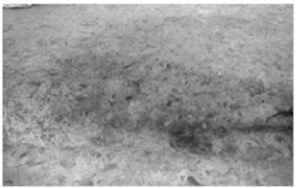


2．ＳＥ131井戸跡確認（西→）

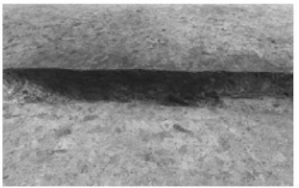
3．ＳＥ131井戸跡断面（東→）

4．ＳＥ131井戸跡断面（西→）

5．ＳＥ131井戸跡遺物出土状況（南→）

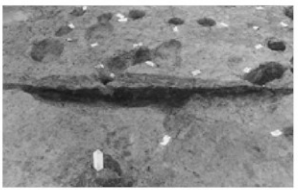


1．ＳＸ118性格不明遺構完掘（南→）

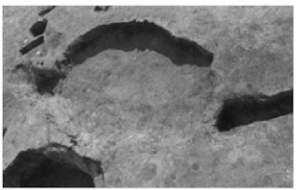


2．ＳＸ118性格不明遺構断面（南→）

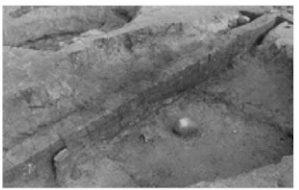
3．ＳＸ206性格不明遺構完掘（東→）



4．ＳＸ206性格不明遺構断面（東→）

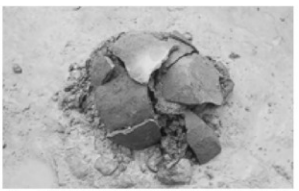


5．ＳＸ326性格不明遺構完掘（東→）



6．ＳＸ326性格不明遺構断面（北西→）

7．ＳＫ60土坑遺物出土状況（東→）



8．ＳＸ326性格不明遺構遺物出土状況（東→）

1．ＳＩ02竪穴住居跡・ＳＫ01土坑完掘（南西→）

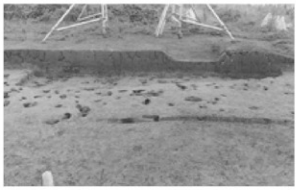
2．ＳＩ02竪穴住居跡断面（南西→）

3．ＳＫ01土坑断面（南西→）

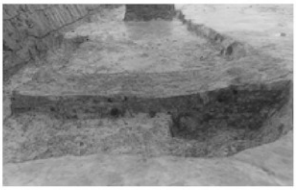
4．ＳＩ02竪穴住居跡西壁断面（北東→）

5．ＳＩ02竪穴住居跡カマド断面（西→）

1．ＳＩ10竪穴住居跡完掘（南西→）

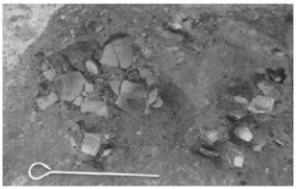


2．ＳＩ10竪穴住居跡断面（北東→）

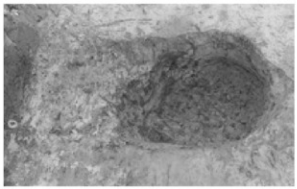


3．ＳＩ10竪穴住居跡断面（南東→）

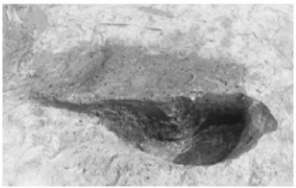
4．ＳＩ10竪穴住居跡確認（南東→）



5．ＳＩ10竪穴住居跡遺物出土状況（北西→）

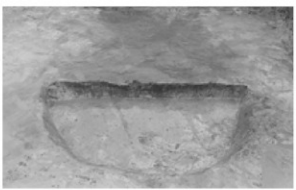


1．ＳＫ05土坑完掘（北西→）

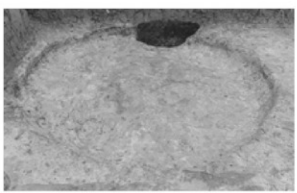


2．ＳＫ05土坑断面（北西→）

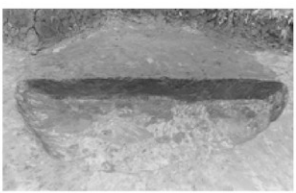
3．ＳＫ06土坑完掘（南西→）



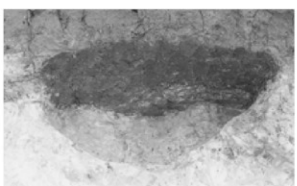
4．ＳＫ06土坑断面（南西→）



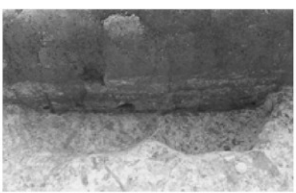
5．ＳＫ07土坑完掘（西→）



6．ＳＫ07土坑断面（南西→）



7．ＳＫ58土坑完掘（南西→）

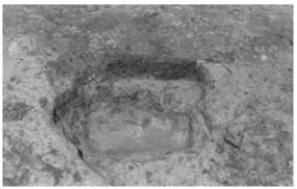


8．ＳＫ58土坑断面（南西→）

図版14 検出遺構(12)

1．ＳＫ08土坑完掘（東→）

2．ＳＫ08土坑断面（北東→）



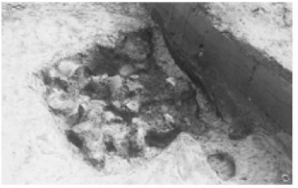
3．ＳＫ11土坑断面（南東→）

4．ＳＫ11土坑遺物出土状況（南東→）

5．ＳＤ45溝跡確認（北東→）

6．ＳＤ45溝跡断面（東→）

7．ＳＸ46性格不明遺構確認（南東→）



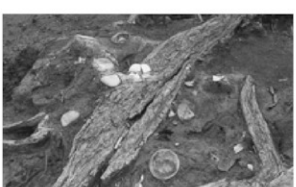
8．ＳＸ46性格不明遺構遺物出土状況（東→）

1．SL04
河川跡完掘
（南西→）

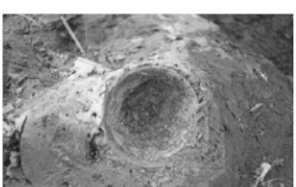
2．SL04
河川跡完掘
（南西→）

3．SL04河川跡
確認
（北西→）

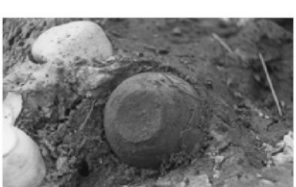
1．ＳＬ04河川跡遺物出土状況（西→）



2．ＳＬ04河川跡遺物出土状況（南東→）



3．ＳＬ04河川跡遺物出土状況（南東→）



4．ＳＬ04河川跡遺物出土状況（南東→）

5．ＳＬ04河川跡遺物出土状況（北→）

1．ＳＬ09河川跡南側（南西→）

2．ＳＬ09河川跡北側（南西→）

3．ＳＬ09河川跡遺物出土状況（北東→）

4．ＳＬ09河川跡遺物出土状況（東→）

5．ＳＬ09河川跡遺物出土状況（南→）

図版18　遺構内出土遺物（1）

1　11図－1

2　18図－1

3　19図－2

4　19図－3

5　19図－4

6　19図－5

7　21図－1

8　24図－1

9　24図－7

10　24図－8

11　15図－45

12　20図－10

13　15図－46

14　19図－7

1 20図－9

2 20図－9（底）

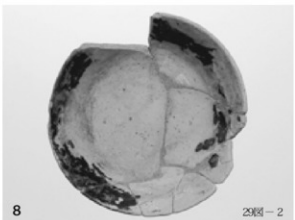
3 25図－18

4 25図－19

5 27図－30

6 27図－30（底）

7 24図－9



8 29図－2

1 29図－4

2 29図－5

3 29図－8

4 29図－9

5 30図－26

6 31図－2

7 36図－1

8 36図－8

9 36図－9

10 36図－10

11 36図－11

12 37図－12

13 37図－16

14 37図－13

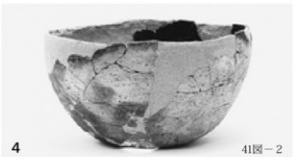
15 39図－2

16 41図－3

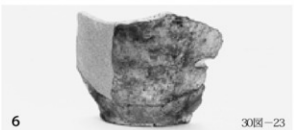
1 31図－1

2 31図－3

3 41図－1


4 41図－2

5 29図－7


6 30図－23

7 29図－10

8 29図－11

9 29図－12

10 37図－14

図版22　遺構内出土遺物(5)・遺構外出土遺物(1)

1　32図－5

2　37図－15

3　45図－24（底）

4　44図－13

5　44図－13（底）

6　45図－25

7　45図－22

8　45図－23

9　45図－27

10　45図－28

11　46図－32

1 46図－33

2 46図－35

3 46図－38

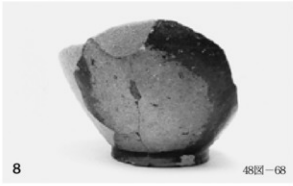
4 46図－40

5 45図－24

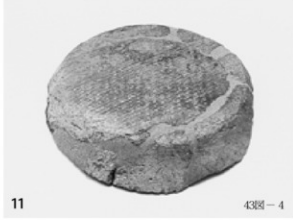
7 47図－47

6 48図－67

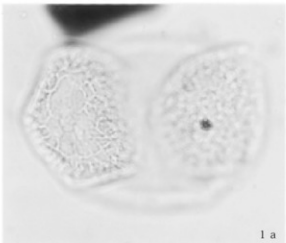
9 48図－66

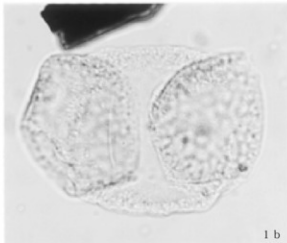

8 48図－68

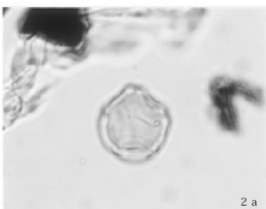
10 47図－46

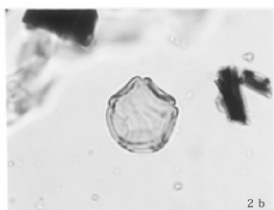

11 43図－4

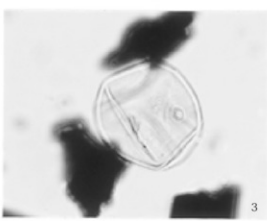
図版24　花粉分析

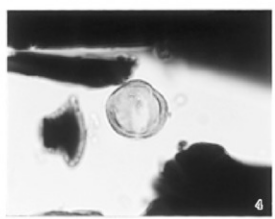








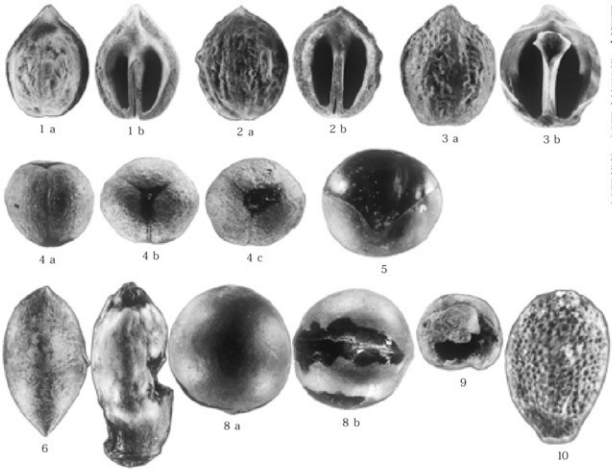


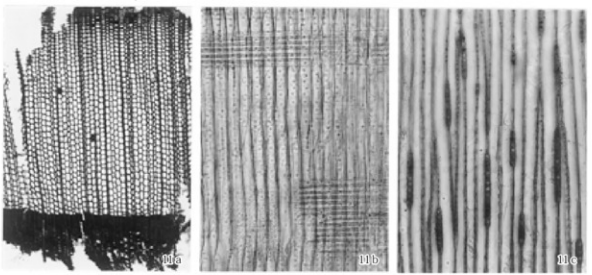


50μm

1．マツ属（試料番号40）
2．ハンノキ属（試料番号40）
3．イネ科（試料番号40）
4．ヨモギ属（試料番号40）

図版25　種実遺体同定・樹種同定





1．オニグルミ核（試料番号33）　6．イヌガヤ種子（試料番号32）
2．オニグルミ核（試料番号34）　7．コナラ亜属果実（試料番号37）
3．オニグルミ核（試料番号34）　8．クスノキ科種子（試料番号30）
4．トチノキ果実（試料番号36）　9．トチノキ種子（試料番号38）
5．トチノキ種子（試料番号31）　10．マタタビ属種子（試料番号38）
6．スギ（試料番号24）　a：木口、b：柾目、c：板目

報 告 書 抄 録

ふりがな	おおみないいせき
書名	大見内遺跡
副書名	県営ほ場整備事業（館合地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第374集
編著者名	石澤宏基・高橋直樹・西村裕人・麻生彩子
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター
所在地	〒014－0802　秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地　　ＴＥＬ0187－69－3331
発行機関	秋田県教育委員会
所在地	〒010－8580　秋田市山王３丁目１番１号　　ＴＥＬ018－860－5193
発行年月日	西暦2004年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
おおみないいせき 大見内遺跡	あきたけんひらかぐん 秋田県平鹿郡 おものがわまちうすい 雄物川町薄井 あざおおみない 字大見内 ほか 226－１外	05443	60－99	39度 18分 23秒	140度 26分 37秒	20020514 ～ 20020823	4,250㎡	県営ほ場整備事業（館合地区）に係る埋蔵文化財発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
おおみないいせき 大見内遺跡	集落跡	縄文時代 （中期以降） 奈良時代後半 ～ 平安時代前半 鎌倉時代以降	土器埋設遺構　１基 竪穴住居跡　３軒 掘立柱建物跡　２棟 土坑　21基 井戸跡　１基 溝跡　１条 河川跡　２条 柱穴様ピット 206基 性格不明遺構　５基 計242遺構	縄文土器・土製品 石器・石製品 土師器・須恵器 （墨書土器を含む） 土製品 （紡錘車など） 木製品 （曲物・箸・串・ 付け木など） 中世陶器・銭貨	雄物川右岸から約２km東の砂礫段丘（標高42～43m）上に営まれた縄文時代および奈良～平安時代の集落跡である。主体となる時代は、奈良時代後半（８世紀後半）から平安時代前半（９世紀末）までである。集落の中の河川で水辺祭祀が行われている。鎌倉時代以降は遺物のみ出土した。

秋田県文化財調査報告書第374集
大 見 内 遺 跡
－県営ほ場整備事業（館合地区）
に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－

印刷・発行　平成16年３月
編　　集　秋田県埋蔵文化財センター
〒014－0802 仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地
電話(0187)69－3331 FAX(0187)69－3330
発　　行　秋田県教育委員会
〒010－8580 秋田市山王３丁目１番１号
電話(018)860－5193
印　　刷　秋田協同印刷株式会社